岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第394集

諏訪前遺跡発掘調査報告書

東北新幹線建設事業および
新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

二　戸　市
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

諏訪前遺跡発掘調査報告書

東北新幹線建設事業および
新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

岩手県には縄文時代の遺跡をはじめとする多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成11年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,000箇所を越えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方では、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺構が消滅することはまことに惜しいことでありますが、その反面それまで闇に包まれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財の保護の立場に立って、その記録を残す措置を取ってまいりました。

本報告書は「東北新幹線建設事業」および「新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業」に関連して、平成12年度に発掘調査を行った諏訪前遺跡の調査結果をまとめたものであります。本遺跡では、中近世の竪穴建物跡・掘立柱建物跡の他、古代まで遡る可能性のある井戸跡が検出されております。特に中世の遺構に関しては、周辺の遺跡から規模の大きい鎌倉時代のものと思われる堀が検出されていることから、その集落を考察する上で貴重な資料となるものです。また縄文時代の居住跡は確認されなかったものの、早期～晩期まで幅広い時期の縄文土器が出土していることから、周辺に遺構の存在の可能性を示唆しており、今後調査が行われる周辺の遺跡におきましても有効な資料になると思われます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する啓蒙・普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書の作成にご援助・ご協力を賜りました二戸市新幹線対策課や二戸市教育委員会を始めとする関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年９月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　村　上　勝　治

例　言

1　本書は岩手県二戸市石切所字晴山15－1ほかに所在する諏訪前遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は、東北新幹線建設事業および新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会生涯学習文化課の指導と調整のもとに、二戸市新幹線対策課の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センターが実施したものである。

3　本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はＪＥ09－1073、当センターの調査略号はＳＷＭ－00である。

4　野外調査の期間、調査面積、担当者は以下の通りである。

平成12年４月12日～８月４日　4,472㎡　前田　稔、鈴木　聡

5　室内整理期間、担当者は以下の通りである。

平成12年11月１日～平成13年３月30日　前田　稔、鈴木　聡

6　出土品の鑑定は次の方々、機関に依頼した。

石器・石製品の石材鑑定	花崗岩研究会
火山灰分析鑑定	パリノ・サーヴェイ株式会社
井筒材樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
井筒保存処理	新日鐵グループ㈱ニッテツ・ファイン・プロダクツ
	釜石文化財保存処理センター
井筒取り上げ	テクノ株式会社

7　報告書の執筆については、前田　稔、鈴木　聡が行った。執筆の分担については、Ⅳ章の一部を鈴木が、その他を前田が担当している。

8　調査および室内整理に際しては次の方々、機関に御指導・御協力を賜った。（順不同・敬称略）

関豊・門島知二・西澤（二戸市教育委員会）、小田野哲憲・中村英俊・星雅之（岩手県教育委員会文化課）

9　野外調査は二戸市教育委員会をはじめ地元の方々のご協力をいただいた。

10　発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

11　調査成果は現地公開資料、調査略報ほかに掲載したが内容は本書が優先する。

目次

序
例言

【本文】

Ⅰ　調査に至る経過……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
　1．遺跡の立地と環境……4
　2．地質と基本層序……6
　3．周辺の遺跡……6
Ⅲ　野外調査と室内整理……12
　1．野外調査……12
　2．室内整理……13
Ⅳ　検出された遺構……17
　1．竪穴建物跡……17
　2．掘立柱建物跡……19
　3．井戸跡……21
　4．土坑……23
　5．墓壙……34
　6．溝跡……35
　7．焼土遺構……35
　8．柱穴状小土坑……38
Ⅴ　出土遺物……44
　1．土器……44
　2．土製品……47
　3．石器……47
　4．石製品……48
　5．陶磁器類……48
　6．銭貨……49
Ⅵ　考察まとめ……66
　1．遺構……66
　2．遺物……69
Ⅶ　分析・鑑定……71
　諏訪前遺跡出土火山灰の分析……71
　諏訪前遺跡から出土した井戸枠の樹種……74

報告書抄録

【図版】

第1図　岩手県図に見る遺跡の位置……1
第2図　遺跡位置図……2
第3図　地形分類図……5
第4図　トレンチ位置および層序……7
第5図　周辺の遺跡……10
第6図　凡例……13
第7図　周辺の地形図……14
第8図　グリッド配置図……15
第9図　遺構配置図……16
第10図　M6竪穴建物跡1号……18
第11図　D5掘立柱建物跡1号……20
第12図　B9掘立柱建物跡1号……22
第13図　N10井戸1号……24
第14図　N10井戸1号、v6井戸1号……25
第15図　P9土坑1号、O13土坑1号、M10土坑1号、G9土坑1号……27
第16図　D5土坑1号～4号、D6土坑1号～6号……31
第17図　D7土坑1号、C6土坑1号・2号、C7土坑1号、y7土坑1号、t7土坑1号……33
第18図　G9墓壙1号・2号、F6墓壙1号、F7墓壙1号、E11墓壙1号……36
第19図　溝1号、E12焼土1号……37
第20図　柱穴状小土坑(1)……40
第21図　柱穴状小土坑(2)……41
第22図　柱穴状小土坑(3)……42
第23図　柱穴状小土坑(4)……43

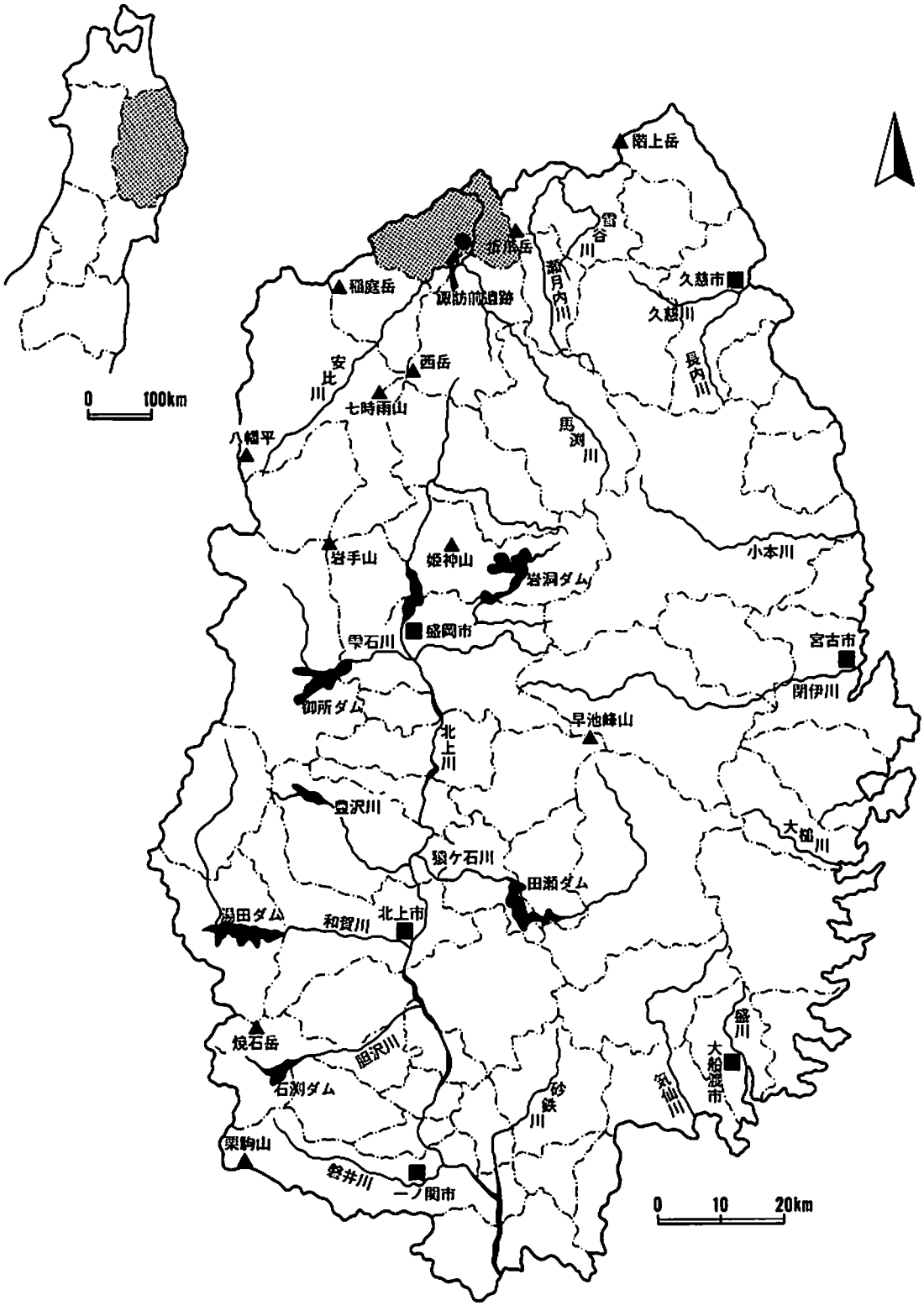
第24図　遺構内出土土器……50
第25図　遺構外出土土器（1）……51
第26図　遺構外出土土器（2）……52
第27図　遺構外出土土器（3）……53
第28図　遺構外出土土器（4）……54
第29図　遺構外出土土器（5）……55
第30図　遺構外出土土器（6）……56
第31図　土製品……57
第32図　遺構内出土石器……58
第33図　遺構外出土石器（1）……59
第34図　遺構外出土石器（2）……60
第35図　遺構外出土石器（3）……61
第36図　石製品……62
第37図　陶磁器類……63
第38図　銭貨（1）……64
第39図　銭貨（2）……65
第40図　諏訪前遺跡出土土器の口唇部形状……70
第41図　火山ガラスの屈折率・重鉱物組成および
　　ガラス比……73

【写真図版】

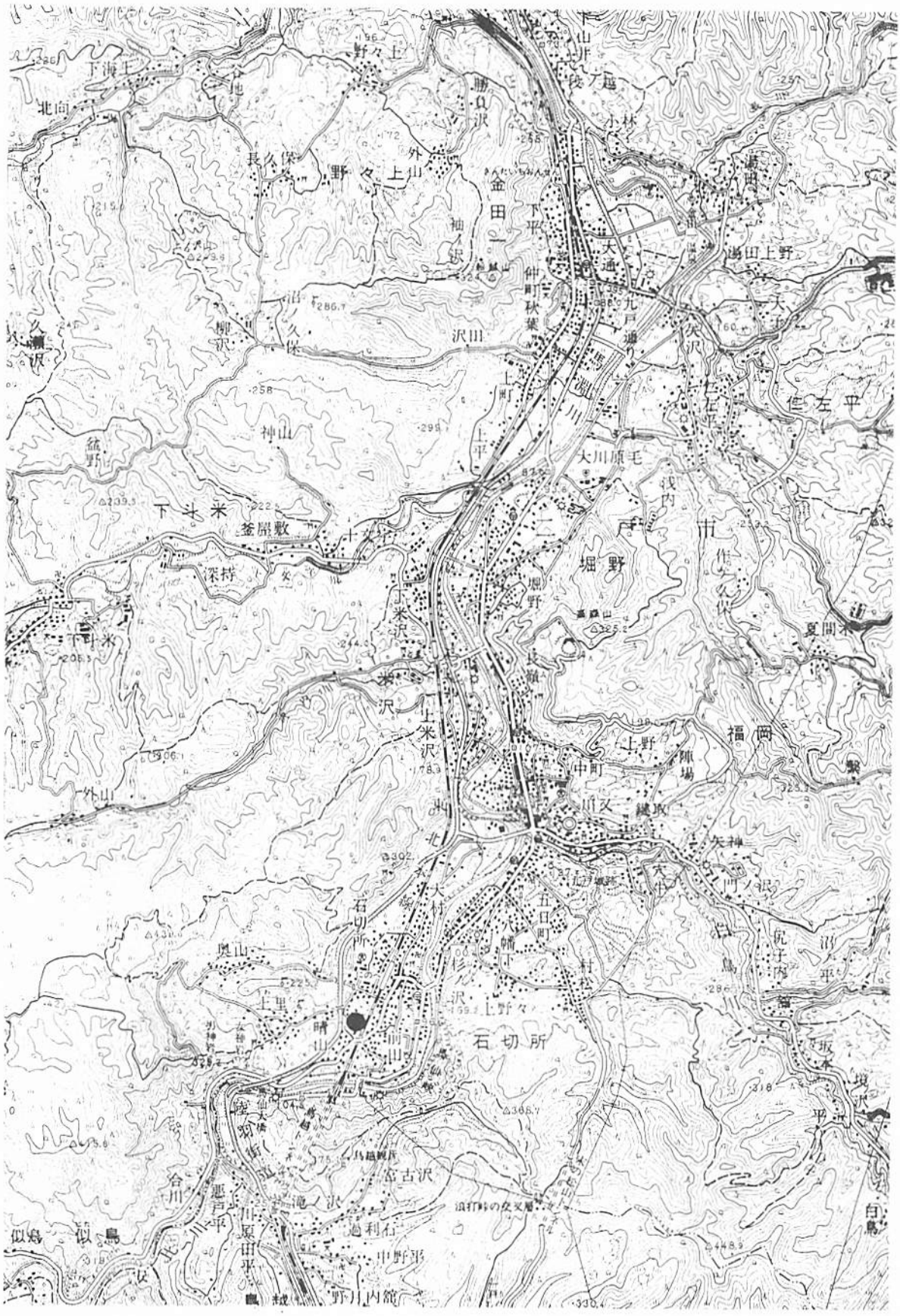
写真図版1　調査区全景……83
写真図版2　1号水路、土器出土状況……84
写真図版3　M6竪穴建物跡1号……85
写真図版4　D5掘立柱建物跡1号……86
写真図版5　B9掘立柱建物跡1号……87
写真図版6　N10井戸1号……88
写真図版7　v6井戸1号、P9土坑1号、
　　O13土坑1号、M10土坑1号……89
写真図版8　G9土坑1号、D5土坑1号～3号……90
写真図版9　D5土坑4号、D6土坑1号～3号……91
写真図版10　D6土坑4号～6号、D7土坑1号……92
写真図版11　C6土坑1号・2号、C7土坑1号、
　　y7土坑1号……93
写真図版12　t7土坑1号、F6墓壙1号、溝1号、
　　E12焼土1号……94
写真図版13　遺構内出土土器……95
写真図版14　遺構外出土土器（1）……96
写真図版15　遺構外出土土器（2）……97
写真図版16　遺構外出土土器（3）……98
写真図版17　遺構外出土土器（4）……99
写真図版18　土製品……100
写真図版19　遺構内出土石器……101
写真図版20　遺構外出土石器（1）……102
写真図版21　遺構外出土石器（2）……103
写真図版22　遺構外出土石器（3）・石製品……104
写真図版23　陶磁器類……105
写真図版24　銭貨……106
写真図版25　N10井戸1号出土のテフラ・重鉱物
　　……107
写真図版26　N10井戸1号出土井筒の樹種……108

【表】

第1表　古代の集落……8
第2表　中近世の集落……8
第3表　周辺の遺跡……11
第4表　M6竪穴建物跡1号柱穴計測表……17
第5表　D5掘立柱建物跡1号柱穴計測表……19
第6表　B9掘立柱建物跡1号柱穴計測表……21
第7表　柱穴状小土坑計測表……38
第8表　土器観察表……76
第9表　土製品観察表……78
第10表　石器・石製品観察表……78
第11表　陶磁器類観察表……79
第12表　銭貨観察表……79



第１図　岩手県図に見る遺跡の位置


下海上
北向
長久保
野々上
外山
金田
袖ノ沢
柳沢
沢田
神山
益野
下斗米
釜屋敷
深持
下斗米
米沢
上米沢
外山
大通
九戸通
仲町秋葉
上町
上平
大川原毛
浅内
堀野
長嶽
夏間木
福岡
上野
陣場
中町
川又
縄取
矢神
門ノ沢
石切所
奥山
晴山
上野々
石切所
古古沢
似鳥
谷川
悪戸平
泉田平
過利石
中野平
野川内館
白鳥

第２図　遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経過

諏訪前遺跡の発掘調査は、東北新幹線盛岡・八戸間建設事業および新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業に係り、その施工区域に所在する埋蔵文化財の記録保存を図ることを目的として実施した緊急発掘調査である。

東北新幹線は昭和48年に盛岡・青森間の整備計画が策定され、平成３年に盛岡・沼宮内間および八戸・青森間は新幹線鉄道直通線（ミニ新幹線）とし、沼宮内・八戸間は標準軌新線（フル規格新幹線）として実施計画が認可され、同年９月に盛岡・青森間の建設工事に着手した。その後、平成７年に盛岡・沼宮内間がフル規格新幹線に変更になり、現在、盛岡・八戸間96.6kmの新幹線工事が本格的に進められている。

また、八戸・新青森間については、平成10年３月に標準軌新線（フル規格新幹線）として実施計画の認可を受けて同年７月に八甲田トンネル出口の工事に着手している。

盛岡・八戸間の埋蔵文化財包蔵地については、平成４年度以降に岩手県教育委員会事務局が分布調査・試掘調査等を実施しており、平成９年度現在、30遺跡の所在が確認されているが、試掘調査の結果４遺跡については調査不要となっている。

一方、二戸市施工の「新幹線二戸駅周辺土地区画整理事業」は平成８年に都市計画決定を行い、同年12月に事業計画の決定の告示を行った。施工期間は平成８年～22年度、施工面積88.4ha等の計画で、新幹線用地を巻き込んだ区画整理として始まっている。

諏訪前遺跡は二戸市教育委員会が発掘調査を行う予定であったが、調査の規模および予想される遺構数等を検討した結果、現在の体制ではとうてい対応できないとのことから、二戸市新幹線対策課では岩手県教育委員会に援助の要請をした。該当地は新幹線用地でもあることから、岩手県交通政策課の援助も受けて岩手県教育委員会文化課と協議を重ね、平成11年12月14日付け新第333号で発掘依頼を行い、岩手県教育委員会から平成11年12月24日付教文第987号にて承諾の回答を得た。

これを受けて（財）岩手県文化振興事業団は諏訪前遺跡について同年４月３日付けで発掘調査業務委託を締結し、同年４月12日から発掘調査を開始した。また、当初は新幹線本線部分4,000㎡の発掘依頼であったが、隣接する擁壁部分472㎡について同理由により追加依頼が行われ、計4,472㎡の発掘を行った。

なお、発掘調査は12年度で完了し、平成13年度に報告書を刊行するものである。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．遺跡の立地と環境

諏訪前遺跡は上里遺跡群に属する遺跡である。岩手県二戸市石切所字晴山15－1ほかに所在し、東日本旅客鉄道東北本線二戸駅の南西約550mの地点にある。地形図上では、国土地理院発行の5万分の1地形図の「一戸」図幅に含まれ、緯度は北緯40度15分14～19秒、経度が東経141度17分06～21秒の範囲に位置している。遺跡の所在する二戸市は、岩手県の北端部に位置して青森県に接し、北側は青森県三戸町、同名川町、西側は青森県田子町、浄法寺町、南側は一戸町、東側は九戸村、軽米町に隣接している。また、東を北上山地、西を奥羽山脈に挟まれた馬淵川水系中流域に立地し、面積が238.17km²、人口が約3万人の、岩手県北内陸地域では最も大きい都市である。

市中心部を流れる馬淵川は、流域面積2,050m²、幹線流路延長142kmの河川で、葛巻町東端部の北上山地を源とし、葛巻町、一戸町、二戸市、青森県三戸町を流れ、八戸市で太平洋にそそいでいる。この河川の大部分は、狭い河岸段丘と深い浸食谷が続く。

遺跡のある地域は、馬淵川が大きく東側に膨らんだ馬仙峡付近の北西岸に形成された河岸段丘上に立地し、遺跡と馬淵川との比高はおよそ27m程である。二戸市石切所と下山井の間、約8kmの区間は、馬淵川はゆるやかに曲流し、最大幅が1.5km程度の谷底平野が形成されている。この谷底平野は、高さや生成時期によって、いくつかの段丘に区別することができる。（第3図）大池正二ら（1966）によって、この段丘は上位から仁左平段丘・福岡段丘・米沢段丘・堀野段丘に区分されている。以下にそれぞれの段丘の概略を示す。

［仁左平段丘］仁左平付近や馬淵川の東岸川又地区の東部付近に分布する。標高は140～220m程の丘陵性段丘で、数10mの砂礫・砂・粘土層を主な構成層とし、上位に高舘火山灰層以上の火山灰を載せる。

［福岡段丘］金田一・川又・五日市町・米沢・上里等のほか海上川や十文字川流域に比較的広範囲に広がっている。標高は110～140m程を測る。八戸浮石流凝灰岩に当たる火山灰流凝灰岩を主たる構成層とし、シラス台地としての性格をもっている。

［米沢段丘］馬淵川の両岸に広く分布する段丘で、二戸市の市街地の多くはこの面に発達している。河床面との比高は約25mで、標高100～110mのほぼ水平に近い平坦面を呈している。円磨された中礫によって構成され、その上位に南部浮石とそれより上位の浮石や火山灰を載せている。

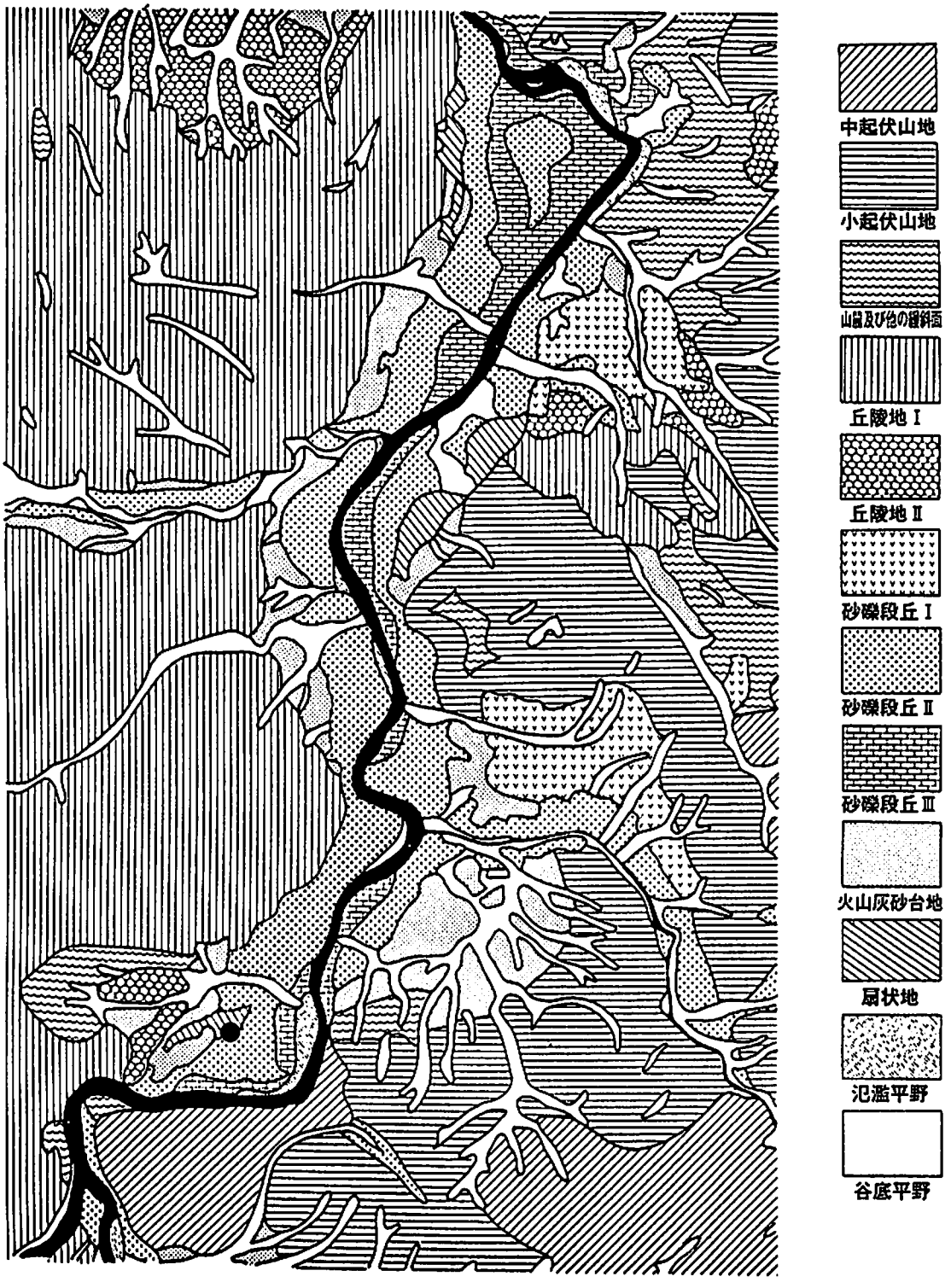
［堀野段丘］大池ら（1966）は金田一や堀の付近を標式とし馬淵川両岸に細長く分布するとしている。標高は90～100mである。大池らはこの段丘には南部浮石を載せないとの特徴を示しているが、草間（1965）や関（1981）による堀野遺跡の調査で南部浮石層が確認されている。松山力（1981）はこのことと川面からの比高・段丘の性格からみて、堀野段丘と米沢段丘を一つの段丘としてよいととらえている。

本遺跡は標高がおよそ119m程であることから、福岡段丘相当であるが、第3図の地形分類図によると、本遺跡はそのほとんどが扇状地に立地している。調査区の現況には河川はないが、現在下水路となっている箇所付近の土層断面下位には砂層が見えることから、過去に河川が流れていたことが想定される。

引用文献

松山力　1981　二戸市教委『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

(財)岩埋文　1983『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第55集



● 諏訪前遺跡

第3図　地形分類図

2．地質と基本層序

二戸市周辺は新世代第三紀層である、砂岩・凝灰岩・凝灰質砂岩、あるいは礫岩などが分布している。これらの地域は、表層を十和田火山起源などの火山砕屑物で厚くおおわれている。今回の調査では、八戸火山灰層、南部浮石層、中掫浮石層、十和田ｂ降下火山灰、十和田ａ降下火山灰が確認された。調査区の基本層序は、部分的に層を欠く区域もあるが、９層に大別され、おおむね下記のような層序となっている。調査区土層断面からは、十和田ａ降下火山灰は検出されなかった。

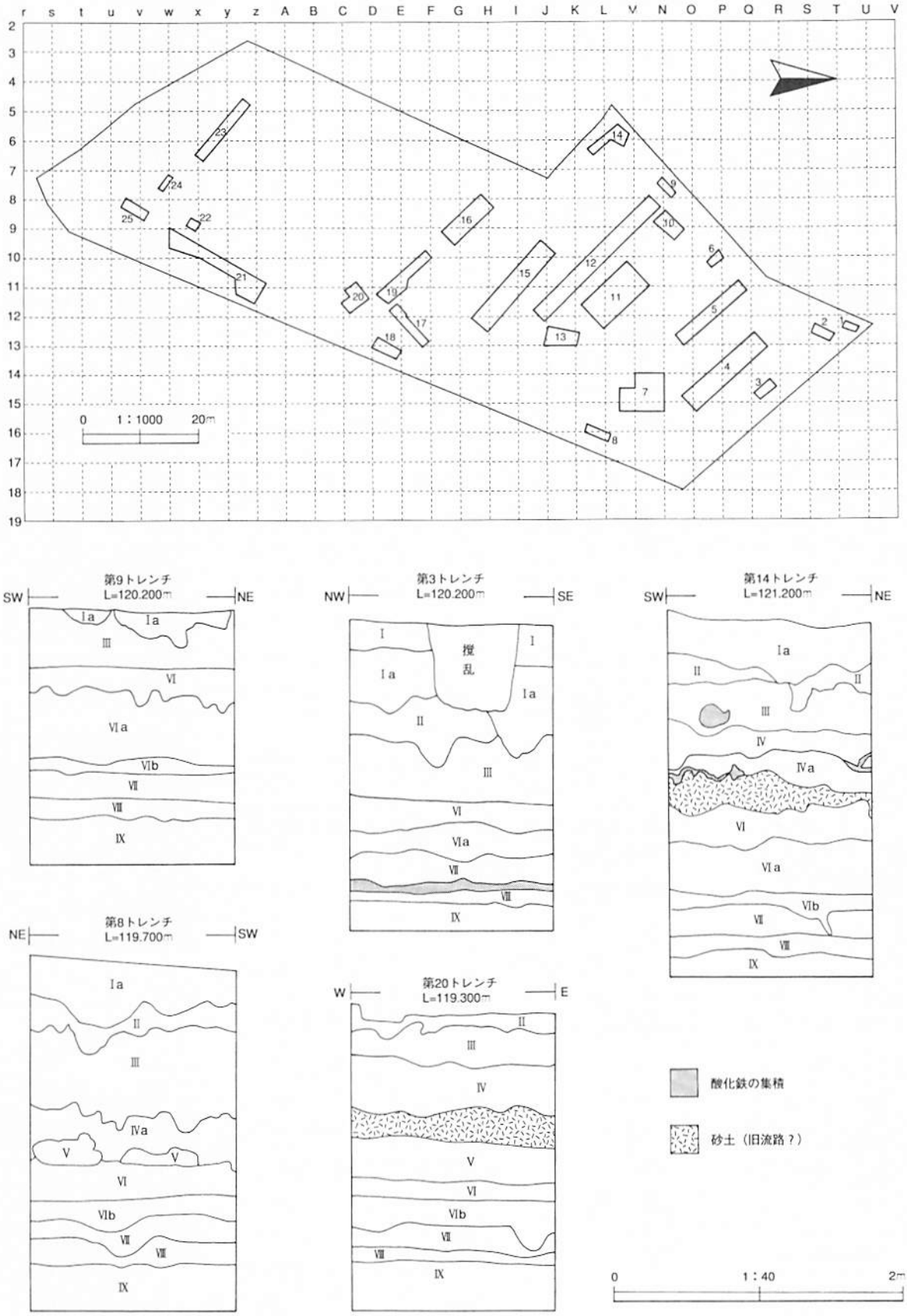
Ⅰ　層	黒褐色土	現在の表土・耕作土
Ⅰａ層	黒褐色土	盛り土
Ⅱ　層	黒色土	十和田ｂ火山灰が混入する
Ⅲ　層	黒褐色～褐色砂質土	南部浮石・中掫浮石が混入する
Ⅳ　層	黒褐～暗褐色砂質土	中掫浮石が混入する
Ⅳａ層	暗褐色砂質土	中掫浮石が混入する
Ⅴ　層	浅黄色砂土	中掫浮石層
Ⅵ　層	黒色土	南部浮石が混入する
Ⅵａ層	暗褐～褐色土	南部浮石が混入する
Ⅵｂ層	黒色土	南部浮石が混入する
Ⅶ　層	黄褐色浮石	南部浮石層
Ⅷ　層	黒褐色粘土質土	南部浮石が混入する
Ⅸ　層	明褐色～黄褐色粘土質土	八戸火山灰層

調査開始時の遺構検出面はⅡ層下位～Ⅲ層で、Ⅲ層でほとんどの遺構が検出されている。また縄文時代早期末葉の土器がⅥ層から、前期・中期の土器がⅣ層から、縄文時代中～晩期の土器、陶磁器類・銭貨がⅡ～Ⅲ層から出土している。調査Ａ区はほぼ平坦であるが、調査Ｂ区は北西側から南東側に向けて緩やかに傾斜する地形である。標高も、調査Ｂ区は宅地を造成する際に掘削されたのか、調査Ａ区に比べて低い。第14・20トレンチは、過去に水路が流れたことを示しており、第20トレンチＶ層中掫層は砂との混土である。

3．周辺の遺跡

二戸市に所在する遺跡は、岩手県教育委員会が作成した「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」(1999) によると、161カ所が登録されている。おもに、金田一地区～石切所地区までの馬淵川流域、海上地区～上斗米地区までの金田一川流域、下斗米地区～足沢地区までの十文字川流域、似鳥地区～福田地区までの安比川流域に分布する。遺跡の時期は、縄文時代～近世と広範囲に亘る。集落跡として記載してあるのは、縄文時代12遺跡、弥生時代２遺跡、古代21遺跡である。

第５図と第１表は諏訪前遺跡周辺の遺跡44箇所の分布状況を示したものである。当埋蔵文化財センターでは、二戸市において国道４号線二戸バイパス関連・国道４号線金田一バイパス関連・東北縦貫自動車道関連等に関連して多くの遺跡の発掘調査を行ってきた。また二戸市教育委員会でも発掘調査を進めている。これらにより、縄文時代早期から近世まで数多くの遺構を検出し成果を上げてきた。今回、諏訪前遺跡で検出された遺構には、古代まで遡る可能性がある井戸跡、中世竪穴建物跡、近世の掘立柱建物跡などがある。ここでは本遺跡で検出されている遺構との関連から、諏訪前遺跡周辺の遺跡の中で、古代・中世・近世の遺跡について触れることとする。なお表のNoは、第１表における遺跡の番号である。



第４図　トレンチ位置および層序

（1）古代の集落

発掘調査により、古代の遺構が確認されたものは下表のとおりである。馬淵川流域の河岸段丘上に集落をつくっている様子が伺える。上田面遺跡・長瀬A遺跡・長瀬B遺跡・長瀬C遺跡・長瀬D遺跡・堀野遺跡を含む現堀野地区周辺、中曽根Ⅱ遺跡では集落が大きい。また、表には載っていないが、金田一地区の駒焼場遺跡では、奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡が45棟検出されている。以下に調査が行われた遺跡の中で、竪穴住居跡が確認された遺跡とその遺構数を示す。

第1表　古代の集落

No	遺跡番号	遺跡名	竪穴住居跡数	その他の遺構	報告書
12	IF90-0000	堀野	11（平安）		福岡町教委他1965
14	IE89-2387	上田面	33（奈良31） （平安2）	竪穴状遺構7、 掘立柱建物跡（古代～）2、 円形に巡る溝1条	岩埋文第23集
16	JE09-1273	長瀬A	11	土坑1	岩埋文第23集
17	JE09-1273	長瀬B	32（奈良25） （平安7）	竪穴状遺構4、掘立柱建物跡2、 土坑8、周溝2	岩埋文第36集
18	JE09-1273	長瀬C	24		岩埋文第22集
			6		岩埋文第51集
19	JE09-1273	長瀬D	6		岩埋文第22集
24	IE99-0390	米沢	2		岩埋文第132集
33	JE09-0314	中曽根	6	土坑2	二戸市教委1978
34	JE09-0314	中曽根Ⅱ	78	土坑35、 円形周溝（弥生末期～奈良初頭）28	二戸市教委1981
40	JE09-1211	火行塚	11（平安）	周溝6（平安）、 土坑10（奈良末～平安）	岩埋文第23集

（2）中近世の集落

二戸市は、天正19（1951）年の「九戸政実の乱」で知られる九戸氏の本拠地で、九戸城(1)は国の史跡に指定されて、現在も発掘が進められている。また九戸城周辺では橋場遺跡で九戸城の土塁が検出されている。

近世の遺跡は調査例が少ない。中近世関連の遺跡で調査が行われ、遺構が検出されているものは次の表のとおりである。なお、基本的に時期を明確に示しているものを取り上げた。

第2表　中近世の集落

No	遺跡番号	遺跡名	時代	遺構・規模	報告書
8	IF80-1078	八ツ長Ⅱ	中世	竪穴建物跡7、土坑1	岩埋文第168集
17	JE09-1273	長瀬B	近世	土坑墓14	岩埋文第36集
18	JE09-1273	長瀬C	中世	竪穴建物跡10	岩埋文第22集
19	JE09-1273	長瀬D	中世	竪穴建物跡1	岩埋文第22集
20	JE09-0356	家ノ上	中世	竪穴建物跡1	岩埋文第35集
30		下村B	中世	竪穴遺構2	岩埋文第56集
22		沢内B	中世	竪穴建物跡4、土坑2	岩埋文第7集
6	IF80-1048	沖Ⅰ	中世	竪穴建物跡1	岩埋文第152集

No	遺跡番号	遺跡名	時代	遺構・規模	報告書
35	JE09-0356	橋場	中世	土塁（九戸城）	二戸市教委1984
41	JE09-1273	上里	中世	竪穴建物跡１　堀跡１	岩埋文第55集
42	JF00-0053	在府小路Ⅱ 在府小路Ⅵ	中近世 中近世	掘立柱建物跡、溝（以上中世） 掘立柱建物跡１、溝２（以上中世）	二戸市教委1996
43	JF00-0053	九戸城	中近世	本丸、二の丸、若狭館、石沢館、松の丸、三の丸（以上中世）	二戸市教委1980
				掘立柱建物跡１、礎石立建物跡１、柵跡１（以上中世）、土塁、土坑２、溝１、周溝状遺構１（以上近世）	二戸市教委1995
29	IE99-1393	下村	中近世	竪穴建物跡３、掘立柱建物跡１（中世）、掘立柱建物跡２（中世末～近世初）、掘立柱建物跡16（近世）	岩埋文第323集

引用・参考文献

福岡町教育委員会1965「堀野遺跡」二戸市教育委員会1996「在府小路遺跡Ⅱ」

二戸市教育委員会1978「中曽根遺跡」二戸市教育委員会1996「在府小路遺跡Ⅳ」

二戸市教育委員会1981「中曽根Ⅱ遺跡」二戸市教育委員会1980「史跡九戸城跡」

二戸市教育委員会1984「橋場遺跡(九戸城跡)」二戸市教育委員会1995「史跡九戸城跡」

(財)岩埋文* 1984「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第７集

(財)岩埋文　1981「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第22集

(財)岩埋文　1981「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第23集

(財)岩埋文　1982「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第35集

(財)岩埋文　1982「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第36集

(財)岩埋文　1983「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第51集

(財)岩埋文　1983「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第55集

(財)岩埋文　1983「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第56集

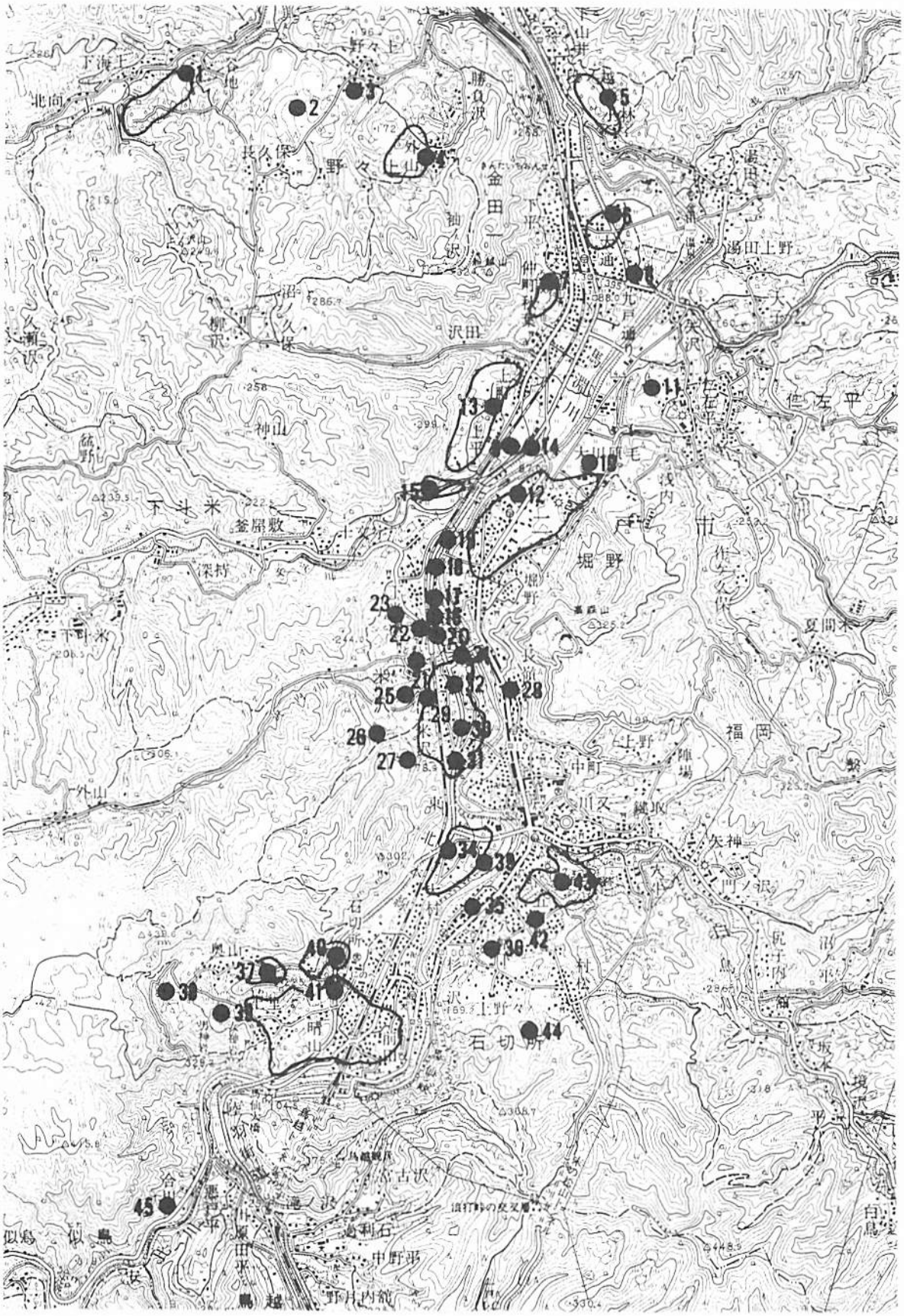
(財)岩埋文　1988「主要地方道三十刈家ノ上線改良工事関連発掘調査報告書」文化財調査報告書第132集

(財)岩埋文　1990「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第152集

(財)岩埋文　1992「国道4号金田一バイパス関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第168集

(財)岩埋文　2000「東北新幹線盛岡・八戸間建設事業関連遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第323集

＊(財)岩埋文は、(財)岩手県埋蔵文化財センター、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの略である。


下海上
北向
長久保
野々上
金田
沼ノ久保
沢田
神山
下斗米
釜屋敷
深村
堀野
福岡
上野
中町
川又
矢神
門ノ沢
石切所
晴山
奥山
外山
村松
湯田上野
左平
作左平
夏間木
白鳥
似鳥
中野平
野月内館
原田平
馬越
合山
悪戸平
滝沢
古沢
迫利石

第５図　周辺の遺跡

第3表　周辺の遺跡

	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
1	海上館	城館跡	中世	堀切	文献「古城館址考」
2	林向	散布地	縄文	縄文土器	
3	野ノ上Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	
4	上ノ沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
5	段ノ越	散布地	縄文	縄文土器	
6	沖	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	S63,H2調査→岩埋文（1990）
7	四戸城（金田一城）	城館跡	中世末～近世	空堀、平場、土塁	文献「古城館址考」
8	八ツ長Ⅱ	散布地	縄文・古代・中世	縄文土器、中世住居、土師器	H2調査→岩埋文（1992）
9	上田面Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	
10	大川原毛	散布地	縄文	縄文土器	
11	戸花	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	
12	堀野	集落跡・祭祀跡	縄文・古代	古墳、蕨手刀、竪穴住居、配石	S28,37～39岩大発掘調査
13	上町	散布地	縄文	縄文土器	
14	上田面	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器（早期）、方形周溝墓、平安住居跡、土師器、鉄製品	S51,52県文化課が調査。（バイパス関連）、S52,53調査→岩埋文（1981）
15	海老田	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	
16	長瀬A	集落跡	縄文・古代	竪穴住居、奈良・平安住居跡	S56調査→岩埋文（1982）
17	長瀬B	集落跡	縄文・古代	縄文早期住居跡、奈良・平安住居跡	S51,52調査→岩埋文（1982）
18	長瀬C	集落跡	縄文・古代・中世	奈良・中世住居跡、土師器	S56調査→岩埋文（1983）
19	長瀬D	集落跡	縄文・中世	縄文晩期住居跡、中世住居跡、火葬墳墓	S52調査→岩埋文（1981）
20	家ノ上	集落跡	縄文・中世	縄文早期、中～後期住居跡、中世住居跡	S56調査→岩埋文（1982）
21	沢内	集落跡	縄文	縄文後期住居跡、縄文土器（後晩期）	S52調査→岩埋文（1978）
22	沢内B	集落跡	縄文	縄文中期住居跡、中世住居跡、陶磁器	S53調査→岩埋文（1978）
23	佐佐木館（稲荷館）	散布地・城館跡	縄文・中世	縄文土器、土師器、堀	文献「古城館址考」
24	米沢（米沢館・エン館）	集落跡・城館跡	中世	竪穴住居跡、工房跡、土壙群	S47～52県文化課が調査。（二戸バイパス関連）、S62調査→岩埋文（1988）
25	上平Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	
26	上平Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器（晩期）、土師器	
27	上平Ⅳ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	
28	長嶺	散布地	縄文	縄文土器	
29	下村	集落跡	縄文・古代	縄文前期、中期住居跡、縄文土器（前～中～後期）、配石	S51県文化課、S60二戸市教委調査。（二戸バイパス関連）、H8調査→岩埋文（2000）
30	下村B	集落跡	縄文	縄文中期住居跡、縄文土器（中～後期）	S49,50調査→岩埋文（1983）
31	上村	集落跡	縄文	縄文中期住居跡、縄文土器（中期）	S49,50調査→岩埋文（1983）
32	荒谷A	集落跡	縄文	縄文中期住居跡、縄文土器（中期）	S50,51調査→岩埋文（1983）
33	中曽根	集落跡	縄文・古代・中世	住居跡、円形周溝、土壙群	S52（市道中曽根線）、S53～54（二戸バイパス関連）調査→二戸市教委（1978）
34	中曽根Ⅱ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器	S53,54調査→二戸市教委（1981）
35	橋場	城館跡	縄文・中世	縄文岩偶（晩期）、土塁（棄破壊）	S57二戸市教委調査
36	八幡下	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	
37	横長根	散布地	縄文	縄文土器	
38	土川Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
39	土川Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	
40	火行塚	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文前期住居跡、弥生包含層、弥生土器類、土師器	S53,54岩埋文センター調査。二戸バイパス関連
41	上里	集落跡・城館跡	縄文・中世	大型住居、フラスコ土坑群、堀跡、人骨、獣骨、土製品	S53,54岩埋文センター調査。二戸バイパス関連、S60～62二戸市教委調査
42	在府小路	散布地・城館跡	縄文・中近世	縄文土器、堀跡、陶磁器	九戸城関連遺址
43	九戸城(白鳥城・福岡城)	城館跡	中近世	縄文土器、堀跡、石垣、柵形	S10国指定。本丸、二ノ丸、三ノ丸（指定地外）松ノ丸、石沢館、若狭館からなる
44	村松館	城館跡	近世		文献「古城館址考」

Ⅲ　野外調査と室内整理

1．野外調査

（1）調査区の概要

調査区の現況は、本調査区の中央部分に流れる下水路から北方は畑地、南方は宅地であった。当埋蔵文化財センターが行う野外調査は、二戸市新幹線対策課との発掘調査業務委託契約の中で、遺構検出面からの調査を行うことになっていたため、二戸市教育委員会では表土から遺構検出面までの調査を、「株式会社シン技術コンサル」に委託した。なお当埋蔵文化財センターが調査を開始する時点では、下水路から北方だけが遺構検出面まで掘削されていたため、調査をこの区域から始めた。この報告書では便宜上、下水路から北方を調査Ａ区、下水路から南方を調査Ｂ区とする。野外調査期間は平成12年４月12日～８月４日であった。

（2）調査区の設定と遺構の呼称

本遺跡の調査区域は、東西約80m、南北約145m、北北東～南南西方向に最大長をもつ。「株式会社シン技術コンサル」が設定した基準点は以下のとおりである。

Ｔ－１　Ｘ＝＋28,145.067　Ｙ＝＋38,582.045　Ｈ＝119.724

Ｔ－２　Ｘ＝＋28,181.317　Ｙ＝＋38,597.570　Ｈ＝119.732

また「株式会社シン技術コンサル」では、図面上で、基準点から平面直角座標を組み、調査Ａ区を網羅するグリッドを設定していたので、本調査においてもそのグリッド名を用いて調査区全体まで広げたグリッドを設定した。グリッドは５m毎の小区画で、南側～北側に向かってＡ～Ｚおよび、ｒ～Ｚの名称を付け、西側～東側に向かって１～100の名称となる。遺物の取り上げや遺構名の命名は、北西を起点としており、遺構名は、原則としてグリッドと遺構の種類を組み合わせて、Ｍ６竪穴建物跡１号、Ｐ９土坑１号などと呼称した。遺構が二つ以上のグリッドにかかる場合は、原則として検出時のプランで北端が含まれるグリッドで遺構名を命名した。ただし溝跡・水路は多グリッドに亘るため、溝１号・１号水路と呼称した。柱穴状土坑はＰ１から通し番号で命名している。なお本報告書で使用した名称は、調査時の名称を整理し改名しているものもある。

（3）粗掘り、遺構検出・精査

任意に設定したトレンチで、土層の堆積状況と遺構・遺物の残存状況の把握につとめた。第４図はトレンチを入れた地点を示す。初めはⅡ層下位～Ⅲ層で遺構検出を行った。土層断面に十和田ａ降下火山灰層はなく、遺構埋土として検出されている。無遺構区域は人力・重機で掘削し、Ⅳ～Ⅵ層で遺構検出に務めた。

検出された遺構は２分法、４分法を用いて精査を行い、必要な記録はフィールドカードに記録した。

（4）実測・写真撮影

遺構の平面実測は小グリッド（５×５m）をさらに１×１mのメッシュに区切り、簡易遣り方測量で行った。縮尺は１／20を原則とし、必要に応じて任意の縮尺の図面を作成した。

写真撮影は６×９版モノクロ・35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル用のカメラを各１台ずつ使用し、遺構の平面・断面・遺物出土状況を中心に撮影を行った。

2．室内整理

室内整理については、平成12年８月１日から平成13年３月30日までの７カ月間の室内整理を実施した。よって、調査員は平成12年８月１日～10月31日まで野外調査と並行して行った。

（1）遺構図面

遺構図面は、野外調査時は平面図、断面図ともに縮尺1/20を原則とし、必要に応じて1/5、1/10で作成を行った。必要に応じて、それらを修正・合成した第二原図を作成し、トレースを行った。

（2）遺物

遺物は、洗浄（遺物水洗）と出土地点ごとの仕分けを現場で野外調査と並行して進めた。注記・接合・復元を行った後に、登録・選別の作業を行った。

（3）写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルムの規格ごとにモノクロはネガアルバムに、リバーサルフィルムはスライドアルバムに、ポラロイドはアルバムに整理した。

（4）報告書について

〈遺構の記載〉　竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、墓壙、溝跡、焼土遺構、柱穴状小土坑の順で行う。同種遺構では、北方に位置するものから順に記載する。

〈遺物の掲載〉　掲載順に１から連番を付けている。遺物掲載番号は、図版･写真とも同一の番号である。

〈遺構図版〉　1/60を基本とするが、遺構の性格に応じて縮尺を変えている。但し、三角スケールで計測できる定型縮尺とし、挿図の右下にスケールを付けている。掲載順は遺構の事実記載に準じている。

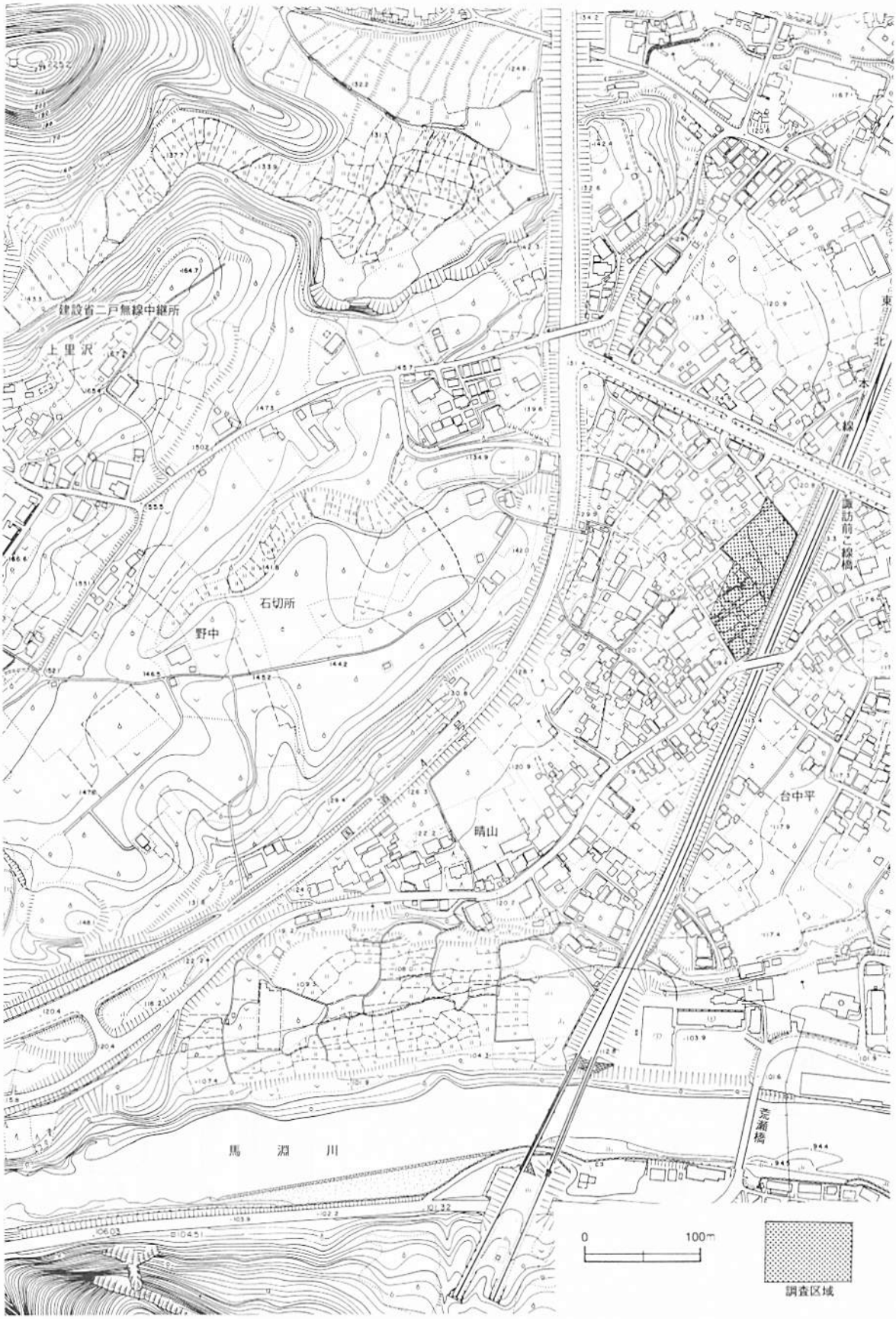
〈遺物図版〉　土器類を1/3を基本として大きさにより1/4・1/6、石器類を2/3～1/6で掲載した。

〈遺構写真図版〉　全て任意である。掲載順は、事実記載や遺構図版と同様である。

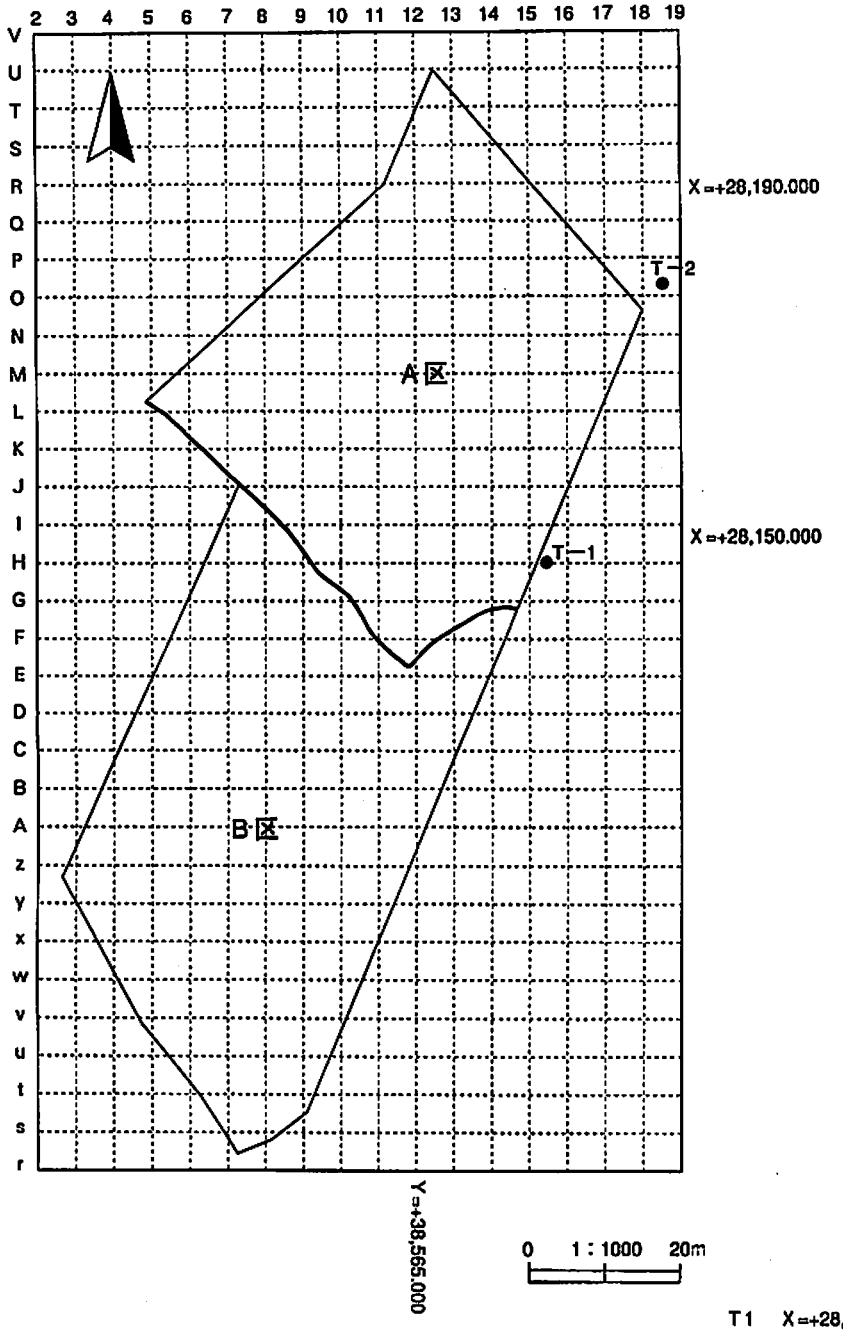
〈遺物写真図版〉　土器類1/3・石器類2/3・1/3を基本とする。

〈凡　例〉

第６図　凡例



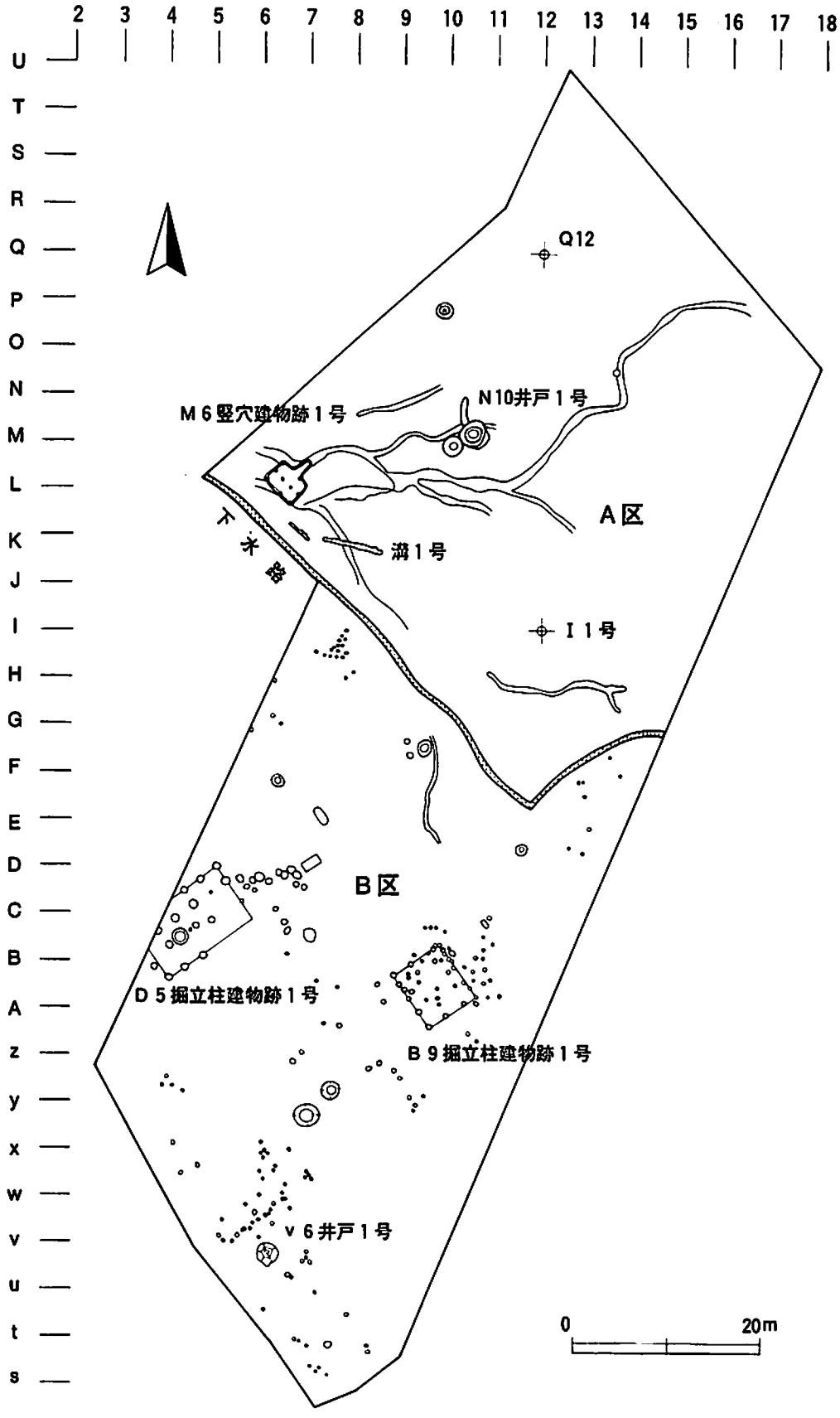
第７図　周辺の地形図



T1 X=+28,145.067
Y=+38,582.045
H=119.724

T2 X=+28,181.317
Y=+38,597.570
H=119.732

第8図　グリッド配置図


2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18
U T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B A z y x w v u t s
Q12
M6竪穴建物跡1号
N10井戸1号
A区
下水路
溝1号
I1号
B区
D5掘立柱建物跡1号
B9掘立柱建物跡1号
v6井戸1号
0
20m

第9図　遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構

検出された遺構は、竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡２棟、井戸跡２基、土坑20基、墓壙５基、溝１条、焼土遺構１基、柱穴状小土坑199基である。第９図に遺構配置図を掲載している。時代は推定を含め、古代・中世・近代である。個々の遺構の記載は、上記の順に行う。

１．竪穴建物跡

調査Ａ区で１棟が検出されている。形状的特徴は、張り出し部が壁中央部にみられることである。

Ｍ６竪穴建物跡１号（第10図、写真図版３）

〈位置〉　調査区Ａ区ほぼ西端のＭ６グリッドⅢ層で、黒色土のプランを検出した。

〈重複関係〉　調査区Ａ区を横断する１号水路と重複し、当竪穴建物跡が新しい。

〈埋土〉　中振浮石を少量混入する黒色シルトの単層である。

〈規模・形状〉　平面形は、北西－南東約４ｍ、北東－南西約３ｍの長方形状を呈する。壁高はおよそ30～40cmを測り、北西壁が高く、南東壁が低い。張り出し部は北東壁中央部につくられ、端部から１ｍ程のところまで緩やかに傾斜し、その後床面と同じ深さまで掘り込まれている。

〈建物方位〉　張り出し部方位は、Ｎ－47°－Ｅである。

〈柱穴配列〉　壁沿いの床面および中央部から11基検出された。いずれも主柱穴と思われる。

〈柱間配列〉　北西壁の約2.55ｍ８尺４寸は北東から1.18ｍ＋1.37ｍの２間、南西壁の約3.57ｍ11尺８寸は北西から2.01ｍ＋0.87ｍ＋0.69ｍの３間、南東壁2.64ｍ８尺７寸は北東から1.26ｍ＋1.38ｍの２間、北東壁3.45ｍ11尺４寸は南東から1.10ｍ＋2.35ｍの２間にそれぞれ細分される。

〈柱穴規模〉　平面形は円形を基調とする。P53・P55・P56・P70・P76・P77は屋外柱穴の可能性がある。

第４表　Ｍ６竪穴建物跡１号柱穴計測表

柱穴No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	20×18	28×25	25×23	23×21	25×24	25×21	18×17	28×26	25×16	14×12
深　　さ(cm)	16.7	17.6	22.0	16.8	11.7	17.3	16.4	24.4	15.3	18.1
底面標高(m)	119.72	119.78	119.79	119.77	119.79	119.74	119.77	119.73	119.89	119.76
柱穴No.	PP11	PP12	PP13	P53	P55	P56	P70	P76	P77	
開口部径(cm)	14×11	12×12	12×10	23×23	25×20	18×16	21×19	20×18	22×20	
深　　さ(cm)	17.3	16	10	21	15	8	32	32	19	
底面標高(m)	119.75	119.92	119.99	120.01	120.18	120.2	119.94	120.5	120.09	

〈床面〉　床面は黒褐色土で構成される。床面には酸化鉄の集積が広がり、水の影響を受けている様相を呈する。おおむね堅い。

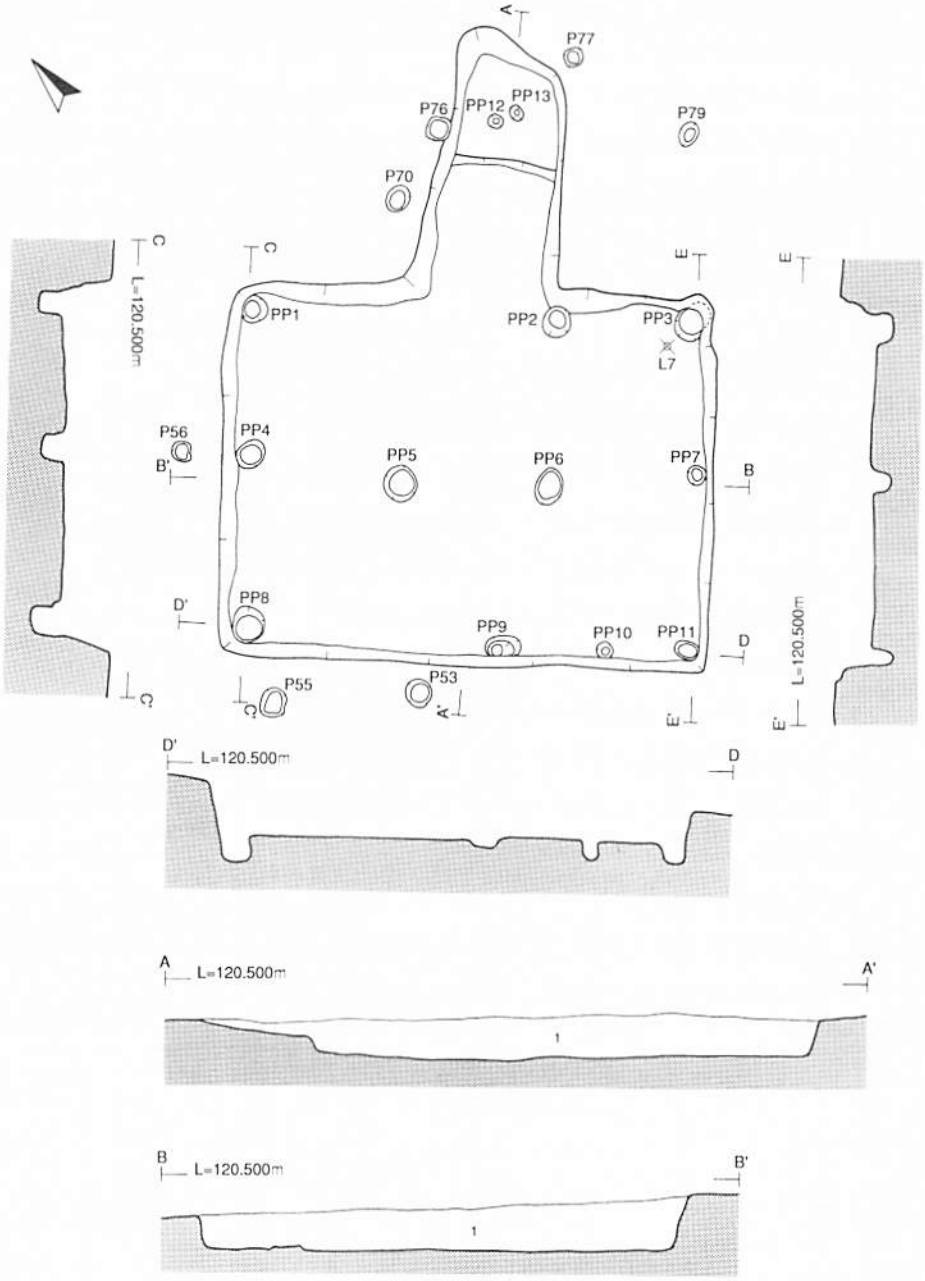
〈床面積〉　約３坪である。

〈付属施設〉　炉跡と推測される焼土や、壁溝などの付属施設は検出されていない。

〈出土遺物〉　埋土上位から縄文土器が、床面下部からフレークが出土した。縄文土器は流れ込みのもので本遺構の時期を示すものではないと思われる。

〈時期〉　時期を示す遺物は出土しなかったが、形状から中世と思われる。

〈備考〉　縄文土器は取り上げ後不明となったため、記載していない。



M 6 竪穴建物跡 1 号
1.10YR1.7/1黒色シルト 粘性やや強 締まりやや疎 Nb-P混入

1:60
0 1 2m

第10図　M 6 竪穴建物跡 1 号

2．掘立柱建物跡

調査B区で2棟が検出された。1棟は出土遺物から近世と捉えられる。

記載は、検出位置の北側のものから順に行う。

D5掘立柱建物跡1号（第11図、写真図版4）

〈位置〉　調査B区中央より南東側、B8・B9・B10・C9・A9グリッドⅢ層で、黒褐色土を埋土とする柱穴列を検出した。

〈重複〉　なし。

〈平面形式・方向〉　柱穴列が調査区外へ延びているため規模が不明であったが、その後二戸市教委が隣接区を調査し、ほぼ明らかになった。それによると、桁行5間（総長11.1m）、梁行3間（総長6.8m）の北東ー南西棟建物と推定される。桁行の軸方向はN－56°－Eである。使用した柱穴は13基で、調査区外では二戸市教委が2基検出している。周囲は現代耕作痕や撹乱が激しく、他柱穴は掘削されたものと思われる。

〈面積〉　約22.9坪

〈柱穴規模〉柱穴の平面形は円形を基調とする。

第5表　D5掘立柱建物跡1号柱穴計測表

柱穴No.	P31	P32	P33	P34	P35	P36	P37	P38	P39
開口部径(cm)	88×78	79×74	73×69	(50)	102×71	33×29	90×81	90×86	75×60
深　さ(cm)	28	24	25	6	59	11	34	29	22
底面標高(m)	119.75	119.78	119.77	119.88	119.47	119.89	119.64	119.66	119.71
柱穴No.	P41	P44	P45	P46					
開口部径(cm)	86×80	93×82	70×67	92×72					
深　さ(cm)	26	26	16	30					
底面標高(m)	119.65	119.65	119.66	119.52					

〈柱間寸法〉　桁行では7尺3寸（220cm）、梁行では6尺3寸（190cm）と10尺3寸（310cm）が使用されている。

〈付属施設〉　なし。

〈出土遺物〉　なし。

〈年代〉　時期を示す遺物が出土しないことから不明である。建物方位の周辺の遺跡との比較や柱穴の様相から中世の可能性がある。

B9掘立柱建物跡1号（第12図、写真図版5）

〈検出状況〉　調査B区中央より南東側、B8・B9・B10・C9・A9グリッドに位置する。Ⅲ層上位で検出された。

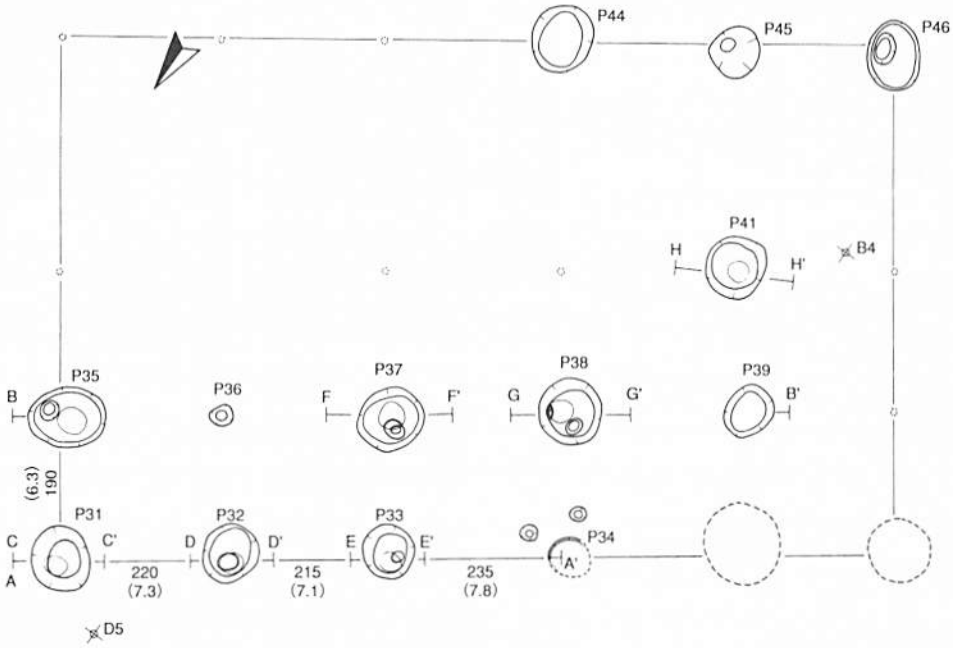
〈重複〉　なし。

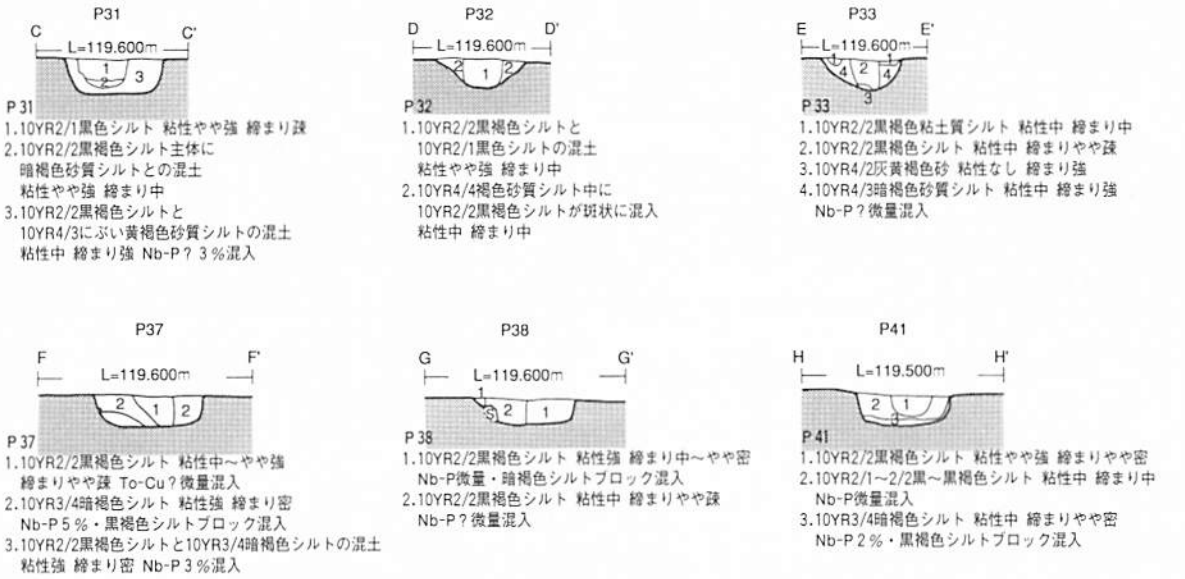
〈規模・方向〉　桁行3間半（北西ー南東・総長5.50m）、梁行2間半（北東ー南西・総長2.30m）の北西ー南東棟建物である。桁行の軸方向はN－36°－Wである。

〈面積〉　約12.2坪

〈柱穴〉　16基使用している。

〈柱穴規模〉柱穴の平面形は円形を基調とするが、一部不整形もある。





第11図　Ｄ５掘立柱建物跡１号

第6表　B9掘立柱建物跡1号柱穴計測表

柱穴No.	P84	P85	P62	P65	P101	P92	P88	P67	P98	P105
開口部径(cm)	51×44	49×46	47×43	52×44	47×47	55×43	63×54	44×39	55×45	50×43
深　さ(cm)	54	45	36	43	55	55	73	41	43	32
底面標高(m)	119.61	119.68	119.73	119.66	119.59	119.59	119.37	119.64	119.68	119.73
柱穴No.	P122	P108	P123	P124	P109	P119				
開口部径(cm)	61×40	52×48	62×55	63×56	65×63	63×45				
深　さ(cm)	39	61	45	60	46	49				
底面標高(m)	119.64	118.55	119.49	119.43	119.55	119.48				

〈柱間寸法〉　桁行5尺9寸(180cm)、梁行7尺4寸(228cm)を基調としており、桁行と梁行で長さが異なる。

〈付属施設〉　なし

〈出土遺物〉　P109・P123埋土中から寛永通宝（新寛永：初鋳年1668年）が出土している。

〈年代〉　近世と思われ、下限は17世紀である。

3．井戸跡

調査A区から1基、調査B区から1基検出された。調査A区から検出されたものは、埋土上位に十和田a降下火山灰が堆積しており、井筒も板井・刳抜井筒であることから、時期は古代まで遡る可能性がある。調査B区で検出された井戸の井筒は石井で、近世以降と思われる。

記載は、検出位置の北側のものから順に行う。

N10井戸1号（第13・14図、写真図版6）

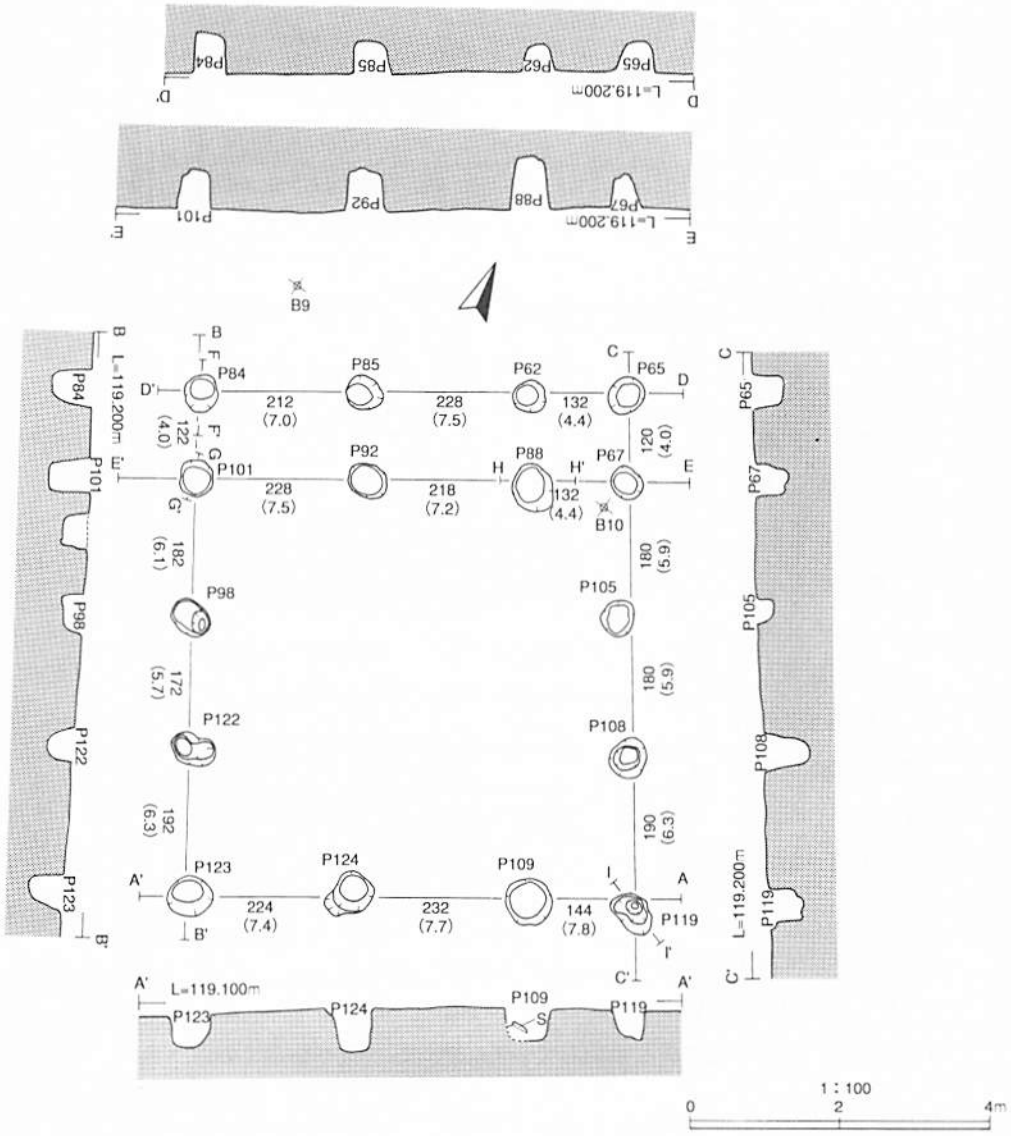
〈検出状況〉　調査A区、N10グリッドⅢ層上面で、黒褐色の円形状のプランを検出した。さらにその中央部には、十和田a降下火山灰がほぼ円形プランをつくる。また、北東側から溝状に張り出す黒褐色土の埋土を検出しているが、本遺構に伴うかどうかは判断できなかった。

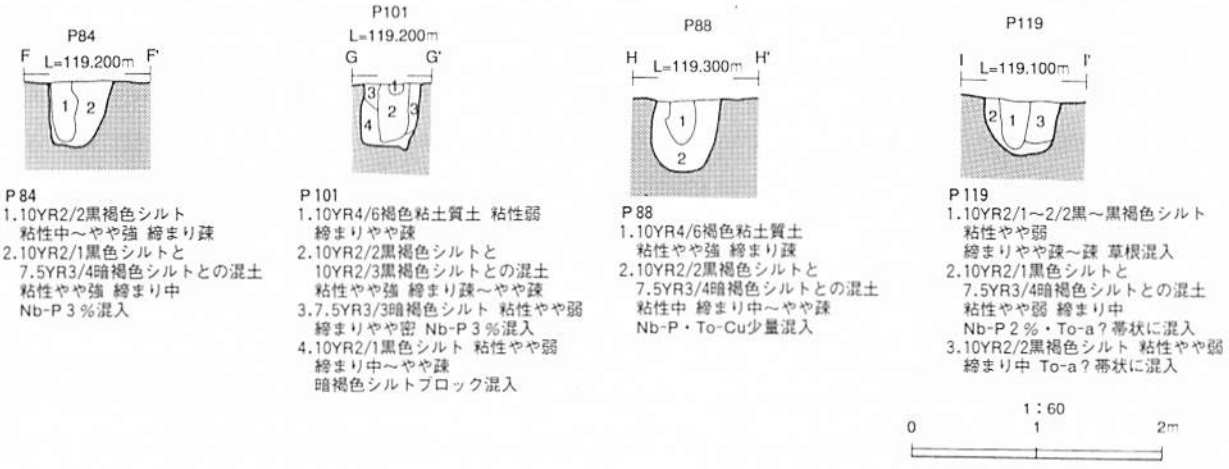
〈重複関係〉　1号水路支流と重複している。断面埋土と平面形での切り合い関係の観察から、1号水路支流よりも、N10井戸1号の方が新しい。

〈規模・形状〉　底面は、52cm×41cmの楕円形状で皿状を呈し、礫層が露出している。井筒本体より下部は八戸火山灰層を掘り込んでおり、壁は円筒状に垂直に立ち上がる。井筒本体下部付近での壁の平面形は、125cm×122cm程の隅丸方形状を呈し、壁はやや外傾しながら立ち上がる。井筒本体より上部の壁は外傾し、開口部付近では大きく広がりながら立ち上がる。開口部は、径296cm程のほぼ円形を呈し、開口部から底面までの深さは325cmを測る。

〈井筒〉　井筒は、板井の刳抜井筒で、井戸検出面より170cm程下部で出土した。巨木の幹の内部を刳り抜いたもので、樹種はカツラである。規模は、径65cm、高さ41～82cmを測る。井筒周囲には板状あるいは三角板状の木片が巡らされており、これは本体部分の補強用であったと思われる。これら補強材にはクリ・コナラが使用されている。井筒には直径10cm程の穴が1カ所開けてある。

〈埋土〉　二分法により埋土の観察をおこなったが、安全のため上半部分と下半部分に分けて、記録をとっている。埋土は3層に大別される。埋土上半部分には十和田a降下火山灰を主体とする層があり、黒色土とラミナ状に堆積しながら、およそレンズ状に分布しており、その様相から二次的に流れ込んだものと考えら





P84
1.10YR2/2黒褐色シルト
粘性中～やや強 締まり疎
2.10YR2/1黒色シルトと
7.5YR3/4暗褐色シルトとの混土
粘性やや強 締まり中
Nb-P 3 %混入

P101
1.10YR4/6褐色粘土質土 粘性弱
締まりやや疎
2.10YR2/2黒褐色シルトと
10YR2/3黒褐色シルトとの混土
粘性やや強 締まり疎～やや疎
3.7.5YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱
締まりやや密 Nb-P 3 %混入
4.10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱
締まり中～やや疎
暗褐色シルトブロック混入

P88
1.10YR4/6褐色粘土質土
粘性やや強 締まり疎
2.10YR2/2黒褐色シルトと
7.5YR3/4暗褐色シルトとの混土
粘性中 締まり中～やや疎
Nb-P・To-Cu少量混入

P119
1.10YR2/1～2/2黒～黒褐色シルト
粘性やや弱
締まりやや疎～疎 草根混入
2.10YR2/1黒色シルトと
7.5YR3/4暗褐色シルトとの混土
粘性やや弱 締まり中
Nb-P 2 %・To-a？帯状に混入
3.10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱
締まり中 To-a？帯状に混入

第12図　B 9 掘立柱建物跡 1 号

れる。上～中半には黒色土と火山灰の混土層が占めている。黒～黒褐色土が主体となり、十和田ａ降下火山灰がブロック状に混入する。井筒下から井戸底面までは黒色泥炭層が主体である。自然堆積的な様相を示す。

〈付随施設等〉　検出面において、井戸から北東側に張り出すように溝状の黒褐色埋土を検出している。井戸から３ｍ程の所で収束しており、幅はおよそ60㎝～70㎝、深さは、15㎝～20㎝である。土層断面等の観察を計るが、井戸に関連する施設かどうかは不明である。

また、井戸検出面より、80㎝～１ｍ程下位の壁四隅に、窪みを検出した。埋土は十和田ａ降下火山灰をブロック状に含む黒褐色土が主体である。北側の１基は、径10㎝程度の円形で、深さは小径で奥が深いため確定出来ない。その他の３基は、およそ30㎝×20㎝で深さは10㎝程度の縦長楕円形状を呈する。これは、井筒の支えとする補強用の杭などが打ち込まれていたものとの可能性がある。

〈出土遺物〉　埋土の中位付近から、こぶし大～40㎝大の礫が出土している。状況から石を組んでいるほど密にはなっておらず、流れ込みと思われる。また、木片及び木端等も出土しているが、これらは井筒の周囲を取り巻く木片か、あるいは井筒破片であると思われる。時期を決定づけるような土器等の遺物は認められなかった。

〈時期〉　時代を決定づけるような資料は認められなかったが、板井が一木の刳抜井筒であること、埋土に十和田ａ降下火山灰が堆積していることから、下限は古代まで遡ると考えられる。

ｖ６井戸跡１号（第14図、写真図版７）

〈検出状況〉　調査区南端ｖ６グリッドⅢ層中に、自然礫が投げ込まれている土坑を検出した。

〈重複関係〉　なし。

〈規模・形状〉　検出面は撹乱を受けているが、口縁部は円形で、開口部径は１ｍ90㎝程である。検出面から１ｍ10㎝程掘り下げた後、径は狭まり底部径が65㎝ほどになる。深さは検出面から１ｍ85㎝程である。底面には礫が３個置かれていた。作業の危険防止のため石組みは外していない。

〈井筒〉　石井で、円形井筒である。使用している石は自然石で、表面の滑らかなものである。積み方は一定の方式のない乱石積である。

〈埋土〉　黒～黒褐色の泥土である。南部浮石？を含む。埋土は上位にみられるだけで、下位はほとんどが礫の投げ入れで埋土は確認されていない。

〈付随施設等〉　なし。

〈出土遺物〉　殻摺り臼の上臼・下臼の破片それぞれ２個出土している。

〈時期〉　下限は近世であると思われる。

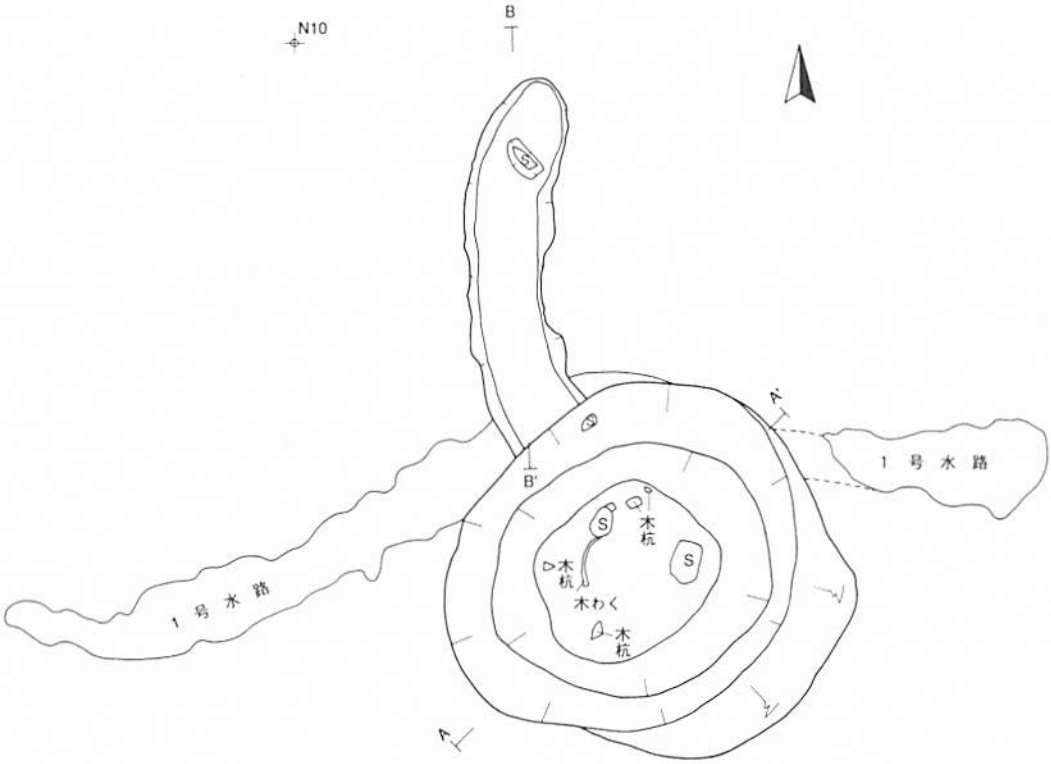
４．土坑

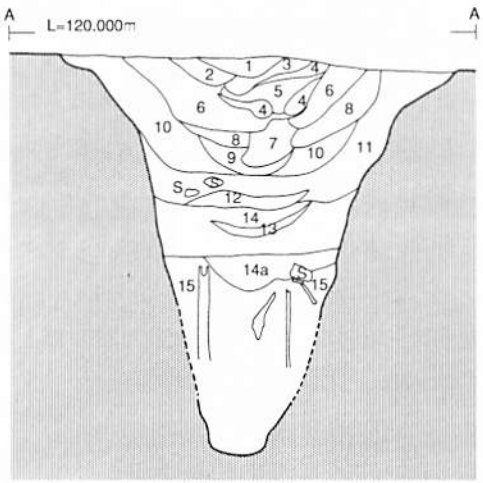
19基検出された。調査Ａ区からは３基、調査Ｂ区から16基が検出されている。調査Ａ区から検出されたもののうち、２基は径・深さとも１ｍを超える大形のものである。また調査Ｂ区北部には、近世の墓壙が５基検出されており、Ｂ区で検出された土坑のうち12基は同じく近世の墓壙の可能性がある。

記載は、検出位置の北側のものから順に行う。

Ｐ９土坑１号（第15図、写真図版７）

〈検出状況〉　調査Ａ区、Ｐ９グリッドにトレンチを入れたところ、本土坑の断面を確認した。本来の検出





〈N10井戸1号　附属施設？〉　S=1／20

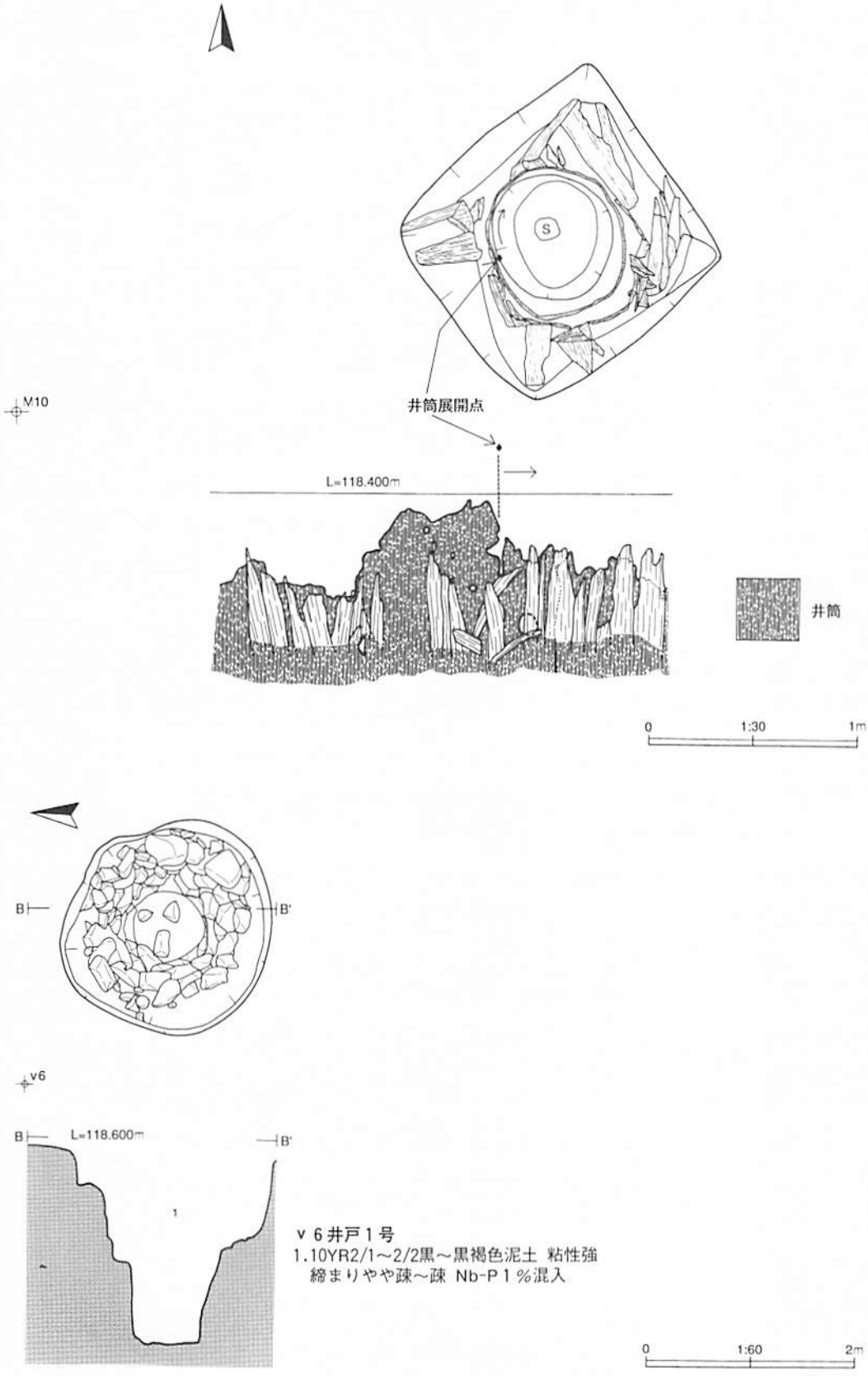
N10井戸１号付属施設？

1.10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中
　Nb-P？３％混入
2.7.5YR2/1黒色シルト 粘性中 締まり中
　褐色土小ブロック・Nb-P微量混入
3.7.5YR2/1黒色シルト 粘性中 締まり中
　Ⅲ層土ブロック状に混入

1.10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや疎 締まり中
　To-b・To-a３％混入
2.10YR4/2灰黄褐色土 粘性疎 締まりやや弱
　黒褐色シルトと火山灰が層状に混ざる
3.10YR6/3にぶい黄橙色土 粘性なし 締まり中
　To-aと砂の混土？
4.10YR6/2灰黄褐色土 粘性なし 締まり中
　To-a純層 ラミナ状を呈する
5.10YR4/2灰黄褐色土 粘性弱 締まり中
　To-aと砂と黒褐色シルトが層状に混ざり合う
6.10YR4/1褐灰色土 粘性有り 締まり中
　黒褐色土とTo-aの混土 部分的に白色浮石粒層状に混入
7.10YR3/1黒褐色シルト 粘性有り 締まりやや疎
　上層の土が崩落？
8.10YR2/2黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり中
　To-aが層状、ブロック状に混入
9.10YR3/1黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まり中
　To-aブロック混入
10.10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性有り 締まり中
　To-aブロック10%混入
11.10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性強 締まり中
　To-aブロック５％混入
12.7.5YR3/1黒褐色粘土質シルト 粘性強 締まりやや疎
　To-aブロック２％混入
13.7.5YR3/1黒褐色シルト 粘性強 締まりやや疎
　砂？To-Cu３％混入
14.10YR2/1黒色シルト 粘性強 締まりやや疎
　To-a小ブロック２％混入
14a.10YR2/1黒色粘土質シルト 粘性強 締まりやや疎
　黄橙色浮石粒２％・最下部に砂が層状に混入
15.10YR1.7/1黒色粘土質シルト 粘性強 締りやや疎
　泥炭質化している

1：60
0　1　2m

第13図　N10井戸１号



第14図　N10井戸1号、v 6井戸1号

面はⅡ層下位である。

〈重複関係〉　なし

〈規模・形状〉　北東部をトレンチで破壊したため不詳であるが、平面形は、開口部径155cm、底部径55cmの円形状を呈するものと思われる。深さは112cmを測る。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とする３層で構成される。人為堆積と捉えられる。

〈壁・床面〉壁は床面からやや急傾斜で立ち上がる。底面は平坦である。

〈出土遺物〉なし。

〈時期〉不明である。

O13土坑１号（第15図、写真図版７）

〈検出状況〉　調査Ａ区、O13グリッドⅢ層で、黒色の円形状のプランを検出した。

〈重複〉　１号水路と重複し、本土坑が新しい。

〈形状・規模〉　平面形は楕円形状を呈する。開口部径85×70cm、底部径75×50cm、深さ10～18cmを測る。

〈壁・床〉　壁は床面からやや急傾斜で立ち上がる。床面はなだらかに傾斜する。

〈埋土〉　黒色土の単層で、南部浮石・十和田ｂ浮石を含む。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　遺物を伴わず不明である。

M10土坑１号（第15図、写真図版７）

〈検出状況〉　調査Ａ区、M10グリッドに位置する。N10井戸の井筒を取り上げるために深堀りをかけた際に断面を検出した。本来の検出面はⅢ層である。周囲に比べ、南部浮石の混入率が高く、堅く締まっている。

〈重複〉　なし

〈形状・規模〉　開口部径195cm、底部径82cmの円形状を呈する。深さは212cmを測る。

〈埋土〉　埋土は黒褐色土を主体とする17層に細分される。人為堆積と推定される。

〈壁・床面〉　壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈出土遺物〉　なし。

〈時期〉　時期を特定する遺物は伴わず、時期は不明である。近辺にN10井戸が掘られており、関連がある可能性もある。

Ｇ９土坑１号（第15図、写真図版８）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｇ９グリッドⅢ層で、黒褐色土の円形プランを検出した。

〈重複〉　なし。

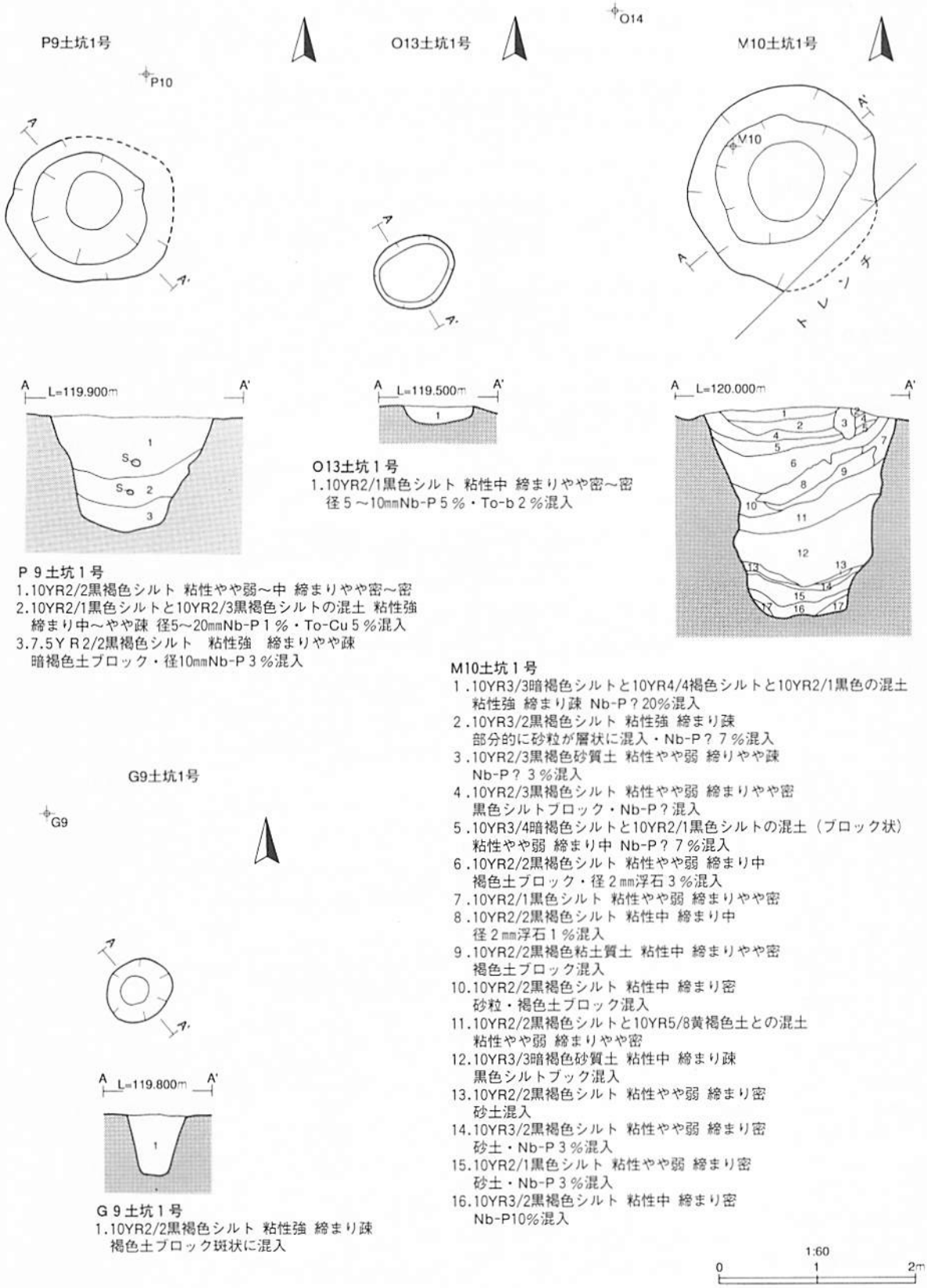
〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径70×60cm、底部径30×28cm、深さ63cmを測る。

〈壁・床〉　壁は床面から外傾気味に立ち上がる。床面は丸底である。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とし、暗褐色土がブロック状に混入する。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　遺物が出ていないため不詳であるが、付近から近世の土壙墓が検出されており、その埋土の様相から、同様に墓壙の可能性がある。



P９土坑１号
1.10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密～密
2.10YR2/1黒色シルトと10YR2/3黒褐色シルトの混土 粘性強
締まり中～やや疎 径5～20mmNb-P１％・To-Cu５％混入
3.7.5ＹＲ2/2黒褐色シルト 粘性強 締まりやや疎
暗褐色土ブロック・径10mmNb-P３％混入

O13土坑１号
1.10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まりやや密～密
径５～10mmNb-P５％・To-b２％混入

M10土坑１号
1.10YR3/3暗褐色シルトと10YR4/4褐色シルトと10YR2/1黒色の混土
粘性強 締まり疎 Nb-P？20%混入
2.10YR3/2黒褐色シルト 粘性強 締まり疎
部分的に砂粒が層状に混入・Nb-P？７％混入
3.10YR2/3黒褐色砂質土 粘性やや弱 締りやや疎
Nb-P？３％混入
4.10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密
黒色シルトブロック・Nb-P？混入
5.10YR3/4暗褐色シルトと10YR2/1黒色シルトの混土（ブロック状）
粘性やや弱 締まり中 Nb-P？７％混入
6.10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
褐色土ブロック・径２mm浮石３％混入
7.10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや密
8.10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中
径２mm浮石１％混入
9.10YR2/2黒褐色粘土質土 粘性中 締まりやや密
褐色土ブロック混入
10.10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まり密
砂粒・褐色土ブロック混入
11.10YR2/2黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色土との混土
粘性やや弱 締まりやや密
12.10YR3/3暗褐色砂質土 粘性中 締まり疎
黒色シルトブック混入
13.10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり密
砂土混入
14.10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり密
砂土・Nb-P３％混入
15.10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり密
砂土・Nb-P３％混入
16.10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 締まり密
Nb-P10%混入

Ｇ９土坑１号
1.10YR2/2黒褐色シルト 粘性強 締まり疎
褐色土ブロック斑状に混入

第15図　Ｐ９土坑１号、O13土坑１号、M10土坑１号、Ｇ９土坑１号

Ｄ５土坑１号（第16図、写真図版８）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ５グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　Ｄ５土坑４号と上部で重複する。本土坑が新しい。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径84×(82)㎝、底部径54×25㎝、深さ52㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面は丸底状である。

〈埋土〉　黒褐色土、暗褐色土、黒色土の３層で構成される。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　不明であるが、検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ５土坑２号（第16図、写真図版８）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ５グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は方形基調を呈し、規模は、開口部87×71㎝、底部69×54㎝、深さ81㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とする７層で構成される。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　不明であるが、検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ５土坑３号（第16図、写真図版８）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ５グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径76×68㎝、底部径56×43㎝、深さ66㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒褐色土、褐色土の２層で構成される。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ５土坑４号（第16図、写真図版９）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ５～Ｄ６グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　Ｄ５土坑１号と上部で重複する。本土坑が古い。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径100×(88)㎝、底部径56×55㎝、深さ47㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面から緩やかに立ち上がる。床面は丸底状である。

〈埋土〉　黒褐色土の単層である。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ６土坑１号（第16図、写真図版９）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ６グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径65×60㎝、底部径20×19㎝、深さ64㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とし、褐色土がブロック状に混入する。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ６土坑２号（第16図、写真図版９）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ６グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　Ｄ６土坑５号と重複関係にある。本土坑が新しい。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径82×76㎝、底部径47×40㎝、深さ30㎝を測る。

〈壁・床〉　西壁は床面から緩やかに、東壁は外傾気味に立ち上がる。床面は丸底である。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とし、褐色土がブロック状に混入する。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ６土坑３号（第16図、写真図版９）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ６グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　Ｄ６土坑５号と重複関係にある。本土坑が新しい。

〈形状・規模〉　平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部径（105）×87㎝、底部径57×20㎝、深さ43㎝を測る。南西部上位はやや攪乱を受けている様相である。

〈壁・床〉　北壁は、始めは底面から緩やかに、その後ほぼ垂直に立ち上がる。南壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とし、褐色土・砂土がブロック状に混入する。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ６土坑４号（第16図、写真図版10）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ６グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径75×68㎝、底部径61×41㎝、深さ40㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒褐色土および暗褐色土の２層で構成される。上位の黒褐色土中には褐色土が、下位の暗褐色土中には黒色土がいずれもブロック状に混入する。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　不明であるが、検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ６土坑５号（第16図、写真図版10）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ６グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径73×67㎝、底部径24×20㎝、深さ66㎝を測る。

〈壁・床〉　北西壁は床面から急傾斜で、南東壁は床面から外傾気味に立ち上がる。床面は丸底である。

〈埋土〉　黒褐色の単層である。人為堆積と推定される。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　不明であるが、検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ６土坑６号（第16図、写真図版10）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ６グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　南西部でＤ６土坑２号と、南東部でＤ６土坑３号と重複する。本土坑が最も古い。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径95×(82)㎝、底部径50×45㎝、深さ50㎝を測る。

〈壁・床〉　東壁は床面から外傾気味に、西壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面は丸底気味である。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とする２層で構成される。上位の層には褐色土が、下位の層には黒褐色土がブロック状に混入する。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　不明であるが、検出位置・埋土の様相から近世の墓壙の可能性がある。

Ｄ７土坑１号（第17図、写真図版10）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｄ７グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は長方形を呈する。開口部および底部の規模は196×111㎝で、深さは55㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面から直立する。床面は平坦である。

〈埋土〉　黒色土と黒褐色土の２層で構成される。上位の黒色土中には黄褐色土が、下位の黒褐色土中には黒色土がブロック状に混入する。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　不明であるが、検出位置・埋土の様相および形状から近世以降の土壙墓の可能性が高い。

Ｃ６土坑１号（第17図、写真図版11）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｃ６グリッドⅢ層で検出した。

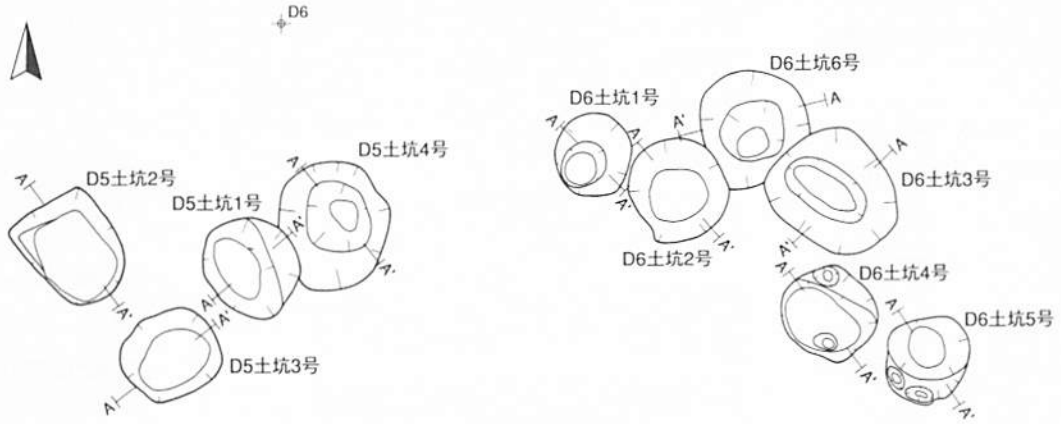
〈重複〉　なし。

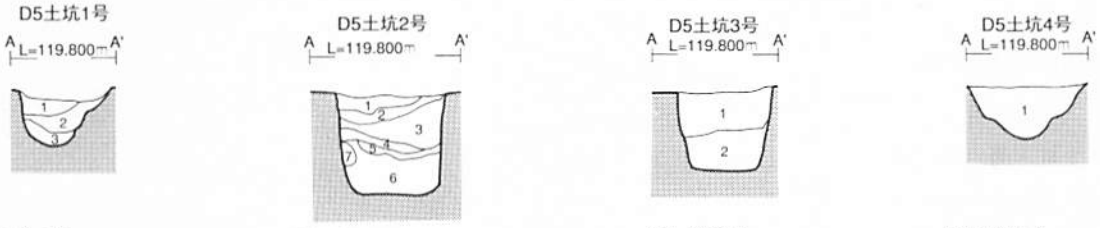
〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径61×55㎝、底部径25×22㎝、深さ68㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面から急傾斜で立ち上がる。丸底である。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とし、暗褐色土がブロック状に混入する。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。



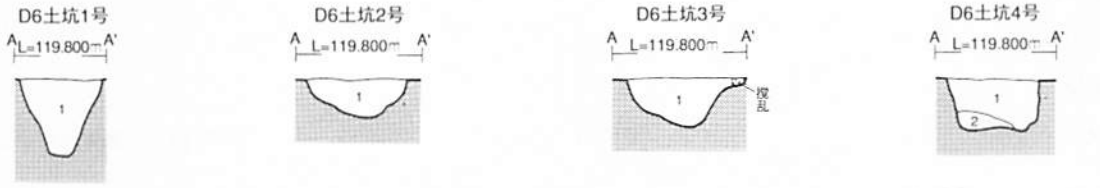


D５土坑１号
1.10YR2/2黒褐色シルト 粘性強
締まり中 炭化物２％混入
2.10YR3/3暗褐色シルト 粘性強
締まりやや疎
黒褐色シルト斑状に混入

D５土坑２号
1.10YR2/2黒褐色シルト 粘性強
締まり疎
暗褐色シルトブロック20％混入
2.10YR3/4暗褐色シルト主体に
10YR2/2黒褐色の混土(40:60)
粘性強 締まりやや疎
3.10YR2/2黒褐色シルトと2.5YR3/3暗オリーブ
褐色砂質シルトとの混土
粘性強 締まりやや疎
4.2.5YR3/2黒褐色砂質シルト 粘性強
締まりやや疎
にぶい黄橙色砂土混入
5.10YR2/1黒色シルト 粘性強
締まり中 砂質シルト混入
6.10YR3/3暗褐色シルト主体に
10YR2/2黒褐色シルトが斑状に混じる
(70:30) 粘性強 締まり疎
7.10YR2/1黒色砂質シルト 粘性強
締まりやや強

D５土坑３号
1.10YR2/2黒褐色粘土質シルト
粘性やや強 締まり中
黄褐色粘土質土ブロック１％混入

D５土坑４号
1.10YR2/3黒褐色シルト
粘性中 締まり中
Nb-P・To-Cu１％混入

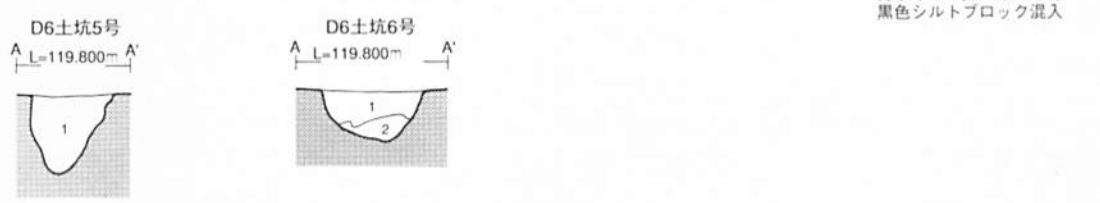


D６土坑１号
1.10YR2/2～2/3黒褐色シルト
粘性やや弱 締まりやや密
褐色粘土質土小ブロック
Nb-P１％混入

D６土坑２号
1.10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱
締まりやや密 Nb-P２％混入

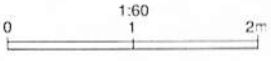
D６土坑３号
1.10YR2/2～2/3黒褐色シルト
粘性中～やや強 締まりやや疎
Nb-P３％・砂土ブロック
暗褐色シルトブロック混入

D６土坑４号
1.10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱
締まり中 Nb-P２％
褐色粘土質土ブロック混入
2.10YR3/4暗褐色シルト 粘性強
締まりやや疎 Nb-P２％
黒色シルトブロック混入



D６土坑５号
1.10YR2/2黒褐色シルト
粘性中～やや強 締まり中 Nb-P３％
褐色粘土質土小ブロック微量混入

D６土坑６号
1.10YR2/2黒褐色シルト 粘性中
締まり中 褐色土ブロック２％混入
2.10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや強
締まりやや密
10YR2/2黒褐色シルトブロック斑状混入



第16図　Ｄ５土坑１号～４号、Ｄ６土坑１号～６号

〈遺構の年代・性格〉　不明である。

Ｃ６土坑２号（第17図、写真図版11）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｃ６グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は隅丸方形を基調とする。規模は、開口部径77×64㎝、底部径35×29㎝、深さ39㎝を測る。

〈壁・床〉　北西壁は床面より急傾斜で、南東壁は床面から緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒褐色土の単層である。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　不明である。

Ｃ７土坑１号（第17図、写真図版11）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｃ７グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部径125×98㎝、底部径90×85㎝、深さ50㎝を測る。

〈壁・床〉　北西壁は床面からほぼ垂直に、南東壁は床面から緩やかに傾斜した後切り立つ。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒～黒褐色土の２層で構成される。人為堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。

〈遺構の年代・性格〉　不明である。

ｙ７土坑１号（第17図、写真図版11）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、ｙ７グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径255×(225)㎝、底部径144×122㎝、深さ59㎝を測る。

〈壁・床〉　壁は床面から緩やかに立ち上がる。床面は平坦である。

〈埋土〉　黒色土、黒褐色土の２層で構成される。北部側の上位に撹乱を受けている。

〈出土遺物〉　縄文時代中期末葉の土器片が出土している。

〈遺構の年代・性格〉　年代は中期末葉以降と思われるが、性格は不明である。

ｔ７土坑１号（第17図、写真図版12）

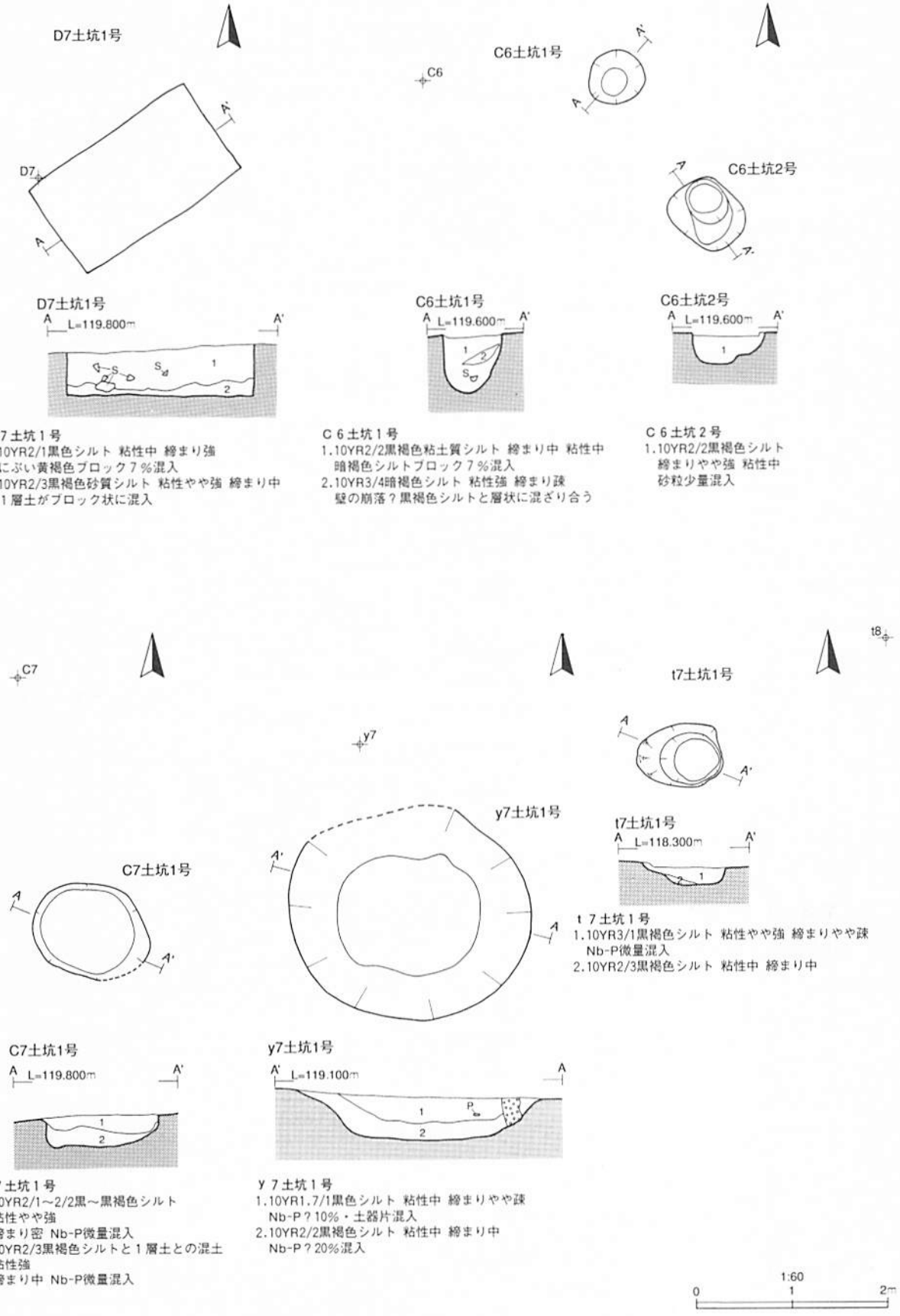
〈検出状況〉　調査Ｂ区ｔ７グリッドⅡ層下位～Ⅲ層上位で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は卵形を呈する。規模は、開口部径90×65㎝、底部径45×45㎝、深さ20㎝を測る。

〈埋土〉　黒褐色土の２層で構成される。上位に南部浮石を含む。自然堆積と捉えられる。

〈出土遺物〉　なし。



D７土坑１号
1.10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まり強
にぶい黄褐色ブロック７％混入
2.10YR2/3黒褐色砂質シルト 粘性やや強 締まり中
１層土がブロック状に混入

Ｃ６土坑１号
1.10YR2/2黒褐色粘土質シルト 締まり中 粘性中
暗褐色シルトブロック７％混入
2.10YR3/4暗褐色シルト 粘性強 締まり疎
壁の崩落？黒褐色シルトと層状に混ざり合う

Ｃ６土坑２号
1.10YR2/2黒褐色シルト
締まりやや強 粘性中
砂粒少量混入

ｔ７土坑１号
1.10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや疎
Nb-P微量混入
2.10YR2/3黒褐色シルト 粘性中 締まり中

Ｃ７土坑１号
1.10YR2/1～2/2黒～黒褐色シルト
粘性やや強
締まり密 Nb-P微量混入
2.10YR2/3黒褐色シルトと１層土との混土
粘性強
締まり中 Nb-P微量混入

ｙ７土坑１号
1.10YR1.7/1黒色シルト 粘性中 締まりやや疎
Nb-P？10％・土器片混入
2.10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中
Nb-P？20％混入

第17図　Ｄ７土坑１号　Ｃ６土坑１号・２号、Ｃ７土坑１号ｙ７土坑１号、ｔ７土坑１号

〈遺構の年代・性格〉　不明である。

5．墓壙

人骨が出土した土坑を墓壙としている。5基検出された。いずれもB区である。埋土中に寛永通寶が出土しているものが4基あり、これら5基はいずれも近世のものであると思われる。

記載は、検出位置が北側のものから順に行う。

G9墓壙1号（第18図）

〈検出状況〉　調査B区、G9グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は楕円形状を呈する。規模は、開口部径192×144cm、底部径120×68cm、深さ64cmを測る。

〈壁・床〉　壁は床面から緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒～黒褐色土を埋土とする。人為堆積である。

〈出土遺物〉　縄文時代中期中葉の土器、人骨が出土した。

〈遺構の年代・性格〉　近世の土壙墓である。

G9墓壙2号（第18図）

〈検出状況〉　調査B区、G9グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径82×72cm、底部径42×30cm、深さ70cmを測る。

〈壁・床〉　壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒褐色土を主体とする。人為堆積である。

〈出土遺物〉　人骨・寛永通寶が出土した。

〈遺構の年代・性格〉　近世の土壙墓である。

F6墓壙1号（第18図、写真図版12）

〈検出状況〉　調査B区、F6グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径125×115cm、底部径80×(77)cm、深さ58cmを測る。

〈壁・床〉　壁は床面より急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒色土を埋土とする。人為堆積である。

〈出土遺物〉　縄文時代中期中葉の土器、寛永通寶が出土している。

〈遺構の年代・性格〉近世の土壙墓である。

F7墓壙1号（第18図）

〈検出状況〉　調査B区、F7グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は長楕円形状を呈する。規模は、開口部径218×115cm、底部径198×100cm、深さ29cmを測る。

〈壁・床〉　壁は床面から急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒～黒褐色土を埋土とする。人為堆積である。

〈出土遺物〉　人骨・寛永通寶が出土した。

〈遺構の年代・性格〉　近世の土壙墓である。

E11墓壙１号（第18図）

〈検出状況〉　調査Ｂ区、Ｅ11グリッドⅢ層で検出した。

〈重複〉　なし。

〈形状・規模〉　平面形は円形状を呈する。規模は、開口部径118×110cm、底部径76×70cm、深さ56cmを測る。

〈壁・床〉　南西壁は床面から外傾気味に、北東壁は急傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〈埋土〉　黒～黒褐色土を埋土とする。人為堆積である。

〈出土遺物〉　人骨・寛永通寶が出土した。

〈遺構の年代・性格〉　近世の土壙墓である。

６．溝跡

Ａ区で１条検出された。調査Ａ区とＢ区の境の下水路付近である。

溝１号（第19図、写真図版12）

〈検出状況〉　Ａ区、Ｊ６およびＫ７～Ｋ８グリッドⅢ層で、黒色の溝状プランを検出した。

〈重複〉　１号水路南西支流と重複関係にある。本溝跡が新しい。

〈形態・規模・方向〉　Ｊ６グリッドでは上端幅18～40cm、下端幅7～30cm、北西－南東方向に長さ約2.8m掘り込まれている。深さは最深部で13cmである。Ｋ７グリッド付近で一旦途切れ、方向を変え東北東－西南西方向に延びる。上端幅22～66cm、下端幅8～21cm、最深部の深さ11cmである。両者は一部とぎれるものの、埋土から一筋の溝と捉えられる。

〈埋土〉　黒色土の単層である。南部浮石が混じる。

〈出土遺物〉　埋土中から縄文時代後期土器片が出土している。

〈遺構の時期〉　埋土中から縄文時代後期の土器が出土しているが、遺構の時期と関連は不明である。

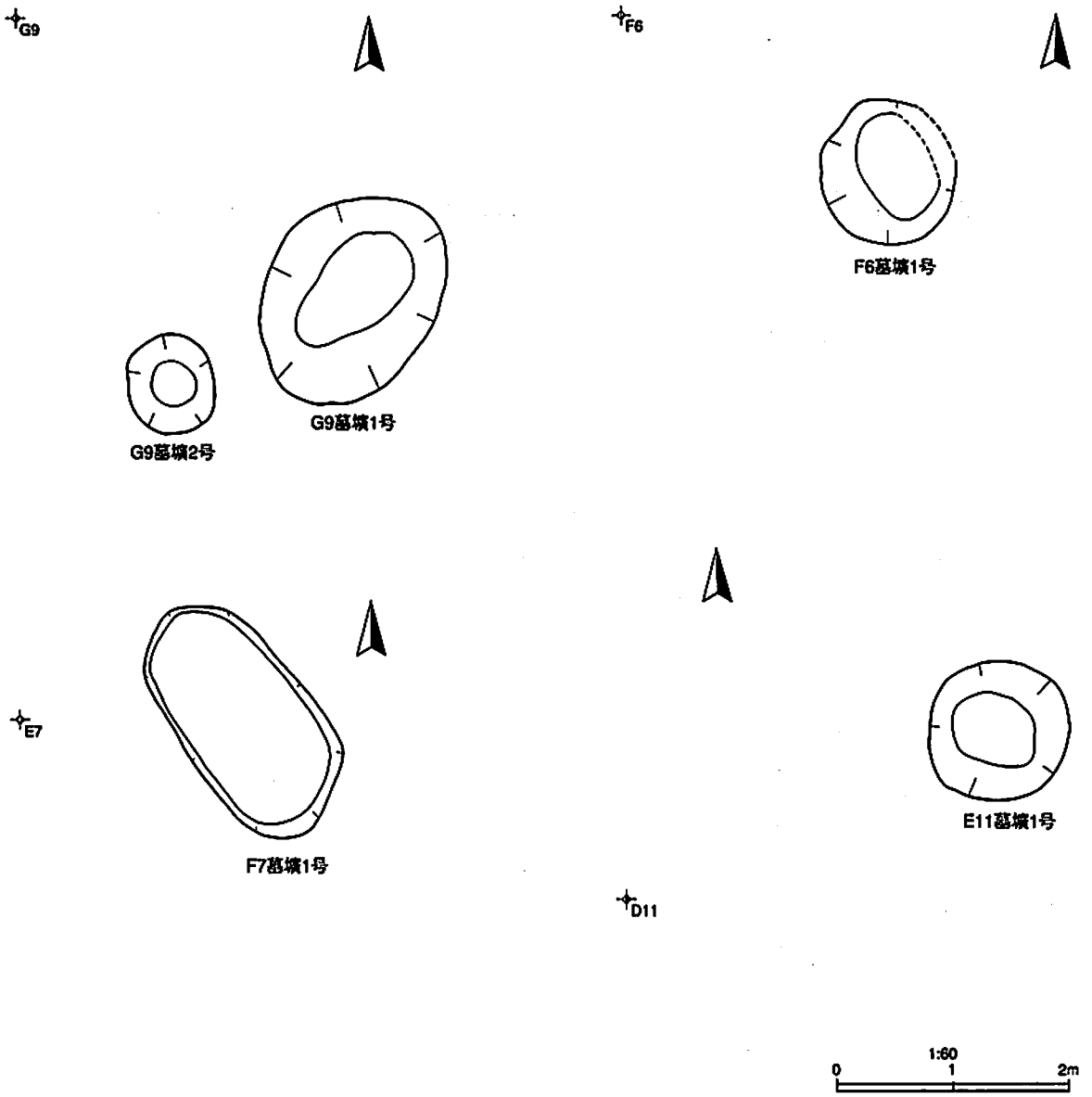
７．焼土遺構

Ｂ区北部で１基検出された。

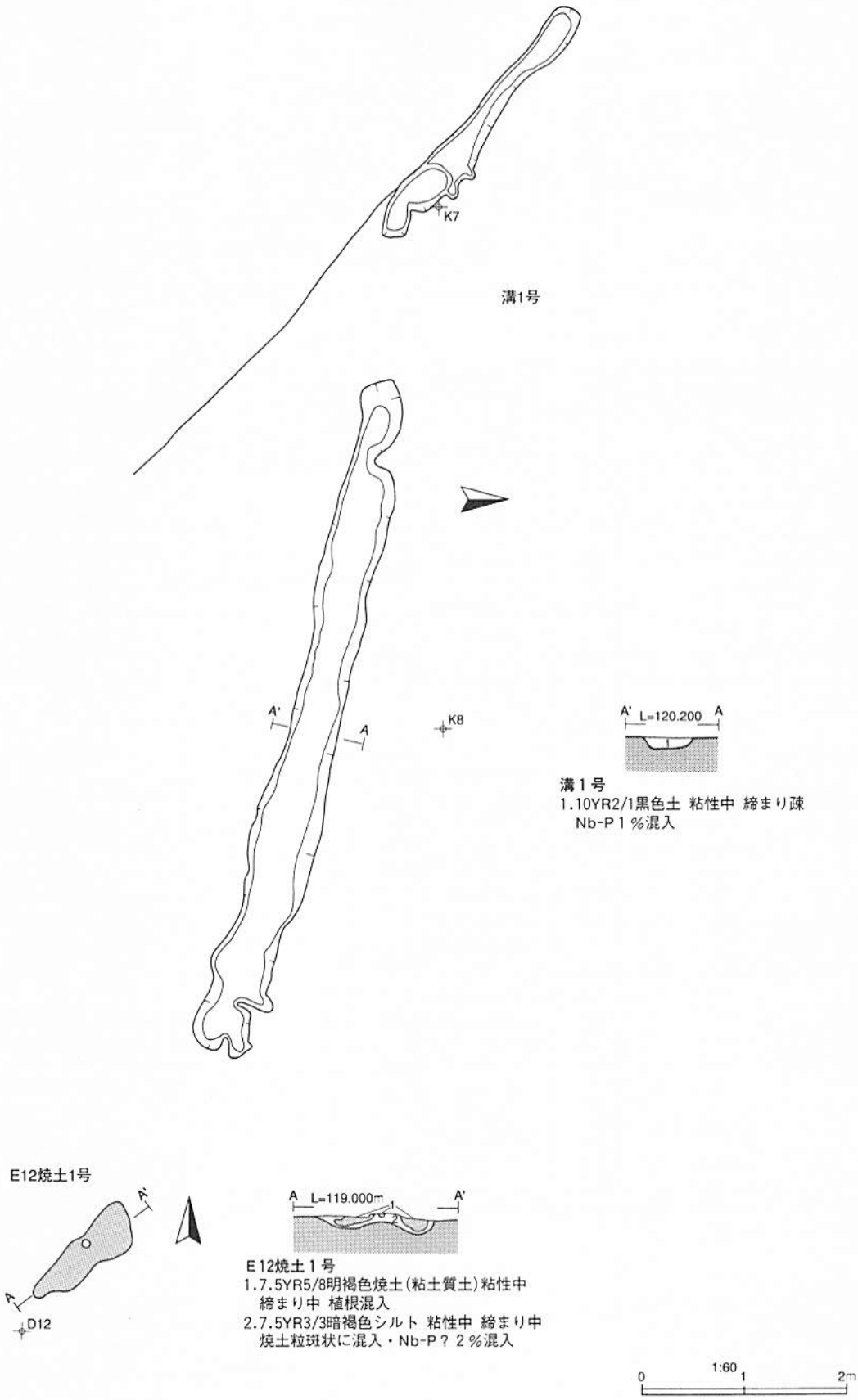
E12焼土１号（第19図、写真図版12）

〈検出状況〉　Ｂ区、Ｅ12グリッドⅢ層で検出した。上位に礫が載るが焼成は受けていない。付近の土層を観察したが、竪穴跡の壁を確認できず、焼土遺構とした。

〈重複〉　なし。



第18図　Ｇ９墓壙１号・２号、Ｆ６墓壙１号、Ｆ７墓壙１号、Ｅ11墓壙１号



第19図　溝１号、E12焼土１号

〈形状・規模等〉　平面形は不整形を呈する。長径120cm、短径30cm程を測る。焼土の層厚は13cmを測るが、下位の暗褐色土層は熱の影響を受けた様相を見せ、斑状に混入した焼土粒は南部浮石が変色したものであると思われる。焼土の焼成はよい。

〈出土遺物〉　なし。

〈時期〉　不明である。

8．柱穴状小土坑（第20～23図）

今回の調査では柱穴状小土坑は199基検出した。そのほとんどが調査B区・Ⅲ層からの検出である。集中しているのは、調査B区北西端部、調査B区北東端部、B９掘立柱建物跡１号付近、調査区南端部である。掘立柱建物跡を組む様相もなく、不明なものが多い。

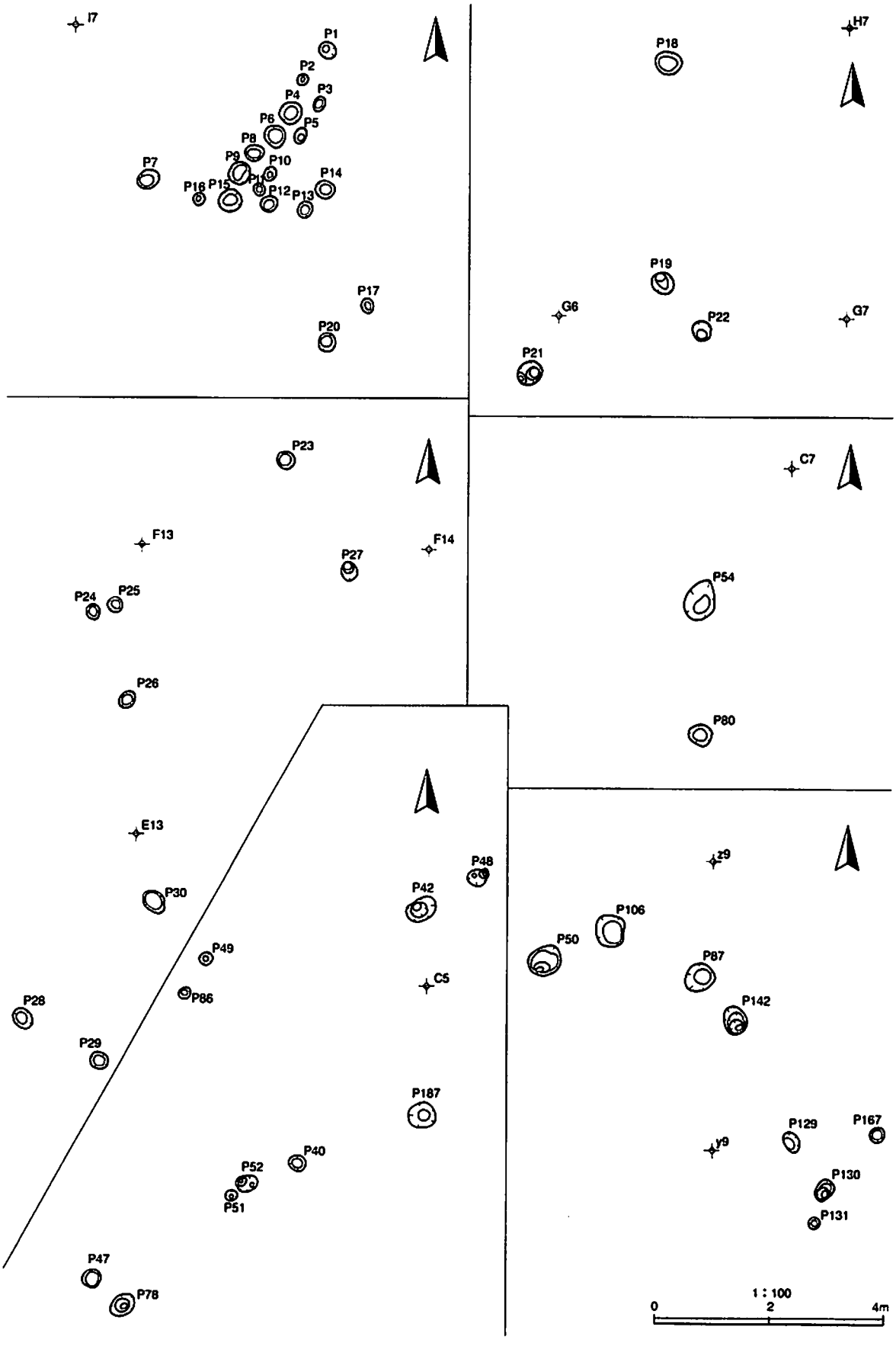
第７表　柱穴状小土坑計測表

No	規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
1	29×27	45	
2	19×18	17	
3	23×19	8	
4	40×40	29	
5	24×21	31	
6	40×39	24	
7	40×33	29	
8	30×26	20	
9	40×26	20	
10	23×22	13	
11	24×20	12	
12	31×28	14	
13	28×27	16	
14	35×30	16	
15	40×37	24	
16	21×20	18	
17	27×20	17	
18	49×40	20	
19	40×36	29	
20	33×30	21	
21	43×42	31	
22	35×31	28	
23	30×29	34	
24	26×24	36	
25	25×25	26	
26	30×25	48	
27	32×29	45	
28	37×30	24	
29	31×27	32	
30	45×32	59	
31	88×78	28	D5掘立柱建物跡１号
32	79×74	24	D5掘立柱建物跡１号
33	73×69	25	D5掘立柱建物跡１号
34	50×4	6	D5掘立柱建物跡１号
35	102×71	59	D5掘立柱建物跡１号
36	33×29	11	D5掘立柱建物跡１号
37	90×81	34	D5掘立柱建物跡１号
38	90×86	29	D5掘立柱建物跡１号
39	75×60	22	D5掘立柱建物跡１号
40	30×27	16	

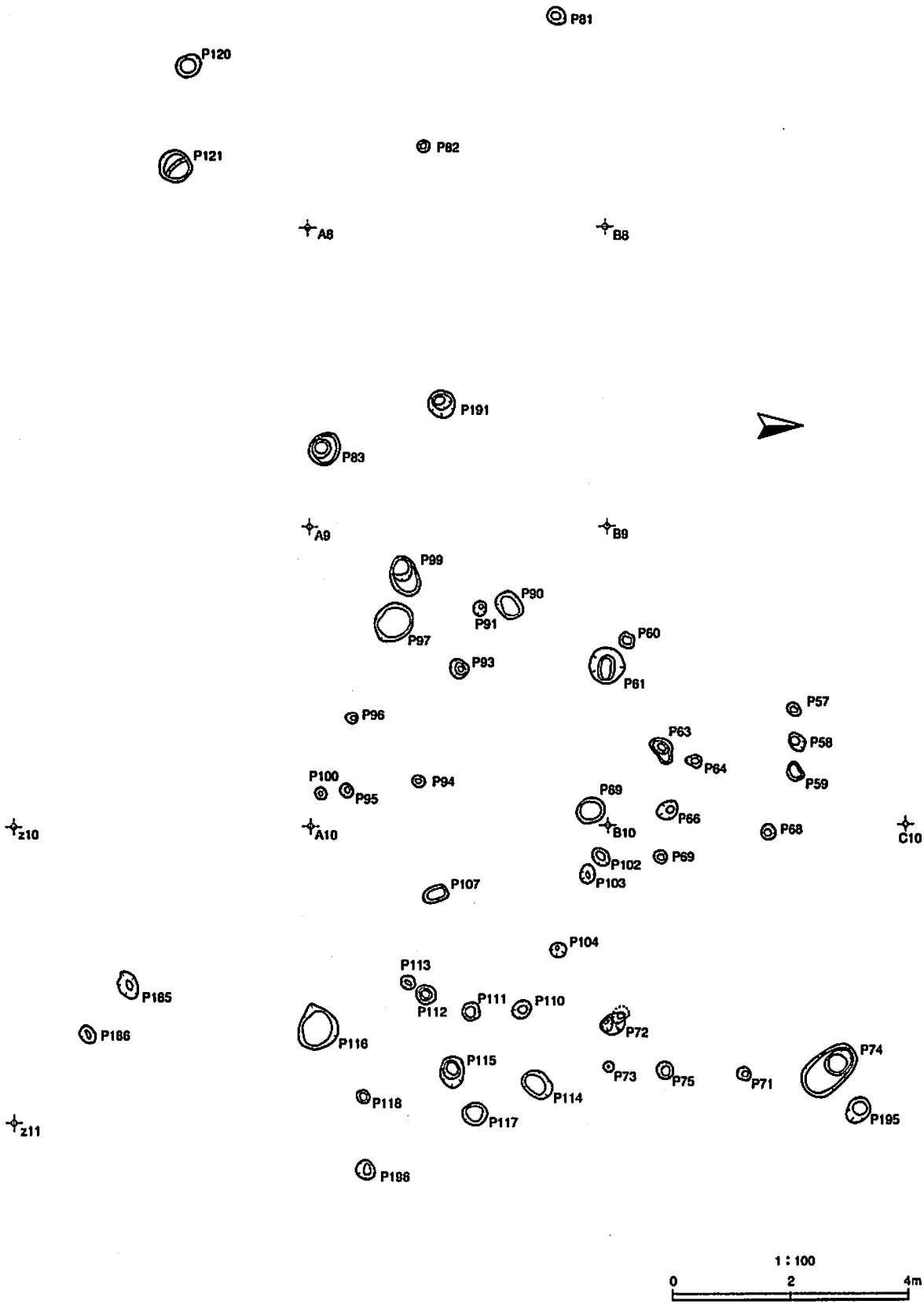
No	規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
41	86×80	26	D5掘立柱建物跡１号
42	54×37	52	
43	201×157	63	
44	93×82	26	D5掘立柱建物跡１号
45	70×67	16	D5掘立柱建物跡１号
46	92×72	30	D5掘立柱建物跡１号
47	33×32	30	
48	40×29	15	
49	24×24	24	
50	62×50	24	
51	22×19	13	
52	37×29	15	
53	23×23	21	
54	72×50	28	
55	25×20	15	
56	18×16	8	
57	25×19	12	
58	34×25	22	
59	30×25	15	
60	29×25	11	
61	60×59	70	
62	47×43	36	B9掘立柱建物跡１号
63	48×30	21	
64	26×23	21	
65	52×44	43	B9掘立柱建物跡１号
66	39×29	28	
67	44×39	41	B9掘立柱建物跡１号
68	26×24	15	
69	23×21	26	
70	21×19	32	
71	25×23	27	
72	45×33	44	
73	18×18	15	
74	120×60	104	
75	29×27	8	
76	20×18	32	
77	22×20	19	
78	46×36	63	
79	15×13	8	
80	42×37	25	

No	規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
81	30×28	54	
82	19×18	15	
83	53×47	36	
84	51×44	54	B9掘立柱建物跡1号
85	49×46	45	B9掘立柱建物跡1号
86	21×20	13	底に粘土が貼っており現代か?
87	52×46	39	
88	63×54	73	B9掘立柱建物跡1号
89	49×42	13	
90	50×43	15	
91	24×23	19	
92	55×43	55	B9掘立柱建物跡1号
93	33×27	23	
94	19×18	19	
95	22×21	15	
96	21×19	14	
97	71×60	11	
98	55×45	43	B9掘立柱建物跡1号
99	64×45	38	
100	19×19	26	
101	47×47	55	B9掘立柱建物跡1号
102	32×25	22	
103	33×24	33	
104	27×25	20	
105	50×43	32	B9掘立柱建物跡1号
106	56×53	30	
107	41×25	10	
108	52×48	61	B9掘立柱建物跡1号
109	65×63	46	B9掘立柱建物跡1号
110	32×29	59	
111	52×49	39	
112	34×33	58	
113	25×23	19	
114	55×45	17	
115	53×39	55	
116	79×69	10	
117	48×42	13	
118	23×20	11	
119	63×45	49	B9掘立柱建物跡1号
120	42×35	42	
121	54×53	52	
122	61×40	39	B9掘立柱建物跡1号
123	62×55	45	B9掘立柱建物跡1号
124	63×56	60	B9掘立柱建物跡1号
125	37×35	21	
126	19×17	19	
127	21×17	21	
128	41×40	12	
129	36×25	50	
130	37×25	45	
131	20×19	9	
132	43×35	12	
133	30×27	20	
134	26×22	14	
135	21×18	25	
136	28×20	27	
137	22×21	10	
138	28×27	31	
139	23×19	17	
140	23×16	9	

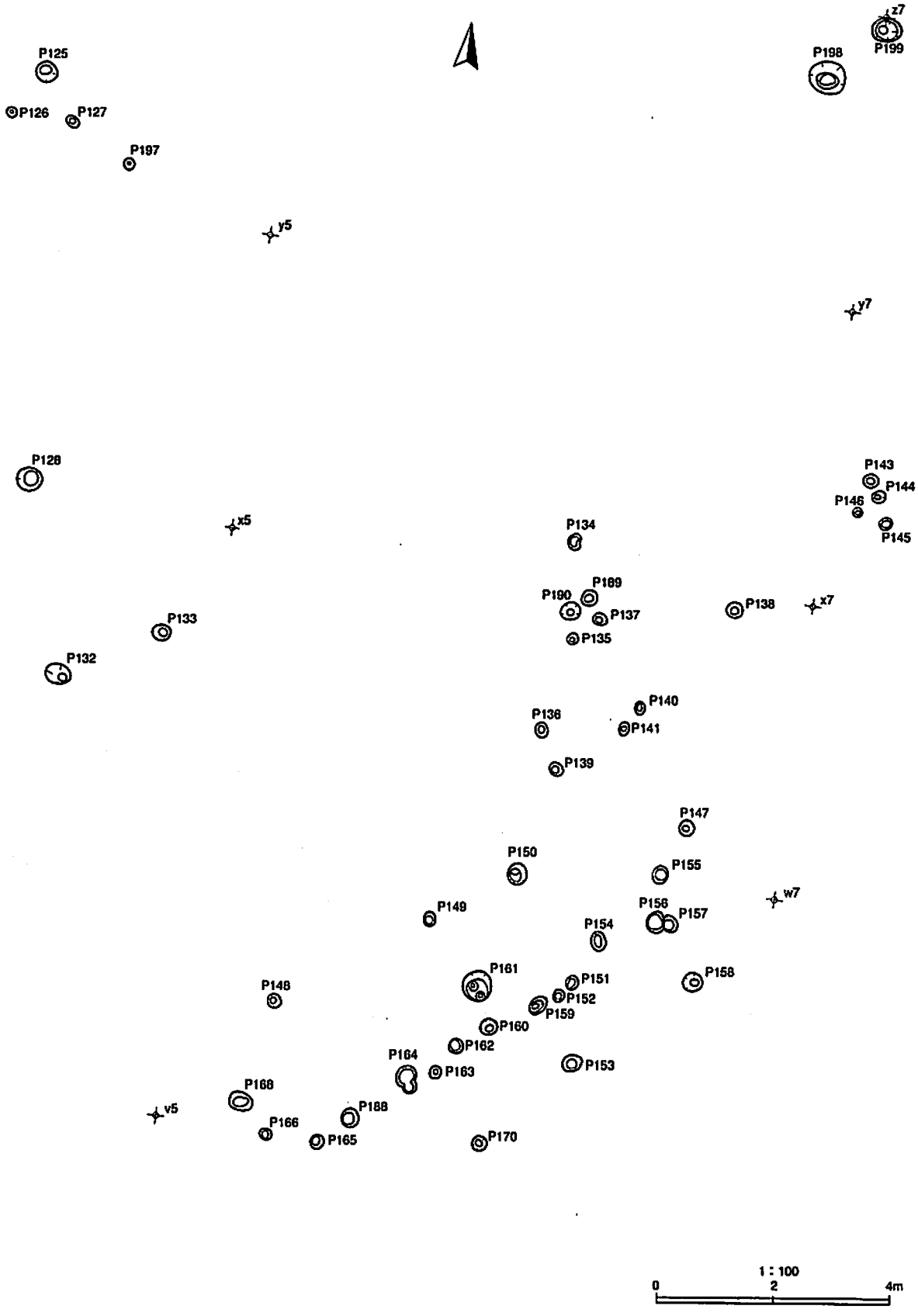
No	規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
141	21×19	13	
142	48×37	58	
143	25×25	30	
144	23×21	31	
145	22×21	13	
146	17×16	21	
147	26×25	25	
148	24×23	45	
149	24×20	25	
150	34×34	42	
151	23×22	28	
152	20×20	9	
153	30×26	13	
154	34×23	46	
155	28×27	29	
156	37×32	35	
157	32×25	12	
158	34×32	46	
159	34×23	36	
160	30×26	26	
161	52×51	37	
162	24×22	28	
163	18×18	27	
164	45×33	45	
165	25×23	39	
166	21×20	23	
167	26×25	47	
168	41×33	28	
169	22×19	20	
170	27×24	23	
171	45×35	47	
172	29×26	49	
173	28×28	25	
174	41×38	38	
175	61×52	40	
176	27×27	25	
177	42×33	46	
178	41×31	23	
179	20×18	28	
180	44×35	27	
181	26×25	30	
182	26×21	32	
183	19×18	25	
184	24×20	35	
185	50×33	38	
186	32×24	20	
187	50×47	68	
188	24×22	46	
189	29×24	21	
190	32×32	32	
191	45×42	34	
192	38×33	34	
193	25×21	34	
194	38×32	30	
195	45×35	35	
196	32×30	56	
197	19×17	22	
198	63×52	47	
199	50×41	38	



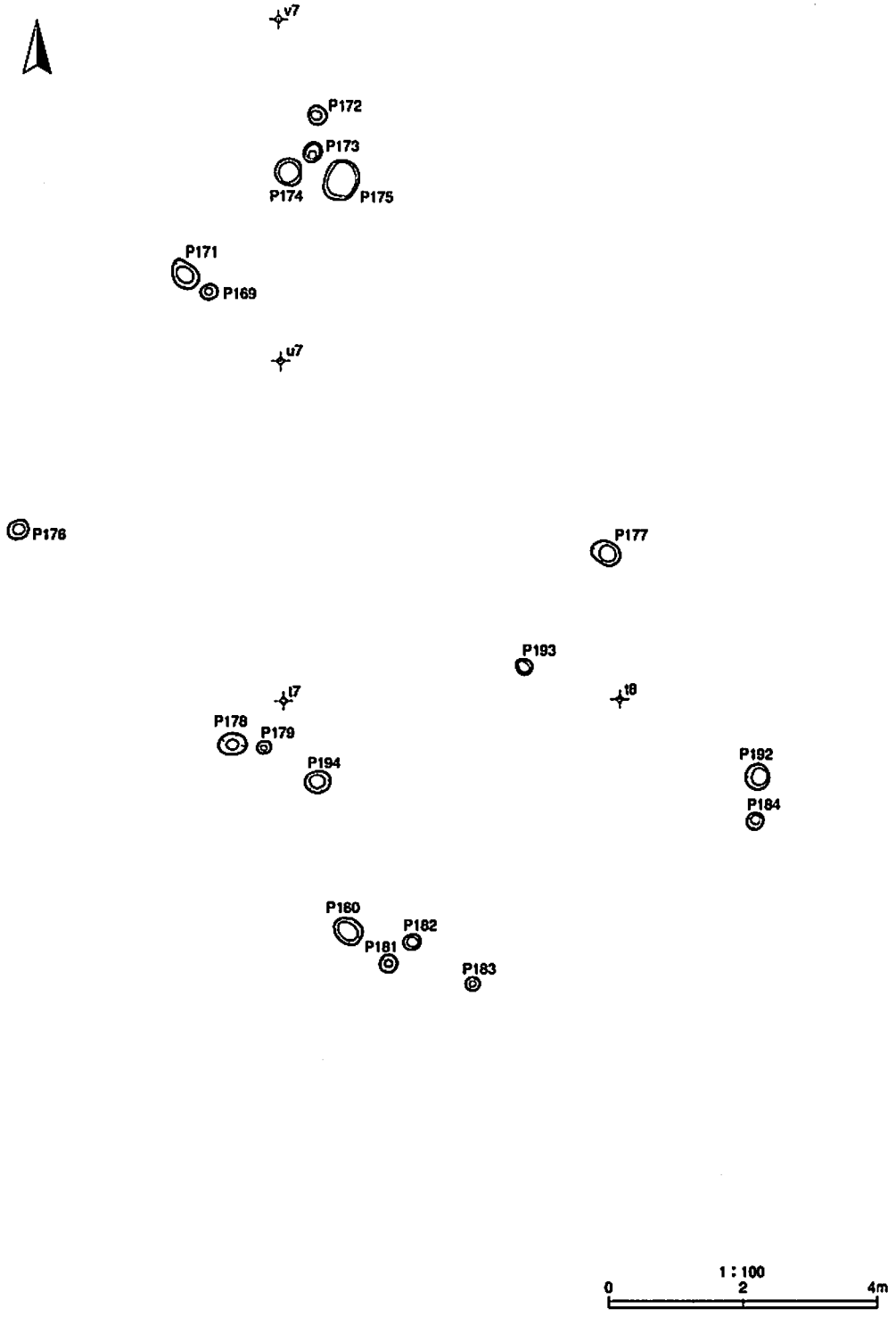
第20図　柱穴状小土坑（1）



第21図　柱穴状小土坑（2）



第22図　柱穴状小土坑（3）



第23図　柱穴状小土坑（4）

V　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺構内外合わせ土器類約９箱分、土製品３点、石器23点、石製品４点、陶磁器11点、古銭18点である。遺物は遺構外が大半を占める。遺構内遺物も、その遺構の時期を示すものではないため、それらについても本章で合わせて扱い記述する。

１．土器

出土している土器は、縄文時代早期末～晩期、弥生時代のものである。主体となるのは縄文時代後期および晩期の土器群である。

土器の観察については、器種、残存部位、口縁部形態、地文、内面調整、底部形態、胎土などの観察項目を設定し行った。それらの諸要素と従来の編年観を基に、時期的な位置付けを推定し、分類した。

〈器種〉　本遺跡で出土している土器は、そのほとんどが深鉢で、若干量鉢・壺等が見られる。今回の調査では、開口部径もしくは深さが30cmを超える完形の深鉢が５点出土している。

〈残存部位〉　残存率の違いで、完形（完形品や極一部分を欠損する土器や接合により完形個体になった土器）、ほぼ完形（接合作業などにより全体の器形がわかるまで復元された土器、概ね残存率が80パーセント前後の土器に呼称する）、1/2完形（残存率50パーセント以上のもので口縁～底部までの器形推定がほぼ可能と判断される土器）を基準とし、2/3完形、1/3完形も含めて区分した。それ以下の残存率のものは部位の名称（例としては口縁部～胴部上半付近までの破片であれば「口～胴部上半」といった具合）で記載した。

〈口唇部形態〉　口縁部の形態、口唇部の形状、突起・刻み目・刺突文・縄文施文の有無を表記した。口縁部の形態は平縁、波状、小波状のものが見られる。口唇部の形状は、断面形が丸いものを「丸み」、平坦に面取りが行われたと思われる角（かど）がつくようなものを「角状」、内側に内傾するものを「内削ぎ」と言う表現方法で記載した。

〈地文〉　施文原体の種類を表記する。施文原体の方向については、把握可能な場合には記載を行っている。

〈内面調整〉　内面の調整が把握できる場合について記載する。

〈底部形態〉　底部形態は、大きくは平底、やや上げ底に区分される。底面に網代痕などの圧痕が確認されたもの、ミガキがかけられているものがある。

〈胎土〉　本遺跡から出土している土器の胎土中に含まれる混入物は、各時期の一つの特徴として捉えられる場合が多い。観察表には、基本的に含有率が高いと感じた混入物のみを記載している。鉱物について、砂の粒を砂粒、砂粒よりも径の大きい小石を粗礫、透明なガラス質のものを石英、長石、雲母などと記載する。普通量以下は割愛し、記載していない。植物繊維について、前期前葉の土器は胎土中に植物繊維の混入が見られ、該期土器を認識する一つの目安として捉えられる。なお本遺跡出土の中では円筒下層ａ式に相当する時期と思われる土器が胎土中に多量の植物繊維を混入している。

〈第Ⅰ群土器〉　(15～17)

縄文時代早期末～前期初頭に位置づけられる土器群である。15は口縁部片で、口唇部および内外面に縄文を施文している。器厚は７㎜でやや薄めである。胎土には粗粒・長石？を含み繊維はみられない。16・17は接合はしなかったが、同地点から出土しており同一個体と思われる。

〈第Ⅱ群土器〉(18～22)

縄文時代前期に位置づけられる土器群である。完形品や全体の器形が窺えるものはなく、破片資料である。出土した層位はⅣ層である。

Ⅰ－1類　前期前～中葉に属する土器群である。18は異状斜行縄文が施文され、胎土には繊維が多量に含まれている。円筒下層ａ式に相当する土器と思われる。

Ⅰ－2類　前期後～末葉に属する土器群である。20は口縁部に刺突、口縁部隆帯上に、絡条体圧痕文、刺突列が施される。頸部には不整撚糸文、胴部には縦位木目状撚糸文が施文される。21は焼成のよい胴部片で胎土には繊維が含まれ、木目状撚糸文が施文される。

Ⅰ－3類　文様・胎土の様相から前期に属すると思われる土器群である。22は胎土に粗粒を多量に含む。

〈第Ⅲ群土器〉(1・2・8・10～14・23～32)

縄文時代中期に位置づけられる土器群である。底部を欠損した1/2完形品2点が出土した他は、破片資料である。

Ⅲ－1類　中期中葉に属する土器群で、円筒上層ｄ式・大木8ｂ式に相当するものである。13はＦ6墓壙1号から出土したものである。残存部は口縁～胴部上半で、4単位の波状口縁をもつが、突起部は欠損している。口縁部隆帯上には縄文を押圧しており、また突起部と突起部の中間には刺突を加えた瘤がつく。全体的に粘土紐貼り付け隆線による胸骨文をかたちづくり、突起部下にボタン状装飾、縦位隆線を施している。23は口縁部にやや細めの粘土紐を貼り付け、刻みを入れている。また突起部の先端は平らであり、突起部には粘土紐を横位に貼り付けている。突起部下の把手にも刻みを加えている。その他頂部および頸部にも粘土紐貼り付けによる幾何学的なモチーフをつくっている。円筒上層ｄ式に相当するものと思われる。24は口縁部に横位隆沈線を施し、隆帯上には縄文圧痕を加えている。キャリパー形の深鉢になると思われ、大木8ｂ式に相当する土器と思われる。

Ⅲ－2類　中期後葉に属する土器群で、大木9式に相当するものである。25は口縁部付近に沈線による逆三角形の区画を作りその中に刺突を加えている。その他の楕円形？区画内の地文は複節である。

Ⅲ－3類　中期末葉に属する土器群で、大木10式に相当する。1はｙ7土坑1号から出土しており、U字形？状の区画内に単節の縄文が充填される。1・10・12・26はやや赤色の強い胎土の様相が似ており、同時期のものと思われる。27はアルファベット的な区画内に、複節の縄文が充填される。

Ⅲ－4類　中期に比定されると思われる粗製土器を一括する。29は小形の深鉢で胎土に金雲母を含んでいる。31は1と同様に赤色の強い胎土を使用している。口唇部は楕円形状である。いずれも器形および胎土から中期末葉のものと思われる。32は器面に付加条の縄文を施文する筒形の粗製深鉢である。器厚は1㎝程で焼成もよい。胎土に繊維の混入はなく、形状からは前期末～中期の広い範疇の中で捉えられる。外面底部付近にはミガキが施されている。

〈第Ⅳ群土器〉(3～6・33～60)

縄文時代後期に位置づけられる土器群である。今回の調査の出土遺物の主体となる時期で、完形品も多い。

Ⅳ－1類　後期初頭～前葉に属する土器群である。33は波状口縁を有する深鉢で、突起部に2個の刺突が

あり、器面は沈線による区画が明瞭である。充填縄文を施した後、再度沈線で調整を行ったものと思われる。34は折り返し口縁の粗製深鉢である。36はやや小形の深鉢底部で、網代痕がみられる。37と38は同一個体である。波状口縁をもつ深鉢で、突起部には3条の刻みが施される。口縁部には横位平行沈線4本が引かれる。縄文は口縁部平行沈線部分まで施文される。波頂部下には平行沈線を切って円状文が描かれ、その頂部には径2㎜の刺突が施される。また円状文下位の沈線内には縦位羽状縄文的な施文をしている。

Ⅳ－2類　縄文時代後期中葉に位置づけられる土器群である。39は注口土器の胴部片と思われ、縦位に羽状縄文を施文している。

Ⅳ－3類　縄文時代後期後葉に位置づけられる土器群である。42は、横位羽状縄文が施文された粗製深鉢である。口唇部は長径42㎝、短径36㎝程の略楕円形を呈する。43は縦位に羽状縄文が施された深鉢の口縁部である。

Ⅳ－4類　後期末葉に位置する土器群である。44は節の細かい縄文を施文した後、磨り消している痕跡がみられる。45は内面調整が荒いことから台付鉢の脚部と思われる。48は深鉢完形品で、波状口縁を呈し、頂部には2分された山形突起がつけられる。突起は大突起と小突起に区分され、大突起の間に小突起が配置され大突起9単位、小突起8単位で周回する。器形的特徴として、口縁部は外反し、胴部は一度膨らんでから急激に底部に向かって窄まる。文様的特徴としては、頚部には3段の入組文が、胴部ボタン状貼付文の下には2段の入組文がめぐる。頚部の沈線間には刻目文が、胴部の沈線間には縄文を施文している。49は口径が30㎝強・器高44㎝強の粗製深鉢で、横位に羽状縄文を施文するほぼ完形の粗製深鉢である。口唇部は略楕円形である。後期末葉～晩期初頭で捉えられる。

Ⅳ－5類　後期に比定されると思われる粗製土器・無文土器を一括する。50・52とも口径が40㎝程、60は器高が44㎝程の大形の深鉢である。56小形深鉢で、複節の縄文が施文される。内面にはケズリがみられる。59は口唇部に山形の小突起をもった深鉢である。

〈第Ⅴ群〉（7・9・61～82）

縄文時代晩期に位置づけられる土器群である。

Ⅴ－1類　晩期初頭～前葉に位置づけられる土器群である。61は台付き鉢の脚部と思われ、内面処理は粗い。下位に平行沈線が引かれ、その中に刺突列が施される。62は深鉢胴部で、平行沈線・入組三叉文が描かれ、内部には磨消縄文が施される。63は鉢の口縁部で、小波状の口唇部の凹部に刺突が、口縁部に入組三叉文が施される。以上大洞B式に相当するものと思われる。64は口縁部に羊歯縄文が施される鉢である。大洞BC式に相当するものと思われる。

Ⅴ－2類　晩期中葉に位置づけられる土器群である。66は深鉢の口縁部で、口唇部に2個1対の突起がつけられ、口縁部には3条の平行沈線が施される。65は鉢の口縁部で、口唇部には突起がつけられる。いずれも大洞C2式に相当するものと思われる。

Ⅴ－3類　晩期後葉～末葉に位置づけられる土器群である。67は台付鉢の脚部で、内面は丹念なミガキがかけられている。文様は平行沈線・工字文が施される。68は高坏？の口縁部で、口唇部には短沈線が、口縁部には横位沈線が施される。口縁裏側には溝状沈線が施される。いずれも大洞A式に相当するものと思われる。69は壺の胴部片である。

Ⅴ－4類　晩期に比定されると思われる粗製土器を一括する。70は鉢の口縁部で、口唇部に指頭圧痕が加えられ小波状口縁がつくられている。77は底部径4.5cm程の小形の深鉢で、斜縄文を施文した後2本1対の曲線が6単位で胴部下端～胴部方向へ施される。

〈第Ⅵ群〉

弥生時代に位置づけられる土器群である。83は高坏？の口縁部で、口唇部には刻みが、内外面に平行斜沈線が施されている。口縁部には隆帯の剥落痕？がある。

2．土製品

土製品は、土偶1点、ミニチュア土器2点、円盤状土製品3点が出土している。

〈土偶〉　1点が出土した（84）。腕の付け根部および下腹部から脚部にかけて刺突が施されている。下腹部から脚部にかけては背面にも刺突が施される。時期は後期前葉～中葉と捉えられる。

〈ミニチュア土器〉　85は壺のミニチュア土器の底～胴部で、外面に赤色顔料を塗布した後黒色顔料（漆？）を塗布している。時期は後期と捉えられる。86は台付鉢のミニチュア土器で、横位平行沈線が施される。晩期中葉大洞A式に相当するものと思われる。

〈円盤状土製品〉　3点が出土した。87は器厚が厚く、中央にボタン状装飾の剥離痕と思われる痕跡がみられる。中期と捉えられる。88は角状に沈線文が描かれる。後期初頭～前葉と捉えられる。89は無文で、内面にはミガキが施されている。後期と捉えられる。

3．石器

出土した石器は、石鏃1点、石匙1点、削掻器3点、ユーティライズドフレーク1点、剥片石器1点、石核2点、打製石斧1点、磨製石斧1点、半円状打製石器1点、敲石1点、凹石2点、磨石8点である。全て縄文時代と思われる。

石鏃（94）

1点が出土した。頁岩製の無茎のものである。尖頭部と巾広の基部を有し、左右ほぼ対象、断面形は凸レンズ状である。

石匙（95）

1点が出土した。両側から抉りを入れて作った摘み部と刃部を持っている。横型で、石質は頁岩である。熱の影響を受けており、摘み部およびその下方に発砲跡が、前面・背面に火はねによる剥離がある。

削掻器（96・97）

3点が出土し、2点を掲載した。いずれも頁岩製である。96は横長の剥片に調整剥離を加えて刃部としたものである。97は両面から加工を加えて刃部を形成している。上部は平らに削がれている。

ユーティライズドフレーク（98）

z11トレンチⅥ層から出土したもので、表裏縄文を有する15～17の土器および99の石核と共伴したものである。左側縁部に使用による微細な剥離が見られる。石材は頁岩である。

剥片石器（91）

赤色頁岩製の縦長剥片である。

石核（90・99）

2点出土した。90はM6竪穴建物跡1号の床面下部から出土したものである。99はz11トレンチⅥ層から出土したもので、表裏縄文を有する15～17の土器と共伴したものである。いずれも頁岩である。

打製石斧（100）

1点が出土した。片面を加工したもので、背面上部には剥落がある他、前面・背面とも素材の面が残る。石質は石英安山岩である。

磨製石斧（101）

1点が出土した。刃部のみの欠損品で、石質は閃緑岩である。

半円状扁平打製石器（93）

1点が出土した。楕円形状の小礫の側縁を打ち欠き、両面から加工を加えている。石材は安山岩である。

敲石（102）

1点出土した。前面中央部、右側縁、下部に敲打痕を有する。石材は安山岩である。

磨石（92・105～111）

8点が出土した。92は平面形は円形で、断面形は楕円形状の磨石である。前面・背面に磨面が見られる他、下部の欠損部周辺にも擦痕を有する。全体にひび割れを起こしている。105は、平面形が楕円形状を呈し、右側縁上部に擦痕が見られる。また前面・背面中央部には敲打による凹部がある。前面の凹部は擂り鉢状を呈し、背面の凹部は敲打が浅い。石材は安山岩である。106は、前面中央部および背面の左右に擦痕が見られる。下部は敲石として使用した後に磨石として使用している。石材は安山岩である。107は前面・右側縁・背面に磨面がある。前・背面中央部には敲打痕があり、浅い凹部がみられる。凹部周辺の敲打部が滑らかであることから、前・背面は、凹石として短期間使用した後磨石に転用した可能性が高い。石材は安山岩である。108は、前面上部に磨面を残し、その他の部分は風化によると思われる凹凸が激しい。石材は花崗閃緑岩である。109は右上部に擦痕を残す。背面中央部にやや黒っぽく変色した部分があり、使用期間の短い磨面の可能性がある。石材は花崗閃緑岩である。110は台形状をした磨石で、前面・背面は平らである。磨面は前面のほぼ全域である。石材はホルンフェルスである。111は前面および背面に磨面がみられる。石材は安山岩である。

凹石（103・104）

2点が出土した。103は前・背面中央部に凹部をもつ凹石である。104は前面に浅い凹部をもつ凹石で、背面中央部には弱い擦痕が見られる。石材は双方とも安山岩である。

4．石製品（112～115）

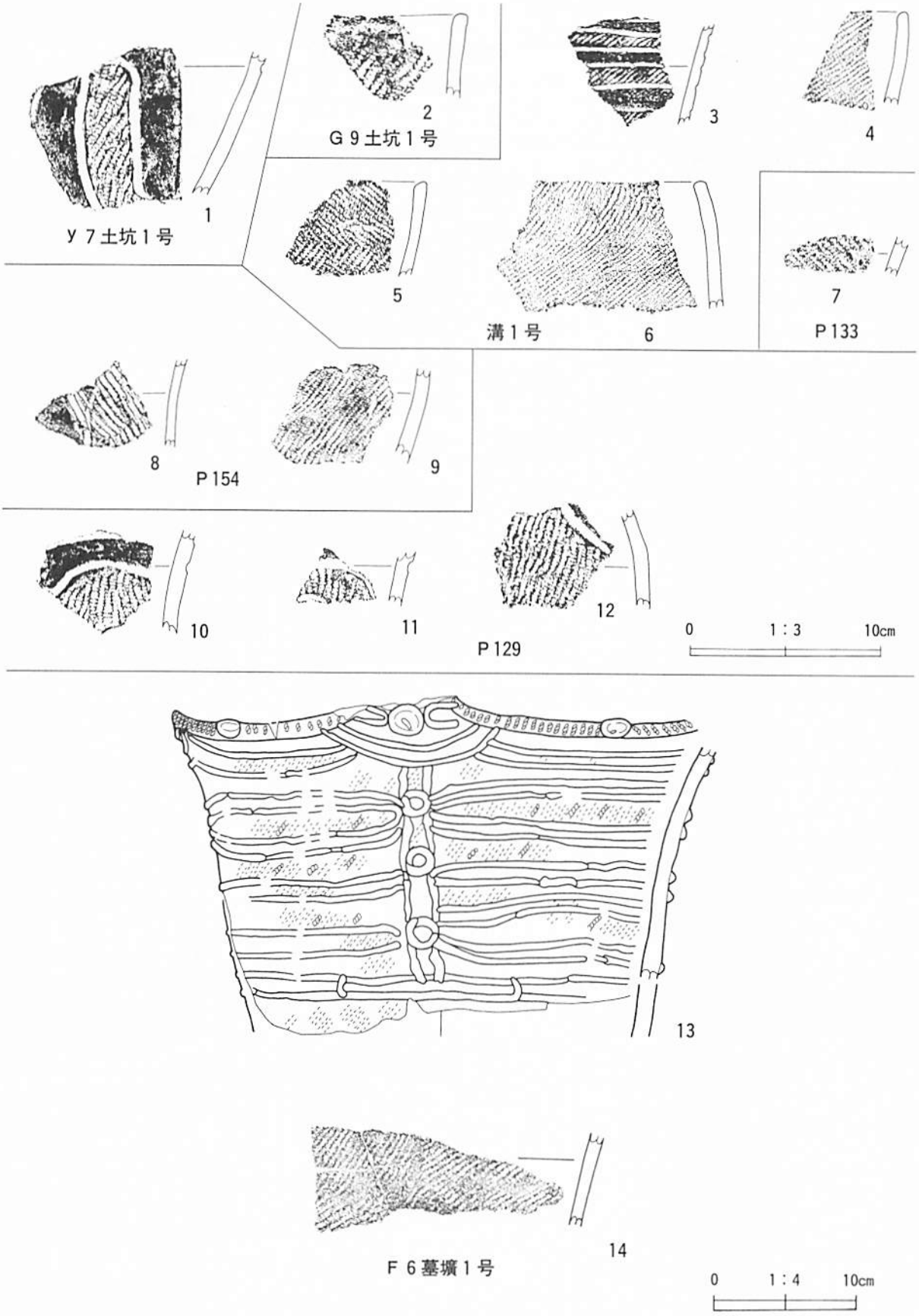
いずれも敲摺り臼で、4点出土した。112・113は上臼、114・115は下臼である。

5．陶磁器類

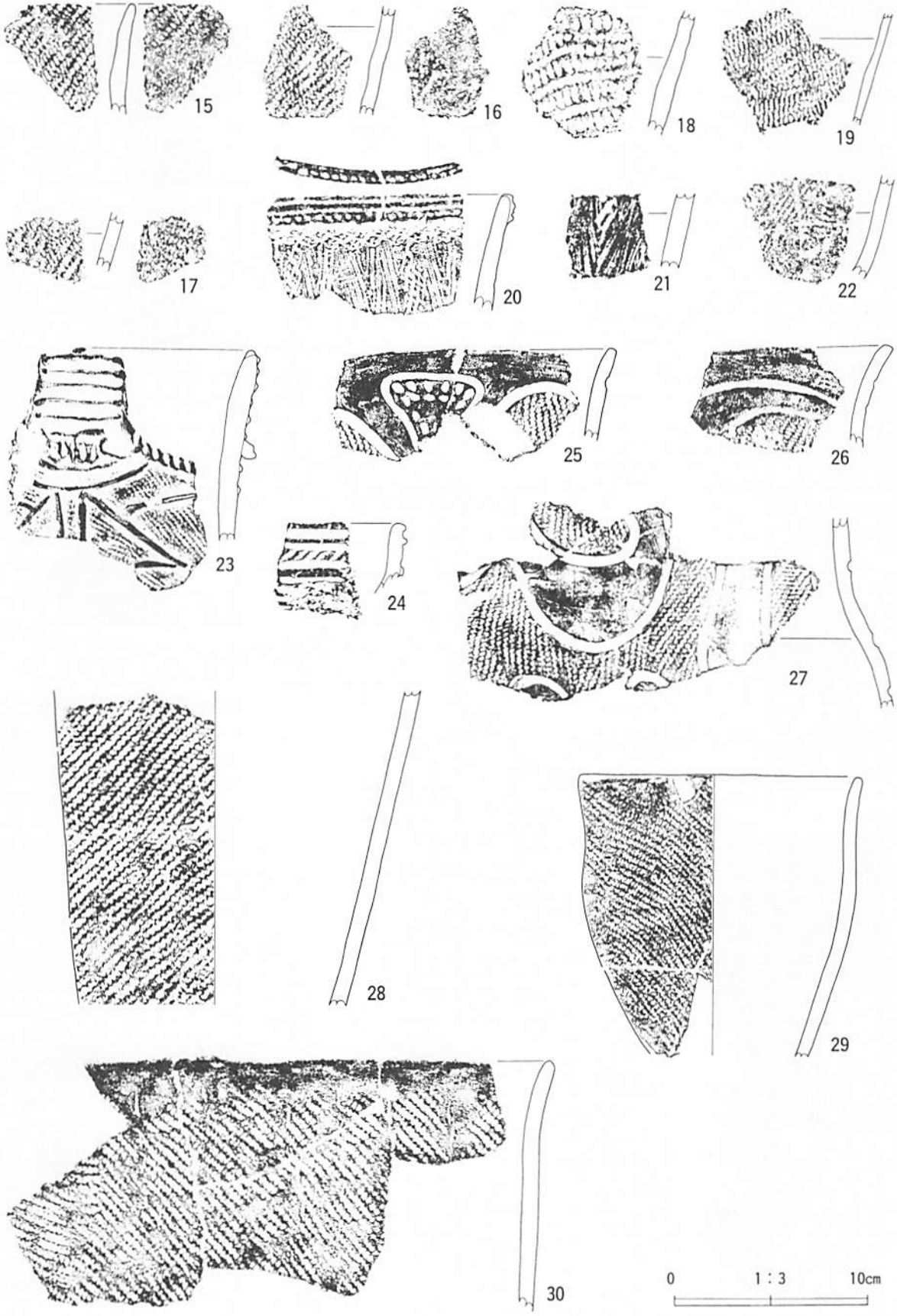
11点が出土し、そのうち9点を掲載した。いずれも国産で、制作年代は18～19世紀のものである。陶器は4点出土し（2点掲載）、123は瀬戸美濃or久慈産の腰錆碗の小破片である。磁器は、産地が肥前もしくは肥前系のもので、7点のうち碗の小破片が6点（116・117・120・121・122・124）、瓶の頚部片が1点（119）である。文様は、116は圏線が、122は二重網目文が、124は菊花文が施されている。120はいわゆる「くらわんか」とよばれる磁器片である。

6．銭貨

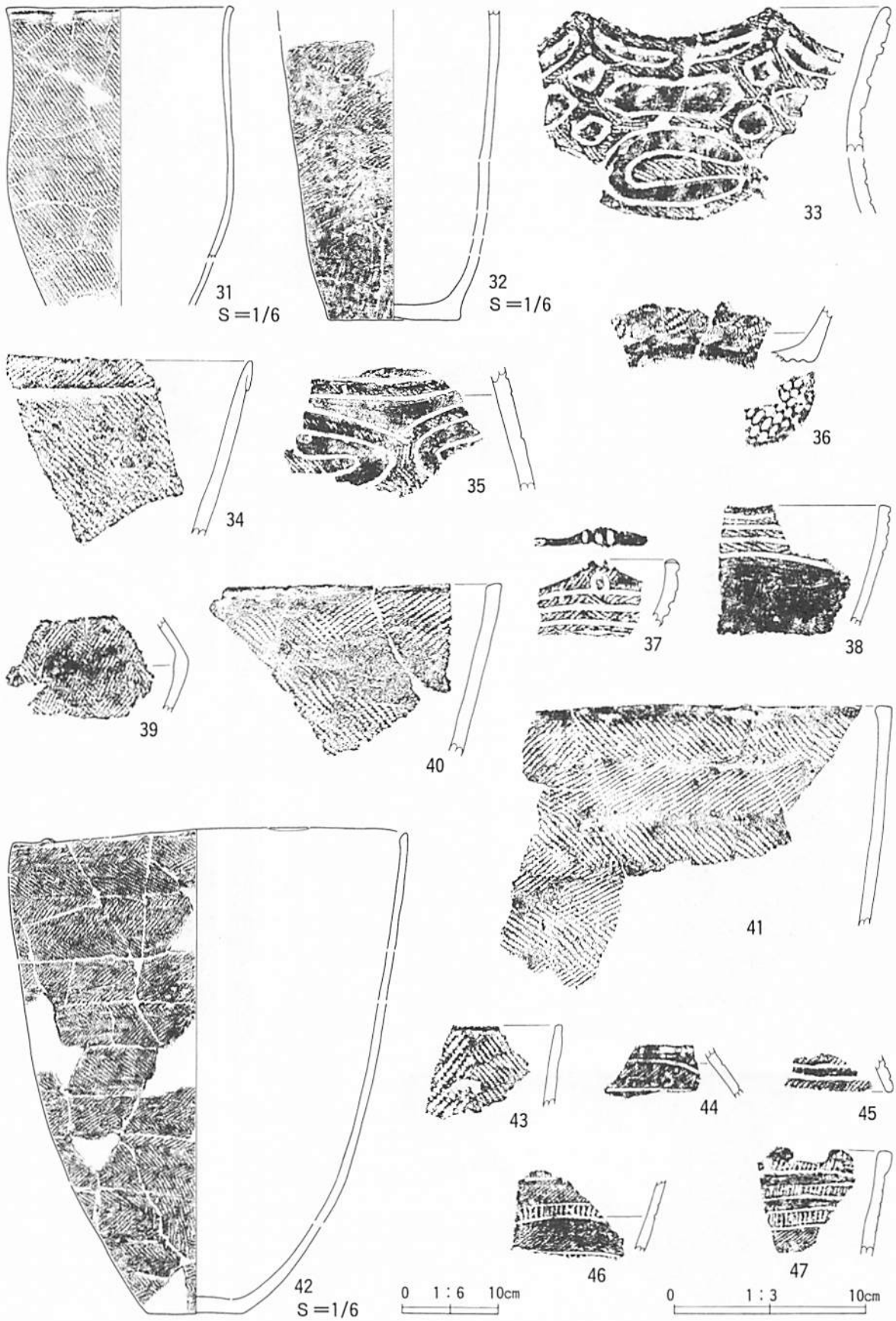
寛永通寶12点、至道元寶（北宋：995）１点、元豊通寶（北宋：初鋳年1078）１点、半銭１点、一銭１点、五銭１点、刻印不明の鉄銭が１点出土した。寛永通寶の内訳は、１期（古寛永：初鋳年1636）６点、２期（新寛永文銭：初鋳年1668）３点、３期（新寛永：初鋳年1697）３点である。なお、寛永通寶の分類は、日本出土銭総覧1996年版（兵庫埋蔵銭調査会）に依った。



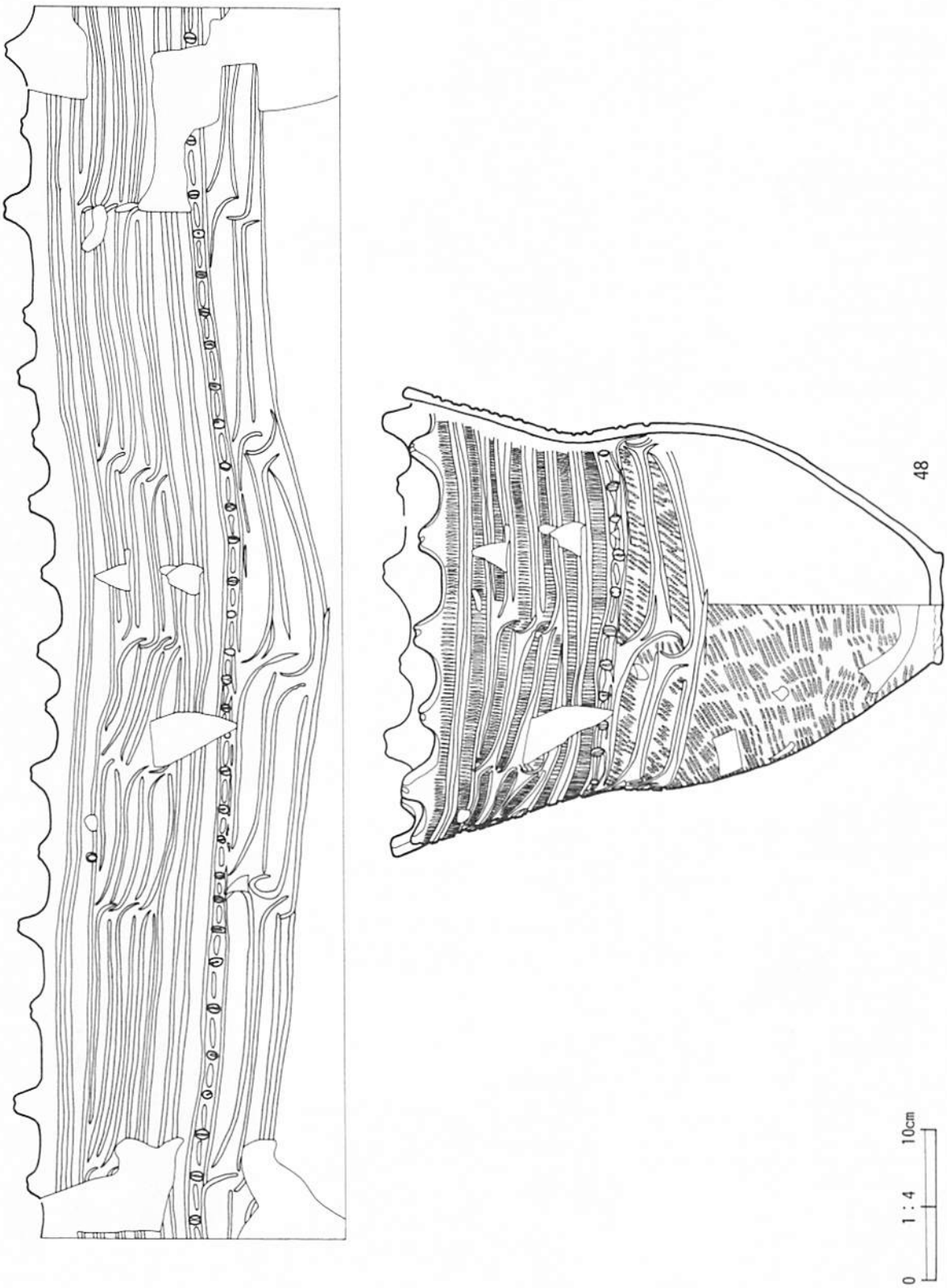
第24図　遺構内出土土器



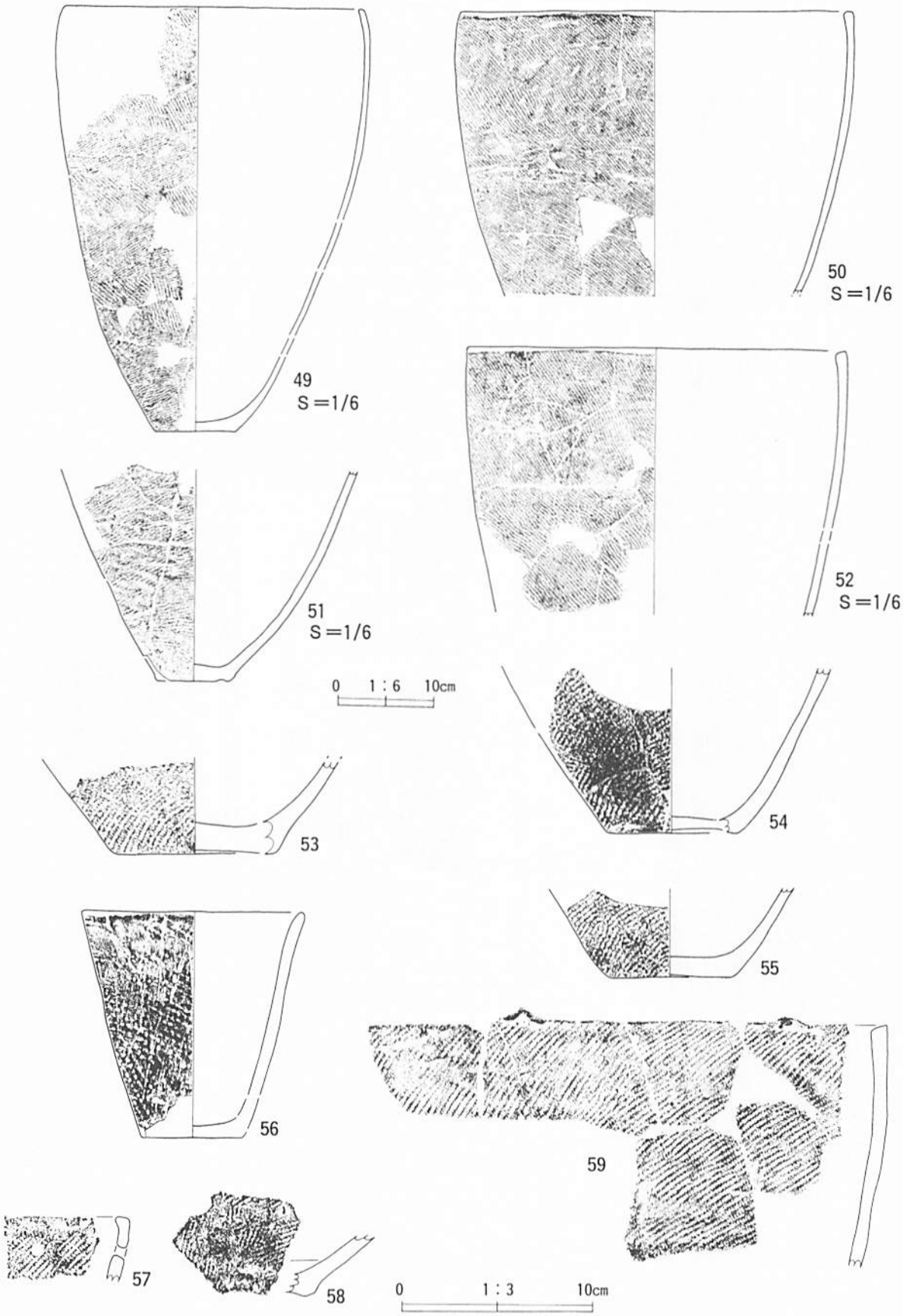
第25図　遺構外出土土器（1）



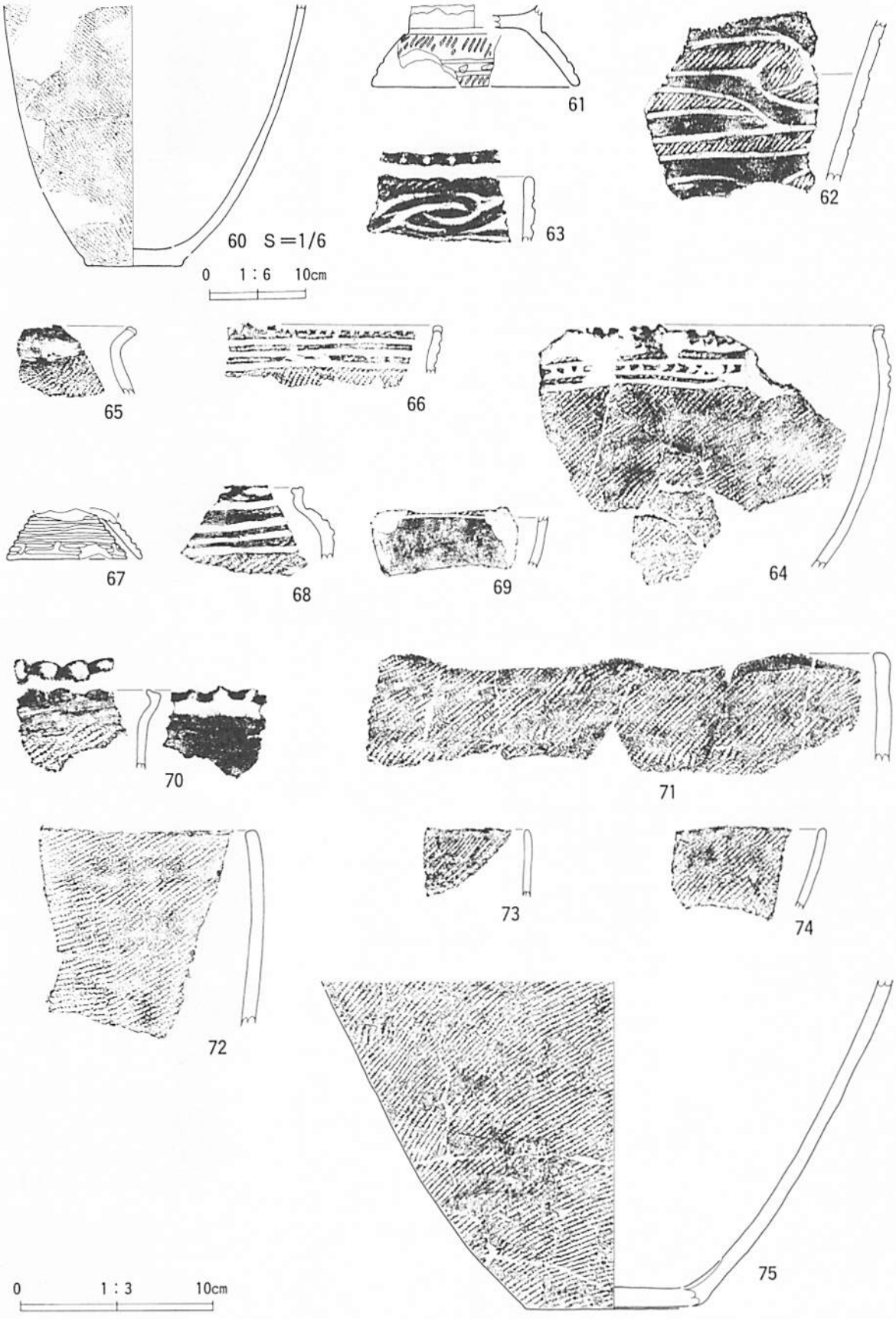
第26図　遺構外出土土器（２）



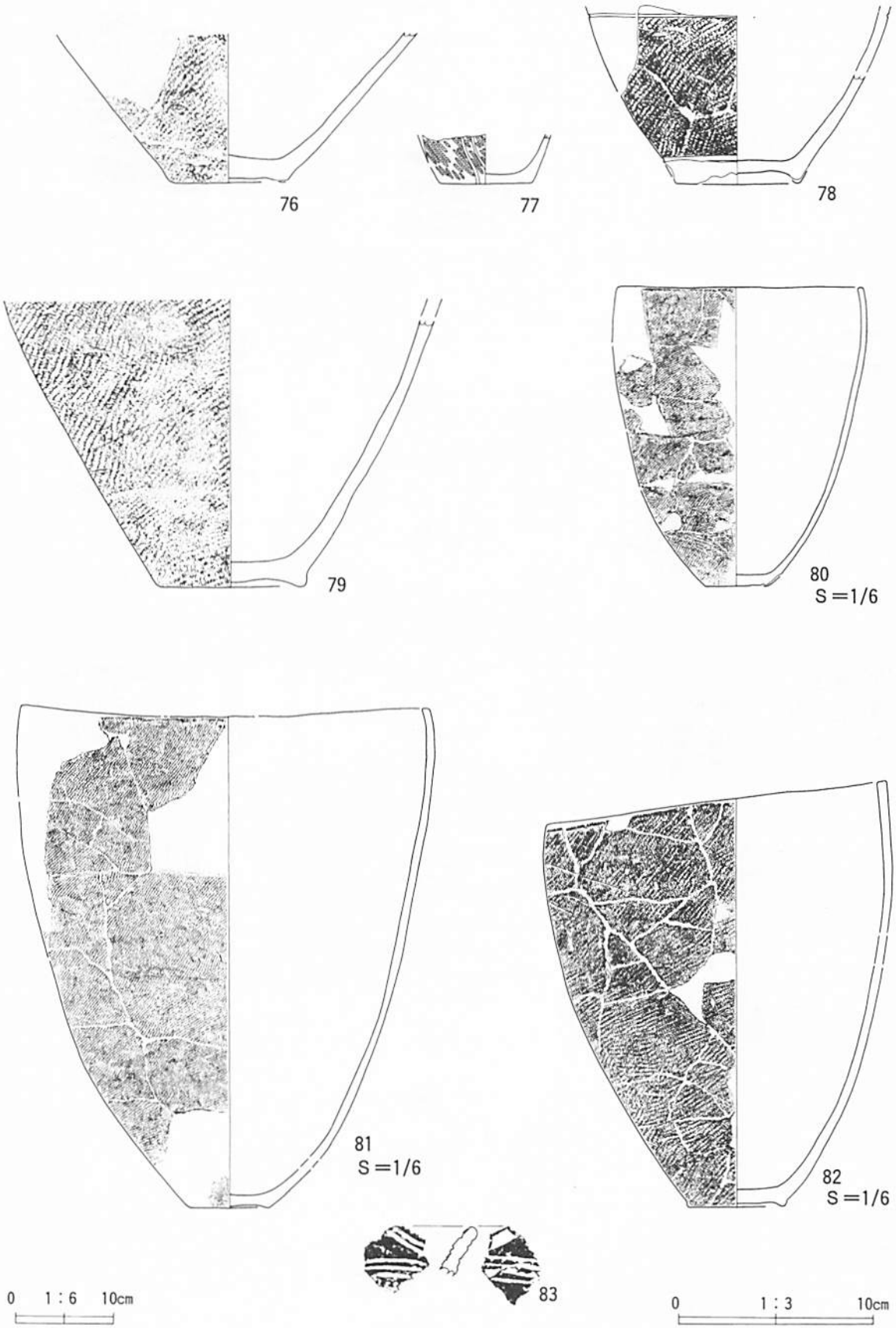
第27図　遺構外出土土器（3）



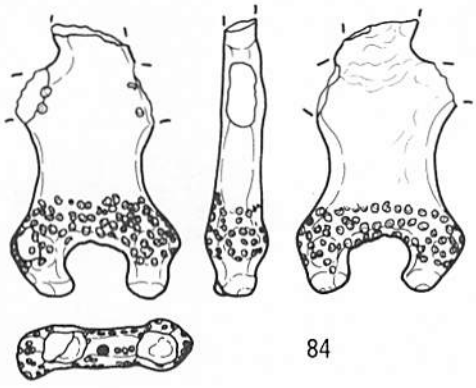
第28図　遺構外出土土器（4）



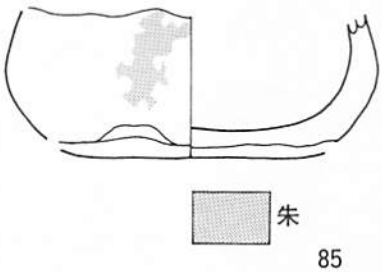
第29図　遺構外出土土器（5）



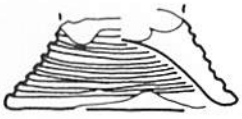
第30図　遺構外出土土器（6）



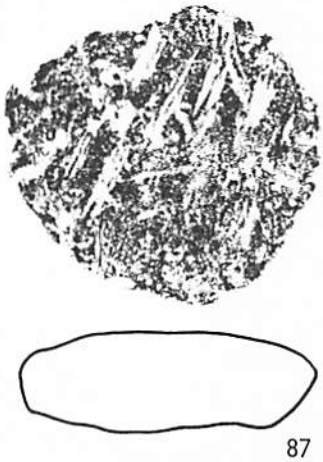
84



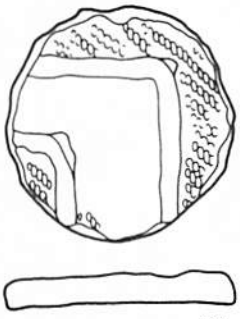
85



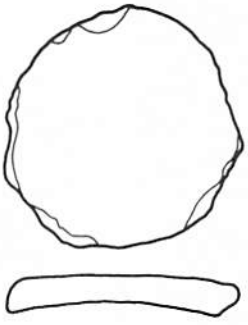
86



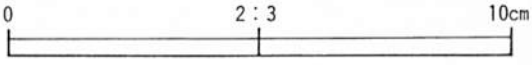
87



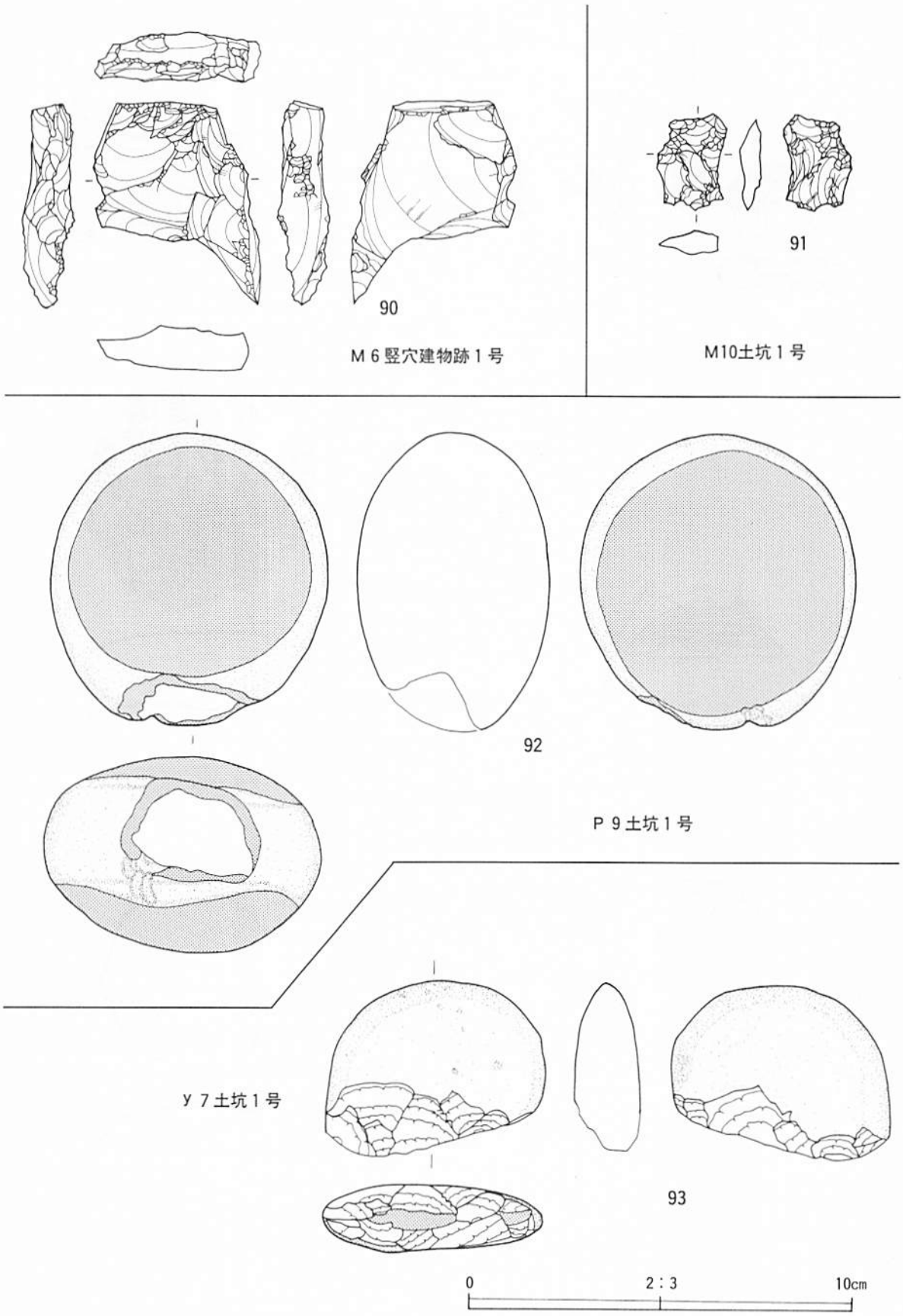
88



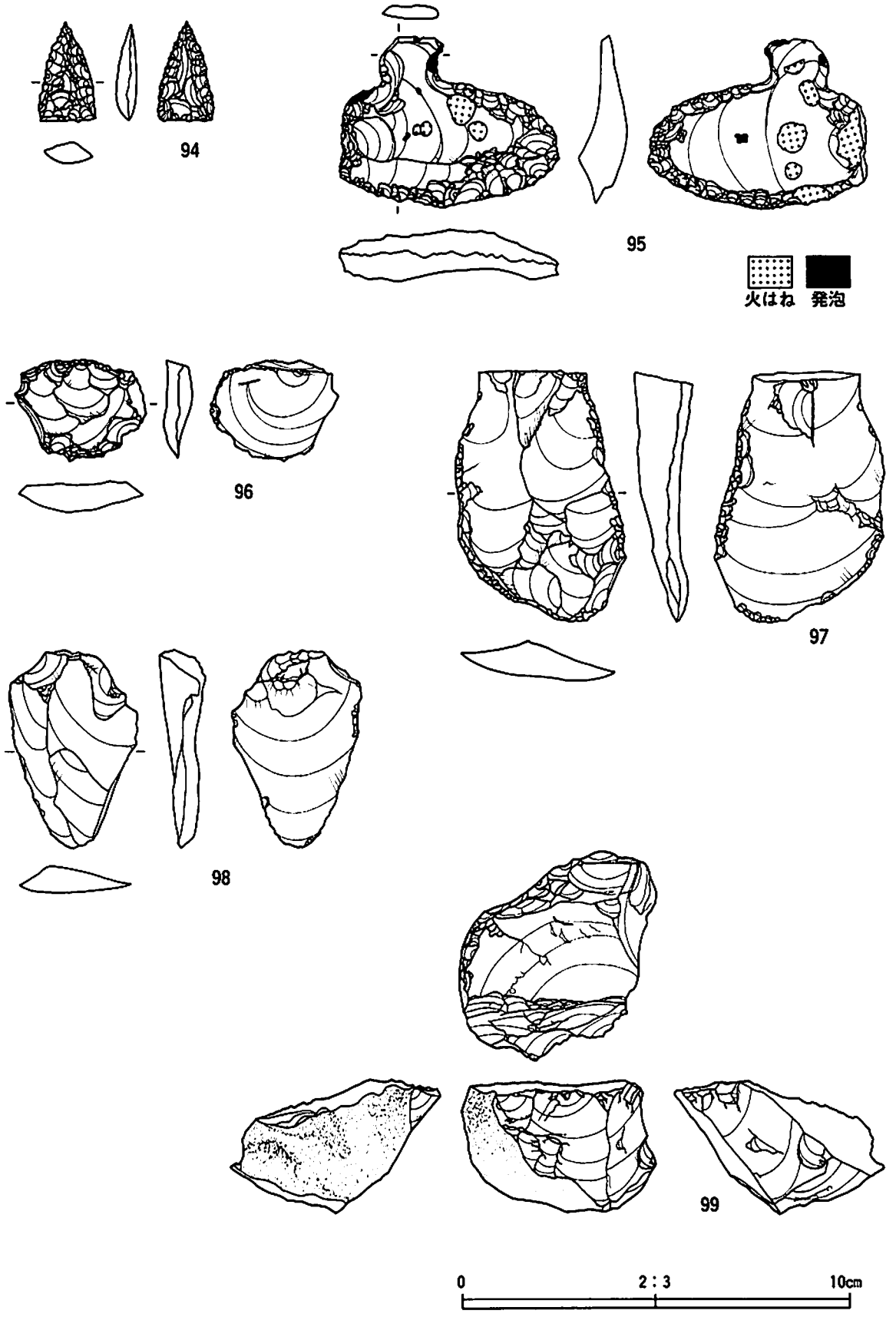
89



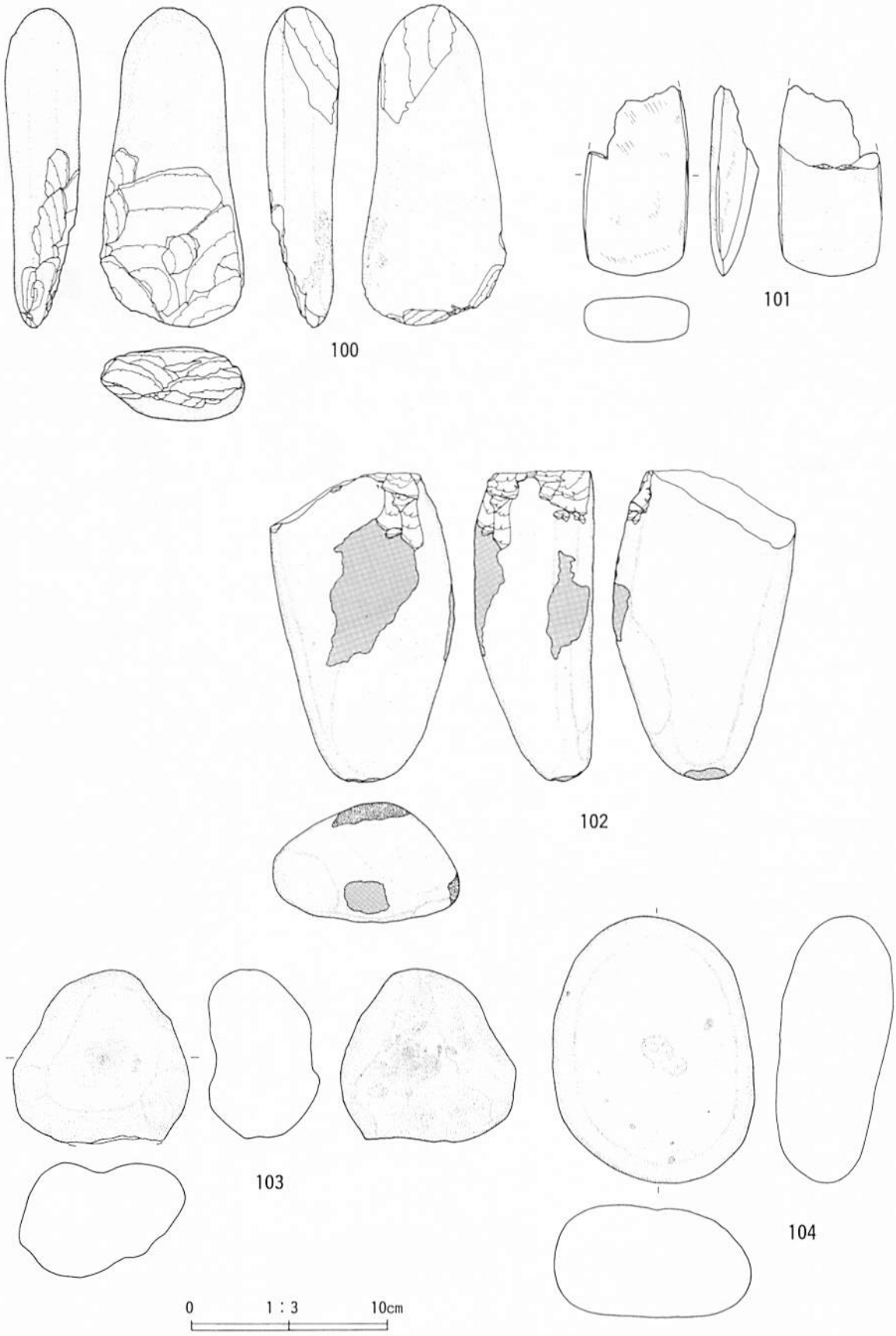
第31図　土製品



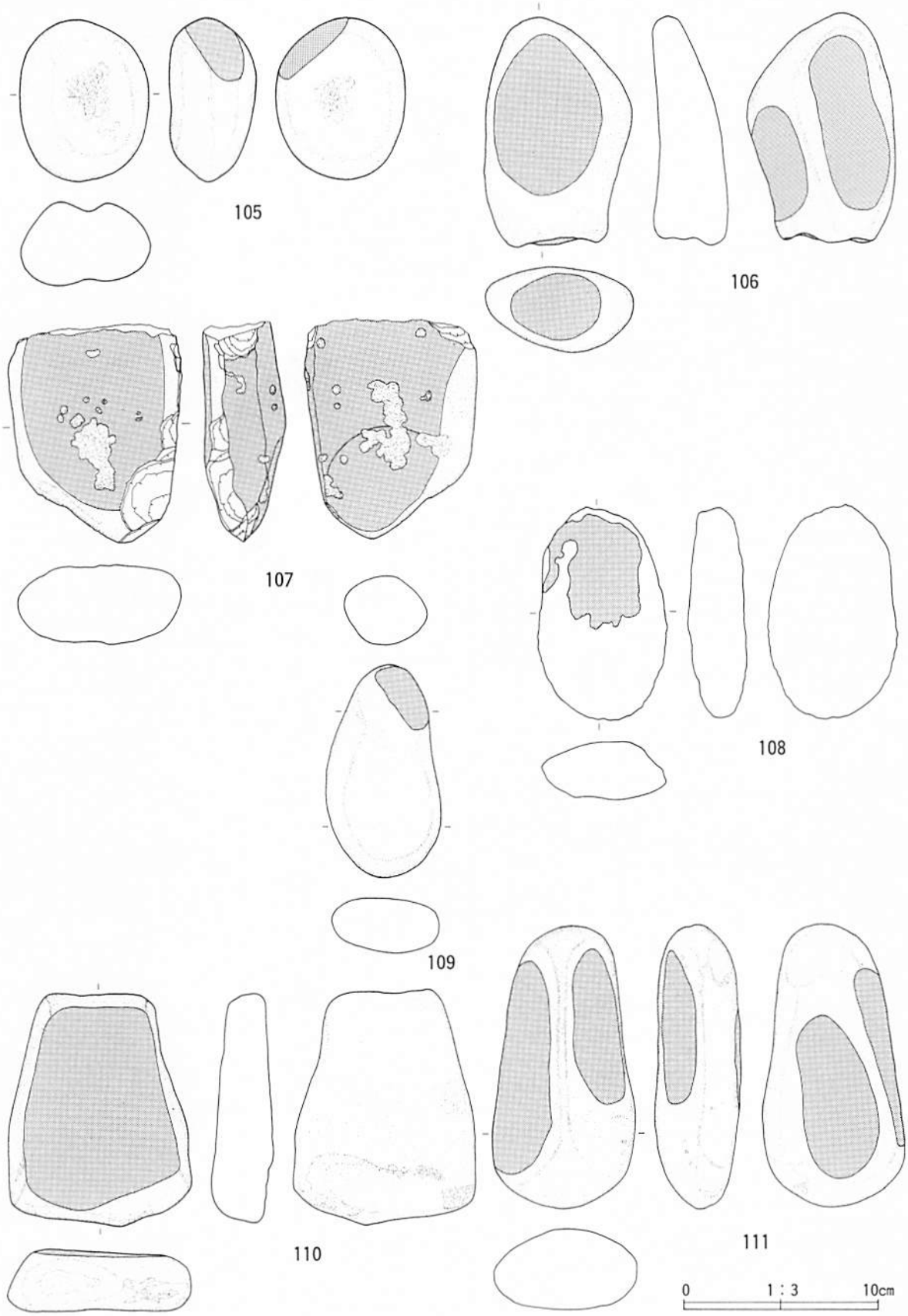
第32図　遺構内出土石器



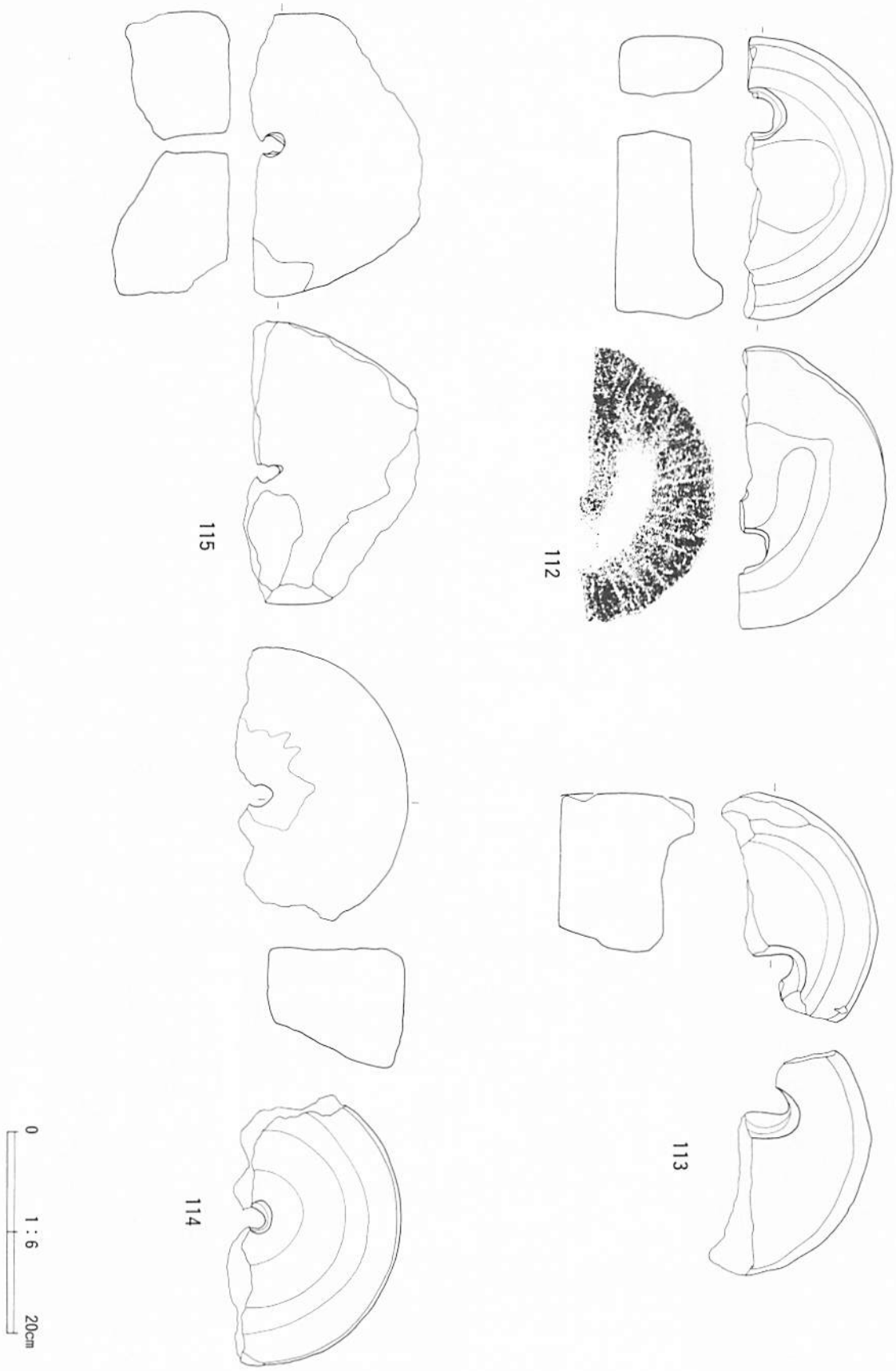
第33図　遺構外出土石器（1）



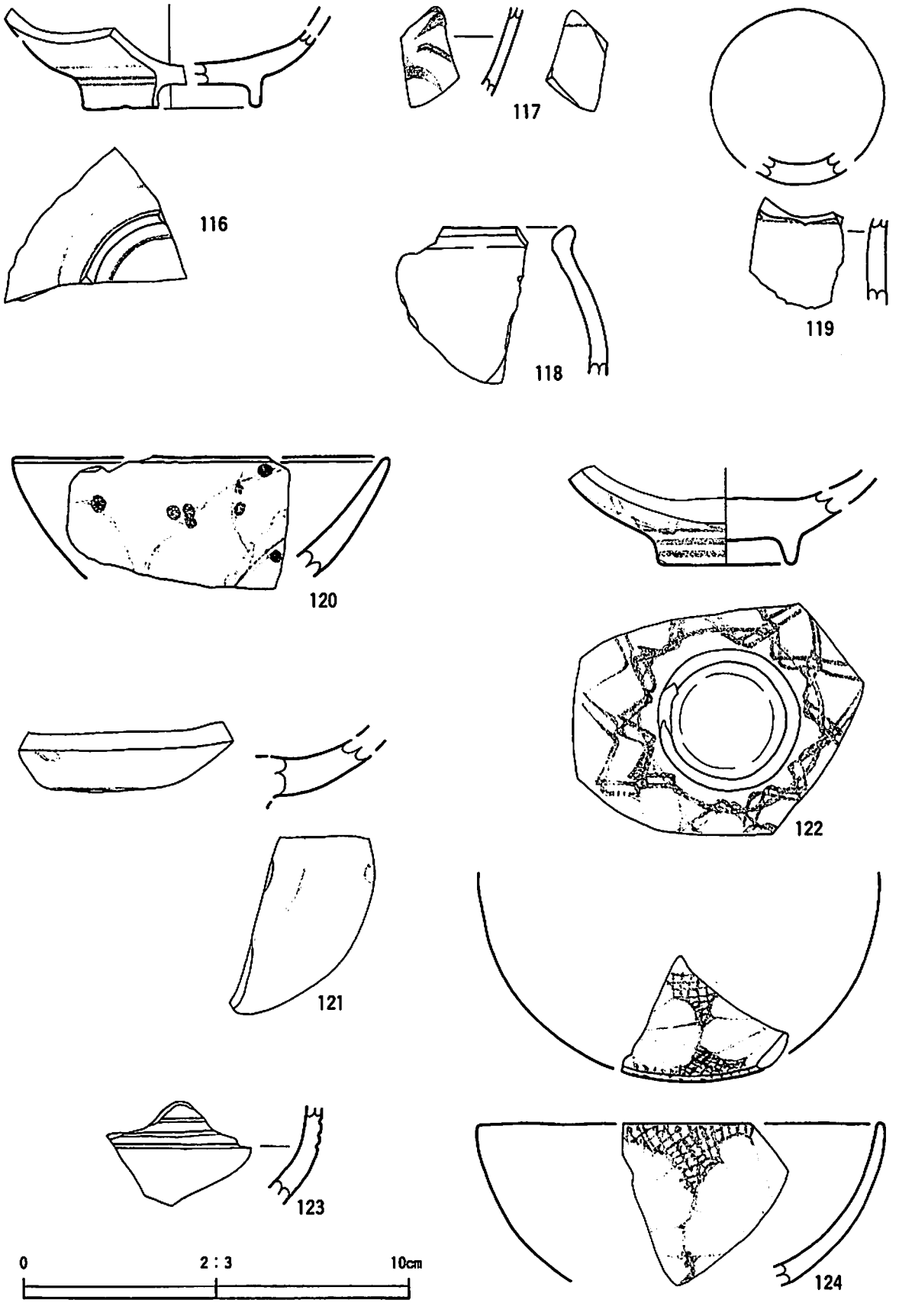
第34図　遺構外出土石器（２）



第35図　遺構外出土石器（3）



第36図　石製品

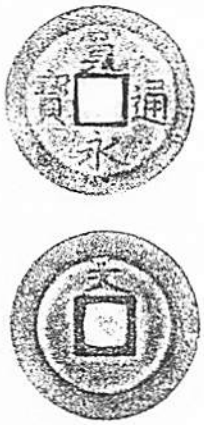


第37図　陶磁器類

125

126

127



128

129

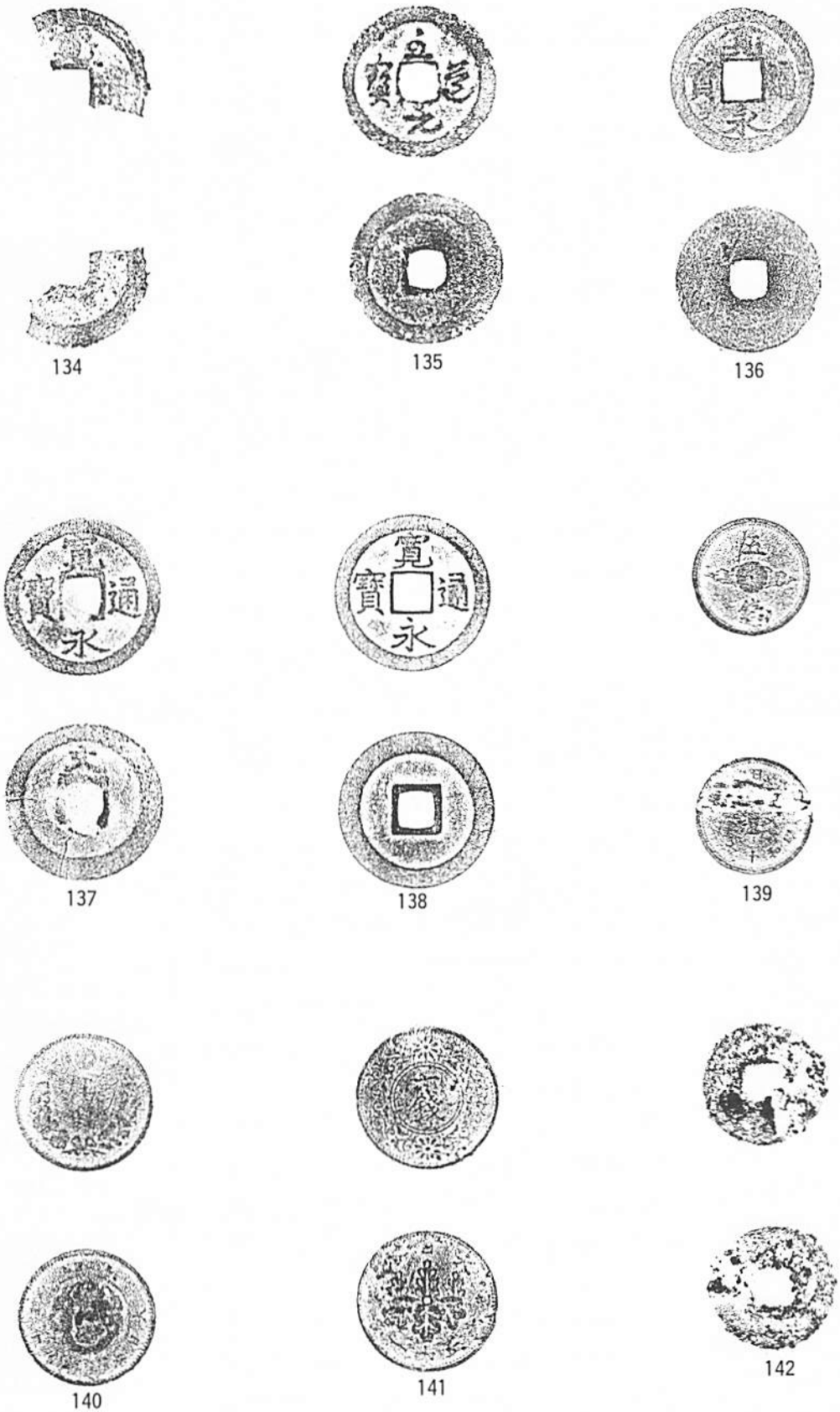
130

131

132

133

第38図　銭貨（1）



第39図　銭貨（2）

Ⅵ　考察とまとめ

諏訪前遺跡で検出された遺構は、竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡２棟、井戸跡２基、土坑20基、墓壙５基、溝１条、焼土遺構１基、柱穴状小土坑199基である。それぞれについて、考察を交えてまとめとしたい。

１．遺構

(1)竪穴建物跡

竪穴建物跡は１棟が検出されている。形状的な特徴としては、入り口施設と思われる張り出し部が壁中央に設けられている。１棟のみの検出であるため、その性格を断ずることはできないが、柱穴の配列から住居跡ではなく、倉庫的に使用していたものと思われる。

(2)掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は２棟検出された。Ｂ９掘立柱建物跡１号は、柱穴埋土より寛永通寶が出土したことから、時期は近世以降と捉えられるが、Ｄ５掘立柱建物跡１号は出土遺物がないため、時期は不明である。しかしながら、近接する遺跡の中で、今年度二戸市が調査を行った『諏訪前遺跡Ⅱ区・Ⅳ区』で検出された中世の堀跡の方位も南西－北東方向であり、本掘立柱建物跡の棟方向に近い。Ｂ９掘立柱建物跡１号と柱穴の規模・埋土の様相が異なることから考えても、本掘立柱建物跡はＢ９掘立柱建物跡１号とは時期が異なり、中世のものである可能性が高いと思われる。

(3)井戸跡

井戸跡は２基検出された。調査Ａ区で検出されたＮ10井戸１号の井筒は板井、調査Ｂ区で検出されたｖ６井戸１号の井筒は石井であり、両者の様相は異なる。特にもＮ10井戸１号は井筒が出土していることから、簡単に類例等を交えてまとめとする。

①Ｎ10井戸１号

Ｎ10井戸１号は板井で、円筒形の井筒であることはすでに述べた。埋土から時期を特定できる遺物が出土しなかったため、時期は不明であるものの、十和田ａ降下火山灰（AD.915頃）が埋土上位にレンズ上に堆積していたことから古代まで遡る可能性がある。井筒は、検出面からおよそ２m30cm程下位に設置しており、上縁の凹凸は激しい。おそらく腐食で上部が消失したものと思われる。検出面は略正円で、直径はおよそ３m程を測るが、井筒設置面の掘り方は隅丸方形で１辺がおよそ125cm程を測る。しかし板材を四角く巡って設置しているようには確認できなかった。井筒は一木の刳り抜き式であるが、検出時には１カ所が縦に割れていた。制作時に割れたものか、後に割れたものかは不明である。また井筒に１カ所径10cm程の円形の穴が開いているが、人為的なものかどうかは判断できなかった。

刳抜井筒は、断続しながら長く後世に伝えられているため創掘年代の推定が難しく、遺物や遺構との関連が時期特定の重要な鍵となる。本遺跡においてはその双方とも関連がないため時期特定をすることは困難である。ここでは、刳抜井筒の類例をあげて推測する。刳抜井筒は、円材の内側を刳り抜きにして円筒形を造りこれを井筒に用いたものをいう。岩手県における類例を筆者は探すことができなかったため（あるいはない？）、全国的な類例をあげてみる。全国的な例としては、奈良県橿原遺跡出土の第２号・第６号・第３号（下段）および福岡県西金梨遺跡出土の井筒が著名である。これについては、『井戸の研究』（山本博　ｓ45　綜

芸舎)、『日本上代井の研究』(日色四郎　s42　日色四郎先生遺稿出版会)に詳しい。前出の『井戸の研究』によると、次の発見例が確認されている。

発　見　例	口　　径	高さ(深さ)	時　　期
奈良県唐古遺跡	2.7尺(82cm)	5尺(1.51m)	弥生
和歌山県井辺遺跡	52cm	80cm	(弥生～)古墳初期
奈良県橿原遺跡第2号	1.0m余	50cm	古墳
淡路島瑞井遺跡	6尺(1.82m)	7尺(2.12cm)	～古墳前期・中期
奈良県橿原遺跡第6号	90cm	1.30m	古墳時代末期・飛鳥時代初頃
福岡県西金栗遺跡	長径1.5m、短径90cm	2.3m以上	奈良後期
奈良県橿原遺跡第3号	45cm	60cm	奈良前期

(山本博　s45　『井戸の研究』綜芸舎)

このうち、福岡県西金栗遺跡出土の井筒は、巨木を縦に2つ割りにし、内部を刳り抜いて再び抱き合わせた井筒である。また奈良県橿原遺跡第3号井筒は累積井筒であり、下段が刳抜井筒である。

これと、本遺跡で出土したN10井戸跡の井筒の規模を比較する。

発　見　例	口　　径	高さ(深さ)	時　　期
諏訪前	65cm	82cm	

諏訪前遺跡出土のN10井戸1号井筒は、口径からみてやや小形である。高さは、使用されなくなってから現在までの間に腐食して消失した可能性がある。

一般に井筒の下底には普通卵大の栗石則ち礫を砂で堅く固める栗石層が敷かれることが多い。これは井戸の下底から湧出する水の浄化を図ったもので、現在でも各地の井戸に盛んに用いられている方法である。上述した例においても、橿原第6号井戸、第3号井戸で確認されている。(唐古遺跡出土井筒底部には、弥生土器片・獣骨・桃核・木の葉等が、橿原第2号井戸は、礫の代わりに弥生式土器の破片が砂で固められていた。他は不明)N10井戸1号底部には、径10cm程の礫が1個底面に置かれていた。埋土中から数個の礫が出土していたが、敷き詰められていた程の数は出土していない。1個・あるいは数個だけでは栗石層のように水を浄化するとは考えにくく、あるいは水を浄化するためではなく、風習的に置かれたものかもしれない。

井戸の埋没については、『日本上代井の研究』(日色四郎　s42　日色四郎先生遺稿出版会)が詳しい。井戸は不要となった場合、必ずしも危険であるから直ちに埋められたわけではない。奈良県の民間信仰では、一般に井戸は不要になっても埋めないで自然消滅を待つべきものであるとされている。250年以上前に記された「和漢三才図会」(寺島良安)においても同様の記述がある。発掘調査成果(橿原遺跡)によっても、短期間に人為的に埋められたものと、長期に亘って自然堆積したものとに分かれている。N10井戸1号埋土においては、断定はできないが自然堆積的な様相を示している。

以上のように、刳抜井筒は古くは弥生時代から造られていたものであり、N10井戸1号の井筒も形状的には古代まで遡ってもおかしくはない。埋土に十和田a降下火山灰を含むこともその可能性を示唆する。しかし、本遺跡のすぐ東側にはJR東北本線がはしっており、本遺跡南部に位置する晴山遺跡(二戸市教育委員会調査区)には、鉄道建設の際に十和田a降下火山灰層を掘削し、周辺に積み上げた層が残っている。それが流入したものとの可能性も全くは否定できない。いずれにしても井戸は人為的なものであるため、付近には該期の集落があったはずである。今後周辺の区域が発掘調査されて遺跡の全容が明らかになったときに、この井戸の性格も明らかになると思われる。

②Ｖ６井戸１号

石井の井筒である。作業時の危険防止のため石組みは外していない。井筒には多くの石が投げ入れられており、埋土はほとんどないことから、比較的新しい時期に廃棄されたものである可能性が高い。

(4)土坑・墓壙

土坑20基・墓壙５基が検出された。いずれも調査Ｂ区北部での検出である。

墓壙は人骨とともに寛永通寶が出土している例が多いことから近代と捉えられる。Ｆ６墓壙からは、人骨・寛永通寶の他に円筒上層ｄ式の深鉢が出土している。胴部下半が細かい破片であったためか完全には接合しなかったが、あるいは副葬時には完形物に近いものであり、故人の貴重な所有物であったと思われる。

土坑は20基検出されているが、墓壙と位置が近いＧ９土坑１号、Ｄ５土坑群、Ｄ６土坑群、またその形状からＤ７土坑１号は近世墓壙の可能性が高い。墓壙の埋土は、黒褐色土中に褐色土ブロック（Ⅲ層相当？）が混じる傾向があり、それらの特徴もおおむね共通する。その他の土坑については、時期・用途は不明である。

(5)溝跡

１条検出された。埋土からは縄文時代後期の土器片が出土しているが、遺構との関連は不明である。埋土は黒色土で、埋土の様相はむしろＭ６竪穴建物跡１号に似ている。本溝跡は、Ｍ６竪穴建物跡１号の南端から約1.6ｍに位置しており、付近は沢が広範囲に流れ影響を与えていることから、この竪穴建物跡の排水路として使用された可能性もある。

(6)焼土遺構

１基検出された。現地性のものと思われるが、付近の土層断面からは竪穴住居跡に伴うものとは確認できなかった。

(7)柱穴状小土坑

柱穴は199基検出されているが、時期・性格等不明なものが多い。

(8)１号水路

遺構ではないが、調査Ａ区を縦断する水路についてここで述べる。第Ⅲ章で述べたが、本遺跡の表土は「株式会社シン技術コンサル」が掘削し、遺構検出面であるⅢ層相当から本調査を始めた。その際に露呈していたのが１号水路である。この水路からは多量の縄文土器が出土しており（約22kg)、特に埋土下位～床面からの出土が多い。この水路から出土した土器は、摩耗しているものが少なく、上流から長い距離流されてきたような様相にはみえない。この水路はＭ６竪穴建物跡１号からＰ16グリッド方向まで流れる本流と、Ｍ６竪穴建物跡１号付近で北方と南方に分かれる支流、また西側でも検出されている支流とに分かれる。断面からは、耕作土であるⅡ層よりは古く、Ⅲ層を流れていたものと捉えられる。支流は洪水的なものによってできあがった可能性もある。本水路はＭ６竪穴住居跡１号、Ｎ10井戸跡、Ｏ13土坑１号より古い。

2．遺物

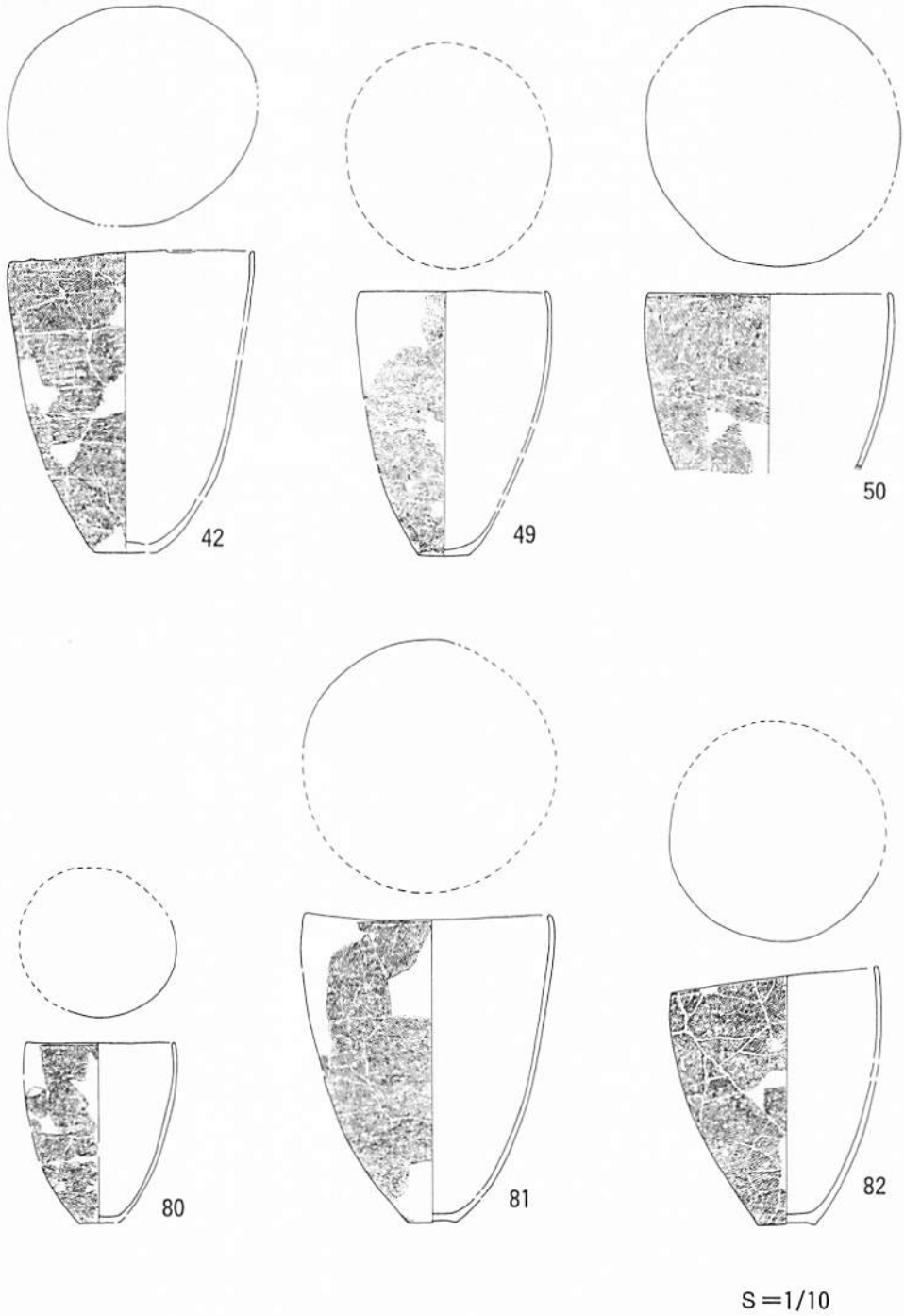
今回の調査で出土した遺物は、遺構内外合わせ土器類約９箱分、土製品３点、石器23点、石製品４点、陶磁器11点、古銭18点である。土器は縄文土器がほとんどで、弥生土器が１点出土している。遺物についてはⅤ章で述べているので、ここでは諏訪前遺跡出土土器の器形の特徴について、感じたことを述べてみたい。

諏訪前遺跡出土の縄文土器は早期～晩期まで広範囲に亘り、その大半を後期～晩期が占める。後晩期の粗製深鉢で、開口部径または器高が30cmを超えるもので器形のおおよそが判断できるものは５点出土している。また口唇部が接合したものが２点出土している。地文は、斜縄文５点、羽状縄文２点であるが、それらと口唇部形を比較すると、斜縄文土器の口唇部はほぼ正円を描くのに対して羽状縄文土器は楕円形を描き、バスケット（籠）的な器形である（第40図）。文化人類学的な領域になるが、羽状縄文は竹細工の籠の文様をモチーフしているような印象を受けた。比較点数が少ないことや時期的な要素が加わるため、地文と口唇部形だけの関連とは位置づけがたいが、今回の調査で出土した土器の傾向である。

参考文献

山本　博（1970）『井戸の研究』　綜芸舎

日色　四郎（1967）『日本上代井の研究』日色四郎先生遺稿出版会



第40図　諏訪前遺跡出土土器の口唇部形状

Ⅶ　分析・鑑定

諏訪前遺跡出土火山灰の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県二戸市に所在する諏訪前遺跡は、馬淵川中流部左岸の谷底低地内に立地する遺跡である。この遺跡では、検出された遺構の覆土中に火山灰とみられる土層が認められた。今回の分析調査では、これらの土層が火山噴出物（いわゆるテフラ）に由来するものであるかを検証し、テフラであれば指標テフラとの対比を行う（テフラ分析）。試料に火山ガラスが含まれている場合、より確実にテフラの対比を行うために、火山ガラスの屈折率を測定することとする。また、同試料の重鉱物組成と、火山ガラスの混入率（火山ガラス比）を明らかにすることにより、試料内のテフラ由来物質の混入の度合いを考える材料とする。

これらの結果から、検出された遺構の年代に関する資料を得ることとする。

1．試料

分析試料は、N10井戸1号覆土より採取された火山灰サンプル1点である。井戸の覆土は、上位より1～16層に分層されており、4層は火山灰の純層、1～3層と5～10層は火山灰混土である。今回分析試料とする火山灰サンプルは4層であり、灰白色の細砂である。

2．分析方法

（1）テフラ分析

試料適量を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

（2）屈折率測定

テフラ分析用に洗い出された試料から細粒な砂分を採取し、この中に含まれる火山ガラスの屈折率を測定する。屈折率測定には、温度変化型屈折率測定装置“ＭＡＩＯＴ”（古澤，1995）を用いて、火山ガラス30片程度を目標として計測する。

（3）重鉱物分析

テフラ分析に用いた試料を、250メッシュの分析篩篩上にて水洗して粒径が1／16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1／4mm～1／8mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不

透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

（4）火山ガラス比

重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、テフラ分析と同様に、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の３つの型に分類する。

３．結果

（1）テフラ分析

試料には火山ガラスと軽石が含まれ、スコリアは認められない。火山ガラスは中量含まれ、無色透明の軽石型が最も多く、次いで無色透明のバブル型が多く認められる。軽石型の火山ガラスでは繊維束状のものが多く認められる。軽石は多量に含まれており、透明がかった白色を呈し、発泡がやや良好～やや不良であるものが認められる。

（2）屈折率測定

測定結果を第41図に示す。火山ガラスの屈折率は、1.5017－1.5084である。屈折率が1.506付近と1.508付近に若干多く認められ、明瞭なピークは認められず拡散して認められる。

（3）重鉱物分析

重鉱物は、斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物の３鉱物を主とする組成である。これらの重鉱物には、鉱物粒の周囲に火山ガラスが付着しているものが多く認められる。そのほか、わずかに角閃石も認められる。

（4）火山ガラス比

無色透明の軽石型火山ガラスが多量に含まれ、軽鉱物の約70％を占める。次いで無色透明のバブル型火山ガラスが多く、わずかに無色透明の中間型火山ガラスも含まれている。以上の（3）および（4）の結果を、第41図および表Ⅶ－１に示す。

４．テフラの対比

今回認められた軽石と火山ガラスは、その形態と火山ガラスの屈折率、遺跡の地理的位置、重鉱物組成、町田ほか（1981）および町田・新井（1992）等の記載から、十和田ａテフラ（To-a；町田ほか，1981）に由来すると考えられる。To－aはA.D.915年に十和田カルデラより噴出したとされ、給源から南方の東北地方一帯に広く分布している（町田・新井，1992）。同文献には、斑晶鉱物として斜方輝石・単斜輝石が挙げられている。To-aに含まれる火山ガラスの屈折率は、町田ほか（1981）では1.499－1.508、町田・新井（1992）では1.496－1.504と記載されている。

N10井戸１号火山灰サンプルに含まれる砂分では、軽石および火山ガラス以外の粒子が非常に少ない。火山ガラスの占める比率は約90％と非常に高い。重鉱物はTo-aの斑晶鉱物である斜方輝石・単斜輝石が多く含まれており、これらには周囲に火山ガラスが付着しているものが多く認められることから、To－aに由来する重鉱物が多く含まれていると考えられる。またTo-aの斑晶鉱物ではない角閃石は、含有量が非常に少

ない。これらのことからN10井戸の覆土4層は、To－aが降下堆積したものがそのまま保存されたものである可能性が高く、To-aが噴出したA.D.915年に堆積したものと考えられる。したがって、To－aが噴出したA.D.915年にこの井戸の埋積が進んでおり、地表面ではその痕跡が窪地状を呈していたと考えられる。

※N10井戸1号出土火山灰のテフラ・重鉱物の拡大図は写真図版26に付す。

表Ⅶ－1

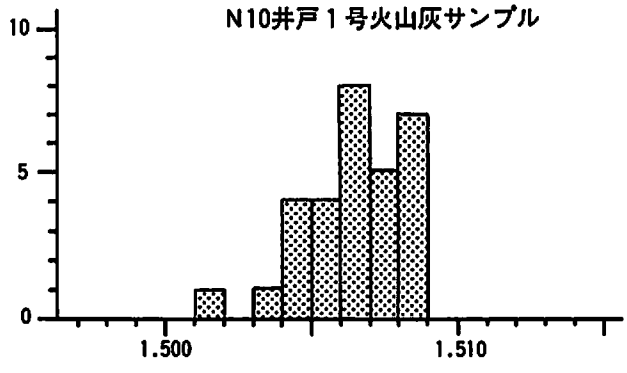
試料名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
N10井戸 火山灰サンプル	112	73	4	55	6	250	44	3	175	28	250

引用文献

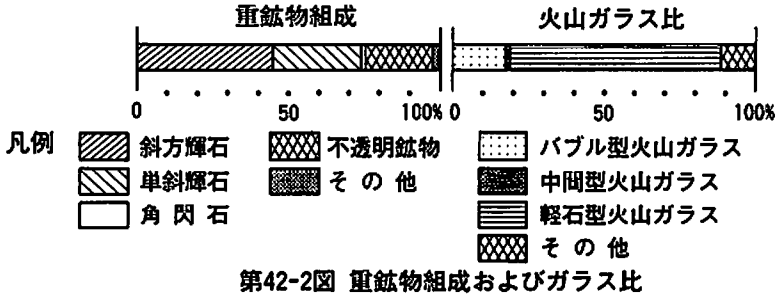
古澤　明　(1995) 火山ガラスの屈折率測定及び形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101,p.123－p.133

町田　洋・新井房夫 (1992)「火山灰アトラス」. 276p. ,東京大学出版

町田　洋・新井房夫・森脇　広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ. 51, p.562－p.569



第42-1図 N10井戸1号の火山ガラスの屈折率
横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表わす



第42-2図 重鉱物組成およびガラス比

第41図　火山ガラスの屈折率・重鉱物組成およびガラス比

諏訪前遺跡から出土した井戸枠材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

諏訪前遺跡では、古代（平安時代）まで遡る可能性がある井戸跡が検出されている。開口部径はおよそ３ｍで、検出面より2.5ｍ程下位に井筒が出土している。井筒は一木の刳り抜き式で、周囲に板材を置き補強していた。本報告では、これらの井筒および井戸枠材について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

１．試料

試料は、井筒などの井戸材10点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表Ⅶ－２に記した。

２．方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

３．結果

樹種同定結果を表Ⅶ－２に示す。井戸材は、いずれも落葉広葉樹で、３種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・カツラ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Qercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）ブナ科

環孔材で、孔圏部は１列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高。木口面で複合放射組織の一部が僅かに観察できる。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・カツラ（Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc） カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～30細胞高。

４．考察

試料は、井筒本体と、井筒の補強に使用された板材である。井筒本体はカツラ、他はコナラ節とクリであった。この結果から、井筒本体と補強材とで用材選択が異なっていたことが推定される。

古代の井筒については、新潟県曽根遺跡で樹種同定が行われた例があり、スギとクリが確認されている（川村，1983）。このうち、スギは井戸枠にも認められていることから、井筒と井戸枠には同じ種類が利用されていたことがうかがえる。スギとクリは、材質は異なるが、耐水性が比較的高い点では共通する。同様の用材選択は、各地で行われた井戸材の樹種同定結果（島地・伊東，1988；伊東，1990）でも見られ、井戸

材には耐水性を重視した用材選択が行われていたことが推定される。

今回の結果についても井筒周囲の補強材には、クリが多く利用されており、耐水性や強度に優れたクリを選択的に利用していたことが推定される。カツラは、材の保存性は高くないが、木理が通直で材質も均質なために加工が容易なこと、狂いが少ない等の特徴がある。また、樹幹が真っ直ぐになるものが多く、大径木も比較的得やすい。今回のように一木材で内部を刳貫いて井筒にする場合には、カツラ材は利用しやすい木といえる。これらのことが、カツラを選択した背景として考えられる。

表Ⅶ－2　樹種同定結果

試料名	樹　種
井筒（本体）	カツラ
周囲部分点取り木片2	クリ
周囲部分点取り木片8	クリ
周囲部分点取り木片22	クリ
外周木片5	クリ
外周木片7	コナラ属コナラ亜属コナラ節
外周木片11	コナラ属コナラ亜属コナラ節
外周木片19	クリ
外周木片22	クリ
外周木片24	クリ

引用文献

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料，　26，p.91－189，京都大学木材研究所．

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296Ｐ．，雄山閣．

川村恵洋（1983）曽根遺跡出土木材の識別．新大演報，　16，Ｐ.75－82，新潟大学．

第8表－1　土器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	残存部位	口唇部形態	文様・特徴	地文	内面調整	底部形態	分類	胎土	備考
1	y7土坑1号	埋土上位	深鉢	胴部		アルファベット文？（U字形状？）	RL（充填）	ケズリ		Ⅲ－4	石英	
2	G9墓壙1号	埋土下位	深鉢	口縁部			RL横位			Ⅲ－5	長石	
3	溝1号	埋土中	深鉢	胴部		帯縄文、磨消縄文	LR横位			Ⅳ－1	砂礫	
4	溝1号	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、丸み		LR横位	ミガキ		Ⅳ－1		
5	溝1号	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、内削ぎ	非結束羽状縄文	LR・RL	ミガキ		Ⅳ－3		外面摩耗
6	溝1号	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、角状		LR横位	ケズリ		Ⅳ－4		
7	P133	埋土中位	深鉢	胴部			LR縦位	ミガキ		Ⅴ－4		
8	P154	埋土下位	深鉢	胴部			LR			Ⅲ－3～4		
9	P154	埋土下位	深鉢	胴部			RL横位	ケズリ、ミガキ		Ⅴ－4	金雲母	
10	P129	埋土中位	深鉢	胴部		沈線、充填	RL	ケズリ		Ⅲ－4		赤みを帯びる。12と同一個体？
11	P129	埋土中位	深鉢？	胴部		沈線	LR	ミガキ		Ⅲ－4	砂礫	裏側赤みを帯びている
12	P129	埋土中位	深鉢	胴部		沈線、充填	RL	ケズリ		Ⅲ－4		赤みを帯びる。10と同一個体？
13	F6墓壙1号	埋土下位	深鉢	口縁～胴部上半	波状（4単位）、刻み、縄（刺突）	粘土紐貼り付けによる胸骨文、突起下部に縦位粘土紐貼り付け・ボタン状の貼り付け装飾	LR横位	ナデ		Ⅲ－2		
14	F6墓壙1号	埋土下位	深鉢	胴部			LR横位			Ⅲ－2		
15	z11トレンチ	Ⅴ	深鉢	口縁部	平縁、丸み、縄文	表裏縄文	LR横位	LR横位		Ⅰ	砂礫・長石？	16・17と同一個体？
16	z11トレンチ	Ⅴ	深鉢	胴部			LR横位			Ⅰ	砂礫・長石？	15・17と同一個体？
17	z11トレンチ	Ⅴ	深鉢	胴部		表裏縄文	LR横位	LR横位		Ⅰ	砂礫・長石？	16・17と同一個体？
18	O10	Ⅳ	深鉢	胴部		異条斜行縄文	LR横位			Ⅱ－1	繊維多量	
19	R11	Ⅱ下	深鉢	胴部		多軸絡条体	LR			Ⅱ－2	繊維中量・砂礫	
20	P11	Ⅳ	深鉢	口縁部	平縁、角状、肥厚、刺突	口縁部圧痕文（絡条体）・刺突列、頸部結節回転、胴部縦位木目状撚糸文・結節回転				Ⅱ－2	繊維微量	
21	1号水路M10	埋土中	深鉢	胴部		縦位木目状撚糸文				Ⅱ－2	繊維微量・粗礫・長石	
22	N8	Ⅴ下	深鉢	胴部			LR横位			Ⅱ－3	粗礫	
23	O12	Ⅳ	深鉢	口縁部	波状、やや内削ぎ	粘土紐張り付けによる幾何学状モチーフ、張り付け上刺突	RL横位	ケズリ		Ⅲ－1	砂粒微量	
24	E9	Ⅲ上	深鉢	口縁部	平縁、角状	横位隆沈線、縄文	？	ナデ		Ⅲ－1		表面剥落
25	O10・P10	Ⅳ	深鉢	口縁部	平縁、下羽状	逆三角形区画内刺突、楕円形？区画内縄文	RLR	ナデ		Ⅲ－2	石英	
26	x6	Ⅲ下	深鉢	口縁部	波状、角状	沈線による弧状のモチーフ	RL	ミガキ		Ⅲ－3	赤色を帯びた胎土・石英	
27	O10・P9	Ⅳ	深鉢	胴部		アルファベット文？	RLR縦位（充填）			Ⅲ－3	石英	
28	C4	Ⅲ	深鉢	胴部			RL縦			Ⅲ－4		
29	w8	Ⅳ中	深鉢	1/2完形（底部欠損）	平縁、角状		LR縦	ケズリ・ナデ		Ⅲ－4	金雲母多量	
30	E8・G8	Ⅲ上	深鉢	口縁部	平縁、丸み		LR縦位			Ⅲ－4		
31	y5	Ⅲ	深鉢	1/2完形（底部欠損）	平縁、角状		LR縦	ケズリ		Ⅲ－4		外面煤付着・内面赤色強い・口唇部楕円形状
32	F9	Ⅲ	深鉢	頸～底部			LR	ケズリ、ミガキ	平底・ミガキ	Ⅲ－4		
33	O10・P10	Ⅱ下	深鉢	口縁～胴部上半	波状、角状	沈線、円文	RL？			Ⅳ－1		

第8表－2　土器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	残存部位	口唇部形態	文様・特徴	地文	内面調整	底部形態	分類	胎土	備考
34	R11	Ⅱ下	深鉢	口縁部	平縁、角状、折り返し口縁		LR縦位・横位	ナデ		Ⅳ－1		
35	O10	Ⅱ下	壺	胴部		沈線、充填縄文？	RL			Ⅳ－1	長石	内面黒色処理
36	A区	表土一括	深鉢	底部			LR横位		平底、胴代痕	Ⅳ－1	砂礫	
37	w9	Ⅲ上～中	深鉢	口縁部	波状、角状、刺突	沈線による円状文、刺突、平行沈線	LR	ミガキ		Ⅳ－1？		38と同一個体？
38	w9	Ⅲ上～中	深鉢	口縁部	波状、角状	平行沈線	LR	ミガキ		Ⅳ－1？		37と同一個体？
39	H13	Ⅲ	注口土器？	胴部		非結束羽状縄文（異方向縄文）	LR	荒いケズリ		Ⅳ－2		
40	A区	表土一括	深鉢	口縁部	平縁、角状	非結束羽状縄文	RL・LR	ケズリ		Ⅳ－3		
41	1号水路L5・M10・L12	埋土中・Ⅲ上	深鉢	口縁部	平縁、角状	非結束羽状縄文	RL・LR	ケズリ		Ⅳ－3		
42	H13	Ⅲ	深鉢	ほぼ完形	平縁、角状、突起	非結束羽状縄文	RL・LR	ケズリ	平底	Ⅳ－3		突起は1つだけ認められる
43	1号水路L8	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、丸み	縦位非結束羽状縄文	RL・LR			Ⅳ－3		
44	1号水路M11	埋土中	壺？	胴部		沈線による弧状のモチーフ	LR			Ⅳ－4	砂礫	
45	A区	表土一括	台付鉢	脚部		沈線	LR縦位			Ⅳ－4	砂礫	
46	Q12	Ⅱ	深鉢	胴部		沈線・刻み				Ⅳ－4		
47	A区	表土一括	深鉢	口縁部	平縁、突起	横位沈線、沈線間に刻み	LR横位			Ⅳ－4		
48	I13	Ⅲ	深鉢	完形	平縁、突起（大小の突起が交互に配される・突起）	横位平行沈線・刻み・三叉状入組文	LR	ケズリ・ミガキ	平底	Ⅳ－4		
49	H13・G6	Ⅲ上位	深鉢	2/3完形	平縁、角状	非結束羽状縄文	RL・LR		平底	Ⅳ－4	金雲母、長石	
50	A区・H4撹乱	表土一括・撹乱土	深鉢	口縁～胴部上半	平縁、角状		RL横	ミガキ		Ⅳ－5		
51	L10	Ⅲ	深鉢	1/3完形			LR		やや上げ底	Ⅳ－5？		内面黒色処理、外面摩耗
52	H13	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部上半	平縁、角状		RL横	ケズリ		Ⅳ－5	砂礫少量	
53	1号水路L7	埋土下位	深鉢	底部			LR横		やや上げ底	Ⅳ－5？		
54	A区・1号水路M10・M11・L7	表土一括・水路埋土中	深鉢	底部			LR横	ミガキ	やや上げ底	Ⅳ－5		外面黒斑
55	H8	Ⅲ上	深鉢？	底部			RL縦	ケズリ・ミガキ	平底	Ⅳ－5		
56	M11	Ⅲ	深鉢	ほぼ完形	平縁、丸み		RLR横	ケズリ	平底	Ⅳ－5		外面煤？付着
57	1号水路L8	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、角状		LR横			Ⅳ－5	砂礫微量	補修孔有り
58	1号水路M12	埋土中	壺？	底部			LR		上げ底状	Ⅳ－5	砂礫	
59	A区	表土一括	深鉢	口縁部	平縁、角状、突起		LR横位			Ⅳ－5		
60	H4撹乱・H13	Ⅲ・撹乱	深鉢	胴～底部			RL横	ミガキ	平底・ミガキ	Ⅳ－5		内面黒色処理
61	1号水路L8	埋土中	台付鉢	脚部		平行沈線・刺突				Ⅴ－1	砂礫	
62	1号水路M12	埋土中	深鉢	口縁部	波状？、丸み	入組三叉文	LR横位			Ⅴ－1		
63	P15	Ⅲ	鉢	口縁部	小波状、刺突	入組三叉文				Ⅴ－1	金雲母	
64	P15	Ⅲ	鉢	口縁～胴部上半	平縁、B突起、刺突	羊角縄文	LR横位	ケズリ		Ⅴ－1	砂礫	外面煤付着
65	A区	表土一括	鉢	口縁部	平縁、突起		LR横位		ナデ	Ⅴ－2		
66	A区	表土一括	深鉢	口縁部	平縁、角状、B突起	平行沈線（3条）	LR	ナデ、ミガキ		Ⅴ－2？		
67	A区	表土一括	台付鉢	脚部		横位平行沈線、工字文		ミガキ		Ⅴ－3		
68	A区	表土一括	高坏？	口縁部	平縁、短沈線	口縁裏側溝状沈線、平行沈線	LR横位			Ⅴ－3		
69	M14	Ⅲ下	壺	口縁部	波状、刻み	沈線	LR	ケズリ		Ⅴ－3		

第8表ー3　土器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	残存部位	口唇部形態	文様・特徴	地文	内面調整	底部形態	分類	胎土	備考
70	A区	表土一括	鉢	口縁部	小波状、指頭圧痕		LR横位			V－4		
71	1号水路L6・L7	埋土中	深鉢	口縁部	波状、丸み		LR横位	ミガキ		V－4	砂礫	摩耗
72	1号水路K7・K8	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、丸み		LR横位	ミガキ		V－4		
73	1号水路L7	埋土中	鉢・浅鉢	口縁部			LR（無節）	ケズリ		V－4		
74	1号水路L7	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、丸み		LR横位			V－4		内面煤付着
75	H13	Ⅲ	深鉢	胴部下半～底部			LR横位	ケズリ	平底	V－4		上面は切断したようにも見える
76	L10	Ⅲ	深鉢	底部			LR		上げ底状	V－4		
77	w6	Ⅲ下	深鉢	底部		沈線（縦位・曲線２本１対）	LR縦		平底、ミガキ	V－4		内面剥落
78	N11	Ⅲ	鉢	胴部下半～底部			LR	ケズリ・ミガキ	上げ底	V－4		
79	L10	Ⅲ	深鉢	胴部下半～底部			LR横	ケズリ	上げ底状	V－4	砂礫	
80	A区・I13	表土一括・Ⅲ	深鉢	2/3完形	平縁、角状		LR	ケズリ	平底	V－4		
81	K10・K11	Ⅲ	深鉢	2/3完形	平縁、角状		LR横	ミガキ	平底	V－4		
82	H13	Ⅲ	深鉢	ほぼ完形	平縁、角状		LR	ミガキ、ナデ	やや上げ底状、ミガキ	Ⅳ－5		
83	w7	Ⅲ下	高坏	口縁部		平行沈線		沈線		Ⅵ		

第9表　土製品観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種名	部位	文様	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	分類	備考
84	1号水路M11	埋土中	土偶	頚部～足部(頭部・腕部欠損)	刺突文	(5.4)	(3.4)	(1.0)	Ⅳ－1	
85	A区	表土一括	壺？（ミニチュア）	底～胴部	無文				Ⅳ－5	外面赤色・黒色顔料塗布
86	A区	表土一括	台付鉢(ミニチュア)	脚部	横位平行沈線				V－3	
87	A区	表土一括	円盤状土製品		沈線？	5.8	6.0	2.0	Ⅱ－2	ボタン状装飾の剥離痕？
88	O10	Ⅲ	円盤状土製品	完形	沈線文・LR	4.6	4.6	0.6	Ⅳ－1	
89	R12	Ⅳ上	円盤状土製品	完形	無文	4.8	4.6	0.6	Ⅳ－5	

第10表ー1　石器・石製品観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考
90	M6竪穴建物跡1号	床面下部	石核	5.3	4.3	1.05	24.39	頁岩	北上山地	
91	M10土坑1号	埋土中	剥片	2.5	1.75	0.6	2.16	赤色頁岩		
92	P9土坑1号	2層	磨石	7.6	7.15	5	320	安山岩	奥羽山脈	
93	y7土坑1号	埋土上位	半円状扁平打製石器	4.5	5.7	1.7	53	安山岩	奥羽山脈	
94	1号水路M11	埋土中	石鏃	2.5	1.45	0.5	1.64	頁岩	北上山地	
95	A区	表土一括	石匙	4.4	5.7	1.2	25.18	頁岩	北上山地	
96	M12	Ⅲ層？	削掻器	2.6	3.35	0.7	6.31	頁岩	北上山地	
97	F10	Ⅲ層上位	削掻器	6.4	4.4	0.9	30.89	頁岩	北上山地	
98	z11	Ⅵ層	ユーティライズドフレーク	5.1	3.4	0.7	12.62	頁岩	北上山地	
99	z11	Ⅵ層	石核				78.33	頁岩	北上山地	
100	H8	Ⅲ層上位	打製石斧	16.4	7.3	3.8	582	石英安山岩	奥羽山脈	
101	A区	表土一括	磨製石斧	9.7	5.3	2.5	161	閃緑岩	北上山地	欠損品
102	Q12	Ⅳ層上位	敲石	15.8	9.4	5.9	1327	安山岩	奥羽山脈	
103	1号水路M8	埋土中	凹石	8.9	9	5.8	590	安山岩	奥羽山脈	
104	O14	Ⅲ層下位	凹石	13.7	10.3	5.7/6.0	1185	安山岩	奥羽山脈	

第10表－2　石器・石製品観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考
105	R12	Ⅱ層下位	敲磨器	8.4	6.7	4.5	317	安山岩	奥羽山脈	凹石・磨石
106	t7	Ⅲ層	敲磨器	11.8	7.6	3.75	445	安山岩	奥羽山脈	下部は敲いた後に擦っている
107	Q11	Ⅳ層下位	磨石	11.3	8.8	4.1	530	安山岩	奥羽山脈	
108	1号水路	埋土中	磨石	11	6.7	3	330	(中粒) 花崗閃緑岩	北上山地	
109	K11	Ⅱ層	磨石	11	5.9	3.6/2.9	302	(細粒) 花崗閃緑岩	北上山地	
110	U9	Ⅱ層下部	磨石	12.1	7.4	3.3/3.2	618	ホルンフェルス	北上山地	
111	C3	Ⅲ層	磨石	14.9	6.8	4.5	672	安山岩	奥羽山脈	
112	v6井戸1号	埋土上位	石臼	(27.9)		10.9	5500	安山岩	奥羽山脈	殻摺り臼の上臼
113	v6井戸1号	埋土上位	石臼	(26.4)		13.1	5500	安山岩	奥羽山脈	殻摺り臼の上臼
114	v6井戸1号	埋土上位	石臼	(29.0)		11.8	7500	石英安山岩	奥羽山脈	殻摺り臼の下臼
115	v6井戸1号	埋土上位	石臼	(28.0)		11.6	8500	安山岩	奥羽山脈	殻摺り臼の下臼

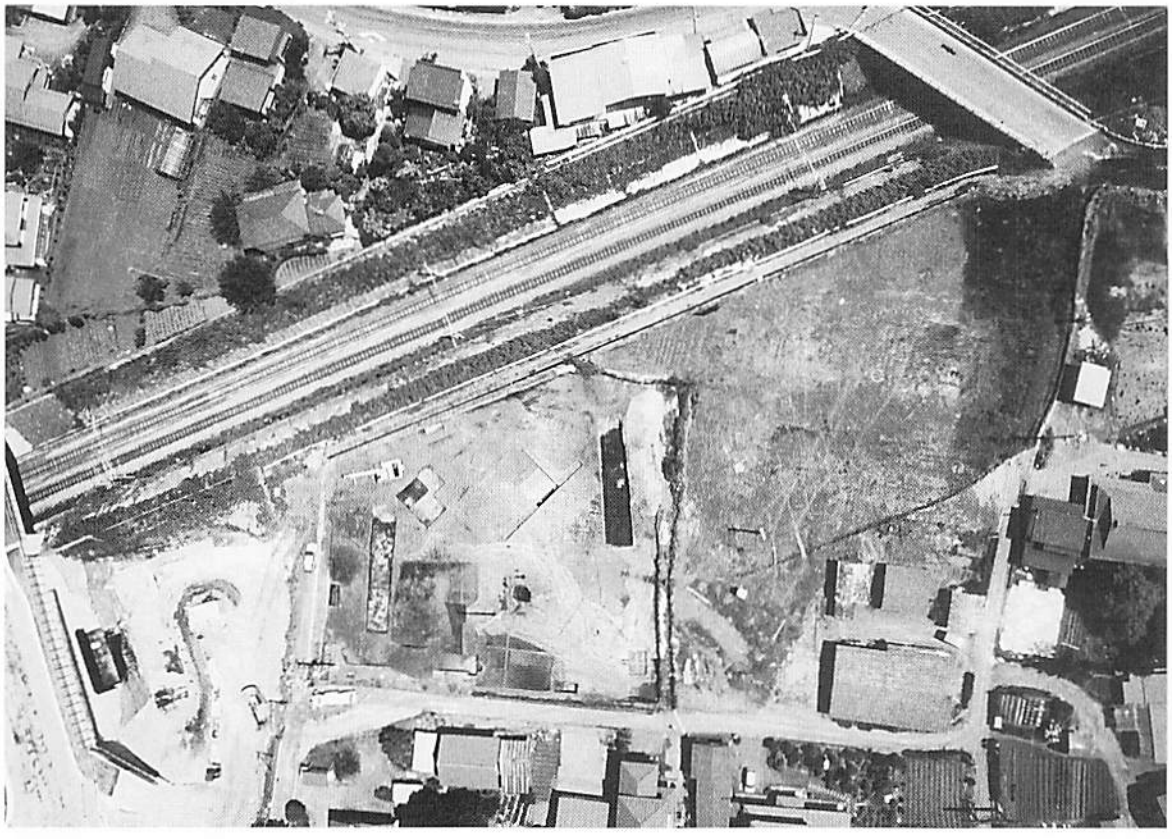
第11表　陶磁器類観察表

掲載番号	出土地点	層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調	釉薬・絵付	制作地	制作年代	備考
116	H6	Ⅲ上	磁器	碗		(4.6)	(2.7)	灰白色	染付	肥前	18～19c	圏線
117	H6	Ⅲ	磁器	碗			(2.6)	灰白色	染付	肥前系	18～19c	
118	H6	Ⅲ	陶器	小甕			(4.0)	オリーブ黄色		東北	19c	
119	H6	Ⅲ	磁器	瓶			(2.5)	灰白色	染付	肥前	18～19c	
120	X7	Ⅲ上	磁器	碗				灰白色	染付	肥前	18c	くらわんか碗
121	X7	Ⅲ	磁器	碗				灰白色	染付	肥前	18～19c	
122	P10	Ⅱ下	磁器	碗		3.7	(2.7)	灰白色	染付	肥前	18～19c	二重網目文
123	A区	表土一括	陶器	碗	(9.8)		(3.2)	茶色	鉄釉？	瀬戸美濃・久慈	18～19c	腰錆碗
124	A区	表土一括	磁器	碗	(12.0)		(4.3)	白色	染付	肥前	18～19c	菊花文

第12表　銭貨観察表

掲載番号	出土地点	層位	種類	材	初鋳年	直径(cm)	両目(g)	背面	時期	備考
139	F7	Ⅲ層	五銭			1.9	1.0			
140	A区	表土一括	半銭			2.2	2.9			
131	G9墓壙2号	埋土中	元豊通寶	銅	北宋，1078	2.3	1.8			行書
130	F7墓壙1号	埋土中	寛永通寶	銅	1636	2.4	2.5		1期(古寛永)	
133	P123	埋土上部	寛永通寶	銅	1668	2.5	3.2	文	2期(新寛永)	
132	P109	埋土中位	寛永通寶	銅	1668	2.5	2.4	文	2期(新寛永)	
125	E11墓壙1号	埋土中	寛永通寶	銅	1668	2.5	3.5	文	2期(新寛永)	
142	P199	埋土中	？	鉄	？	2.0	2.6			
138	A区	表土一括	寛永通寶	銅	1697	2.5	3.3		3期(新寛永)	
126	E11墓壙	埋土中	寛永通寶	銅	1636	2.3	3.1		1期(古寛永)	
135	M11(1号水路？)	Ⅱ下(埋土上位？)	至道元寶		北宋，995	2.5	2.5			草書
141	A区	表土一括	一銭			2.3	3.0			
127	E11墓壙	埋土中	寛永通寶	銅	1636	2.4	3.1		1期(古寛永)	
128	E11墓壙	埋土中	寛永通寶	銅	1697	2.5	3.5		3期(新寛永)	
136	E11	Ⅱ層下部	寛永通寶	銅	1636	2.3	2.0		1期(古寛永)	
134	P200	埋土中	寛永通寶	銅	1636		1.0		1期(古寛永)	
137	C7	Ⅲ層下部	寛永通寶	銅	1636	2.5	2.6		1期(古寛永)	
129	F6墓壙1号	埋土中	寛永通寶	銅	1697	2.3	1.7		3期(新寛永)	

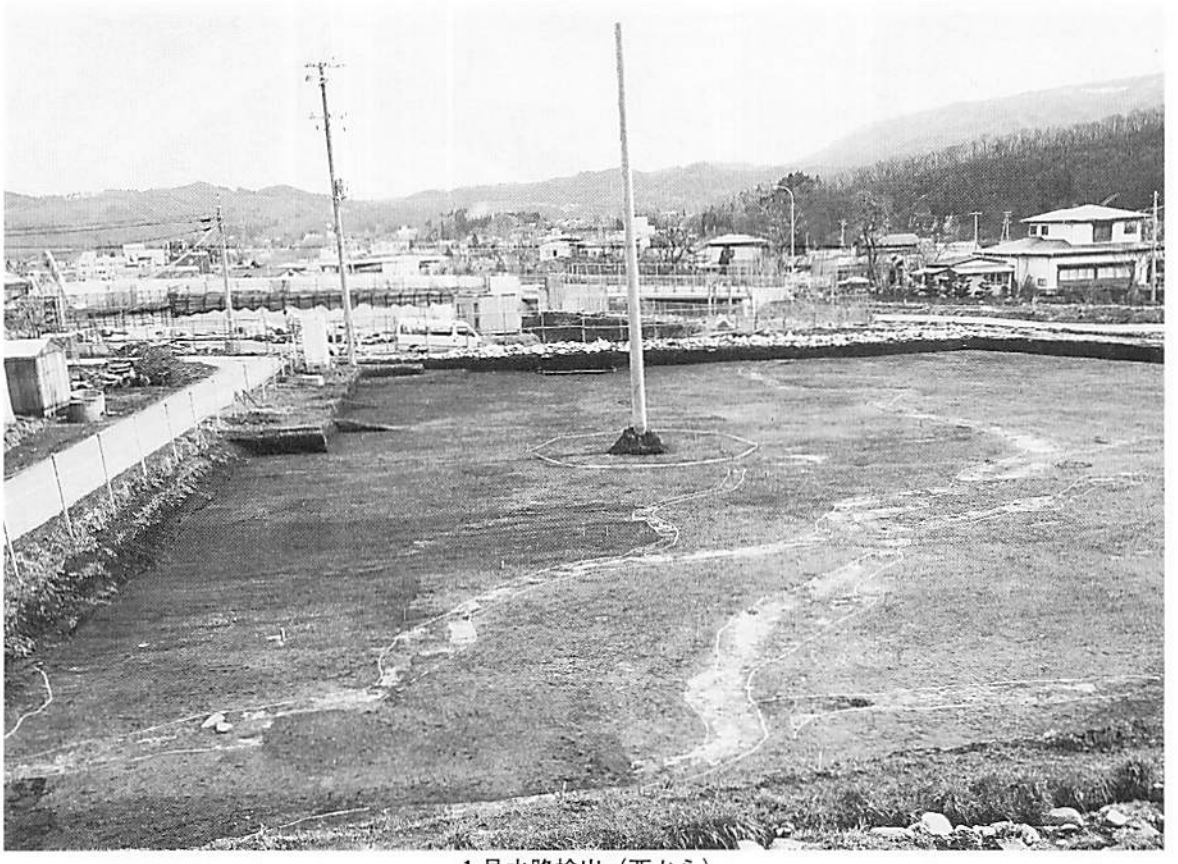
写 真 図 版



調査区全景

調査区全景

写真図版１　調査区全景



1号水路検出（西から）

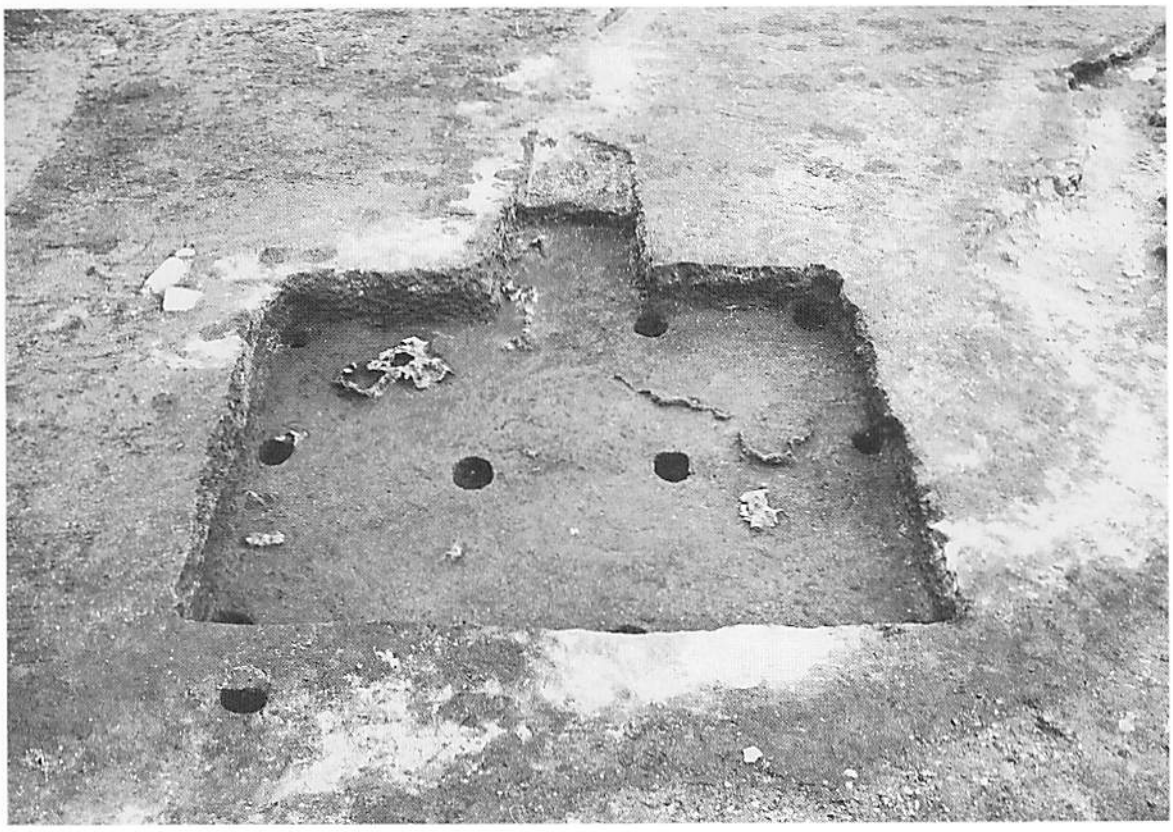
1号水路土器出土状況（西から）

土器出土状況

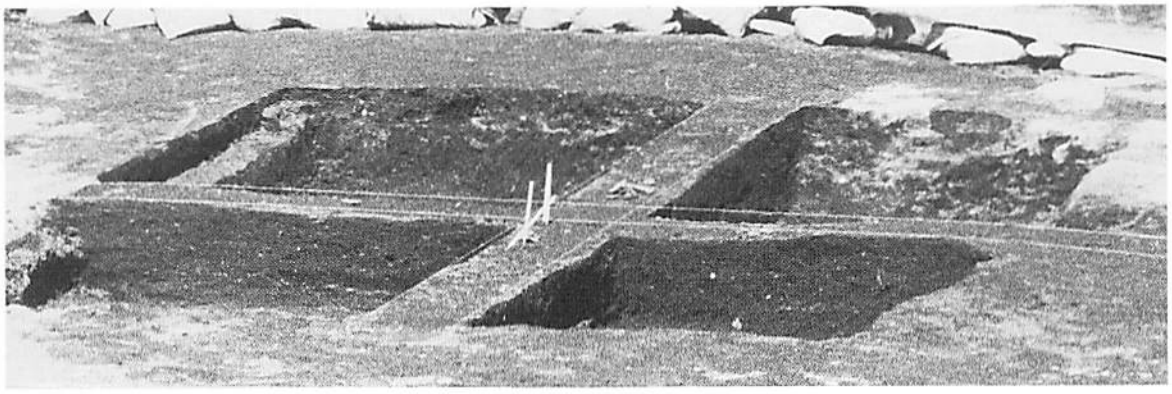
土器出土状況

土器出土状況

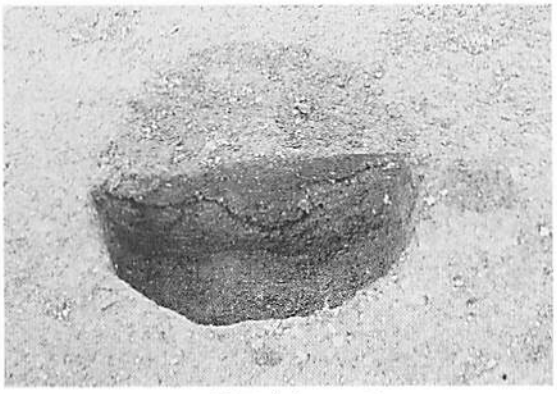
写真図版2　1号水路、土器出土状況



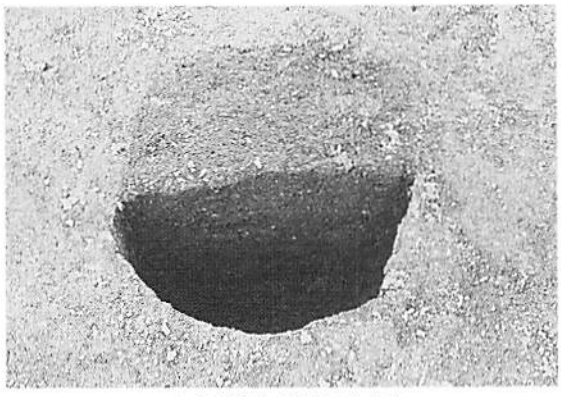
平面（南西から）



断面（東から）



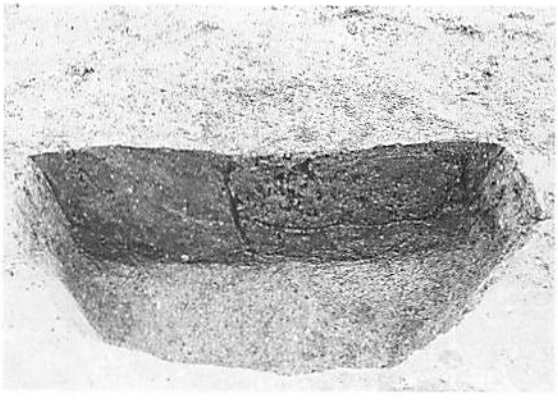
P 95断面（南西から）



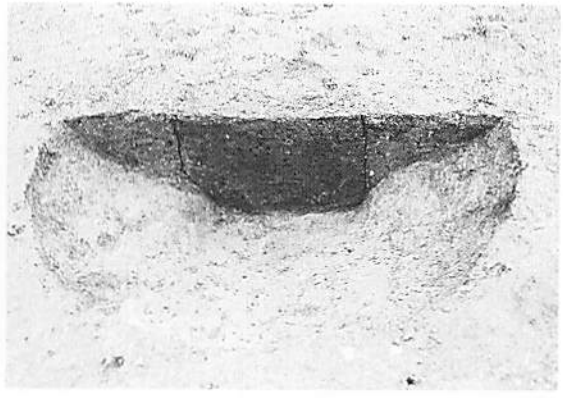
P 96断面（南西から）

写真図版 3　M 6 竪穴建物跡 1 号

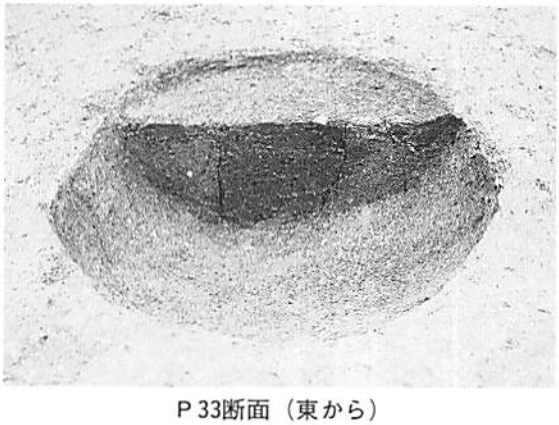
平面（北東から）



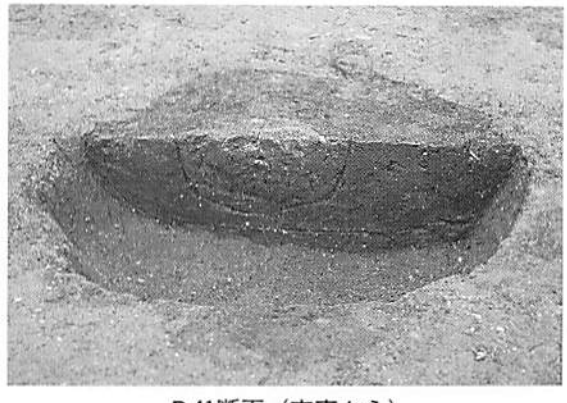
P 31断面（東から）



P 32断面（東から）



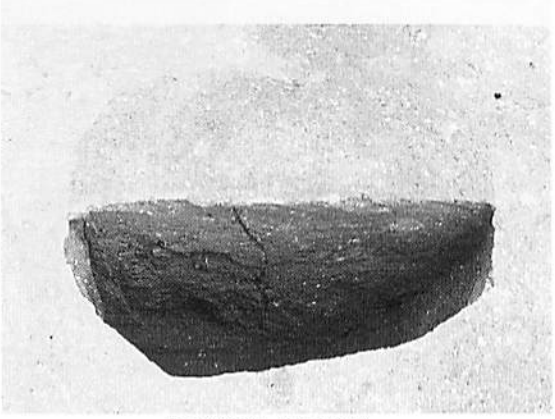
P 33断面（東から）



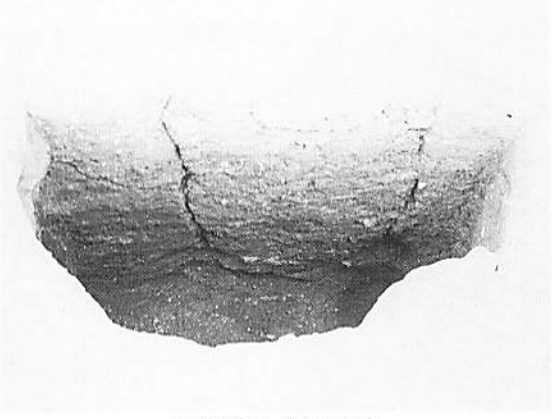
P 41断面（南東から）

写真図版 4　D 5 掘立柱建物跡 1 号

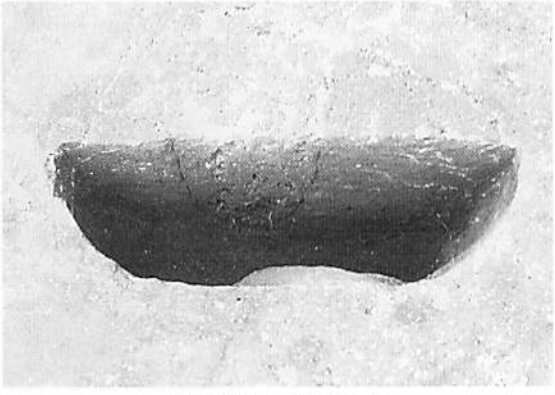
平面（北東から）



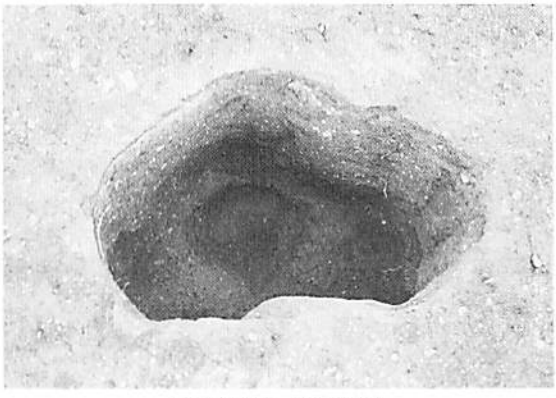
P 84断面（南から）



P 91断面（南から）

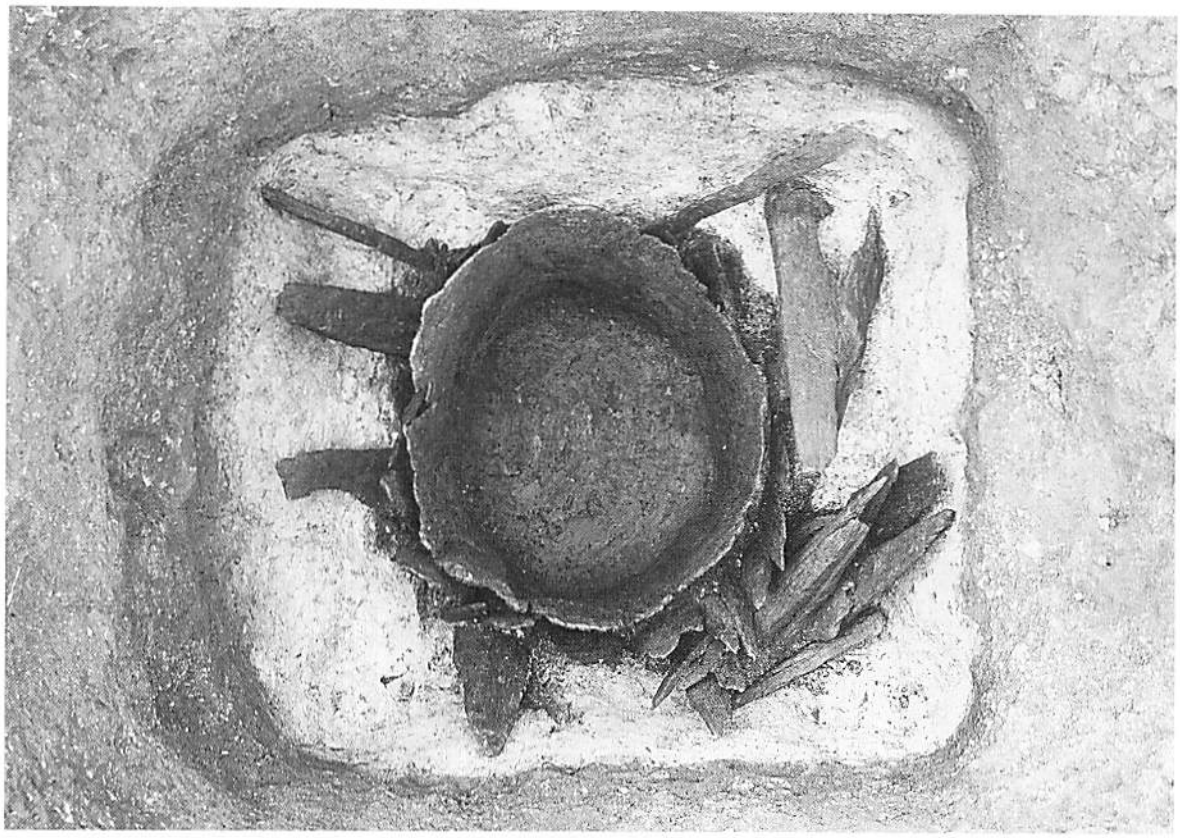


P 119断面（南から）

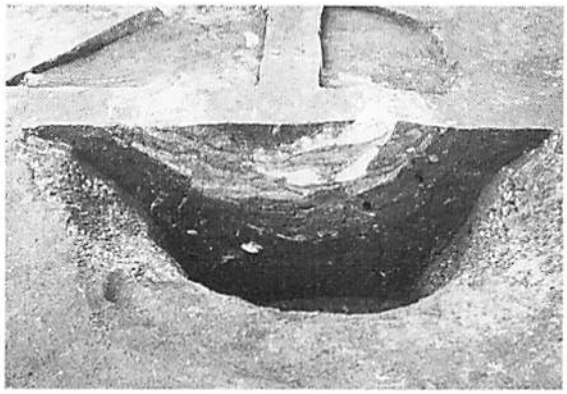


P 119完掘（南から）

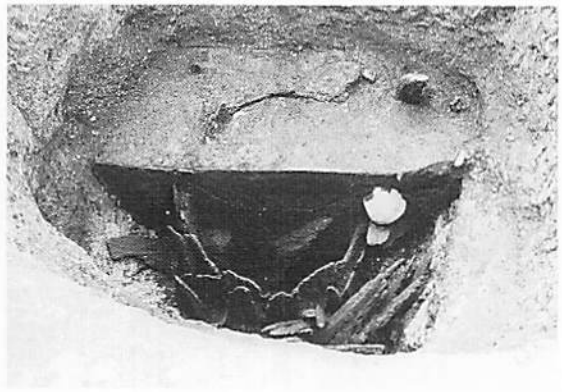
写真図版５　Ｂ９掘立柱建物跡１号



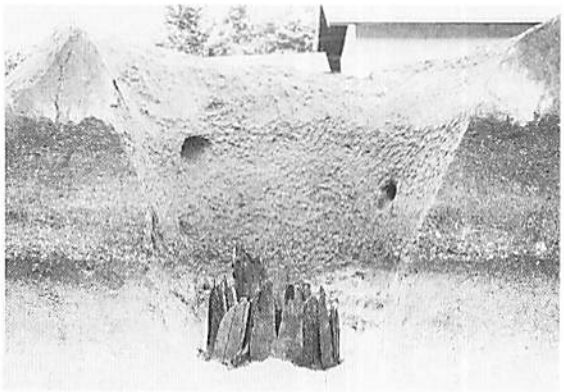
井筒出土状況



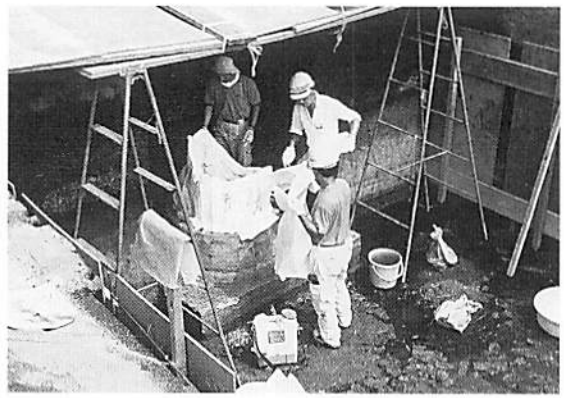
上位断面（東から）



下位断面（東から）



井戸跡断面（東から）

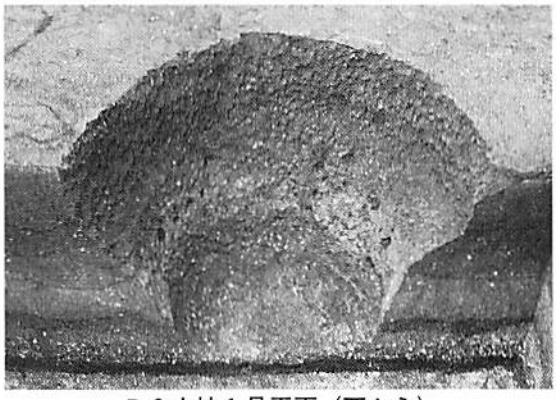


井筒取り上げ風景（南東から）

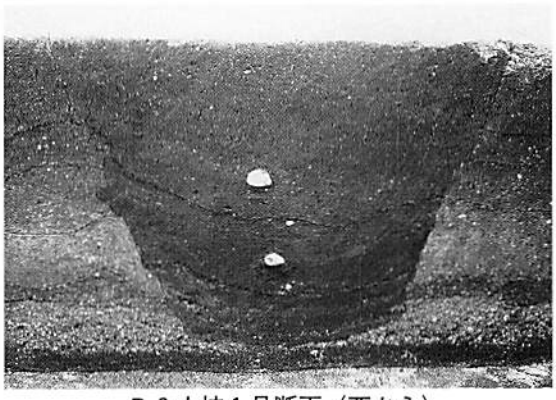
写真図版６　Ｎ10井戸１号

ｖ６井戸１号検出（西から）

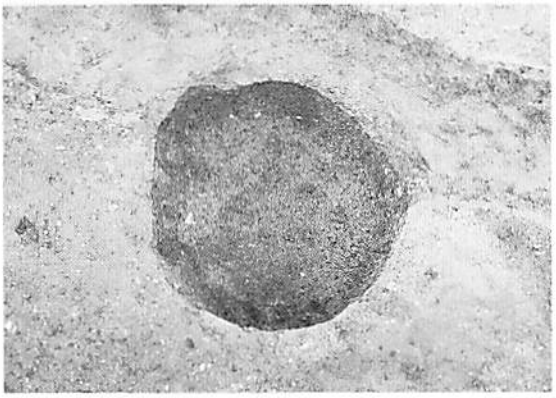
ｖ６井戸１号石組み（南から）



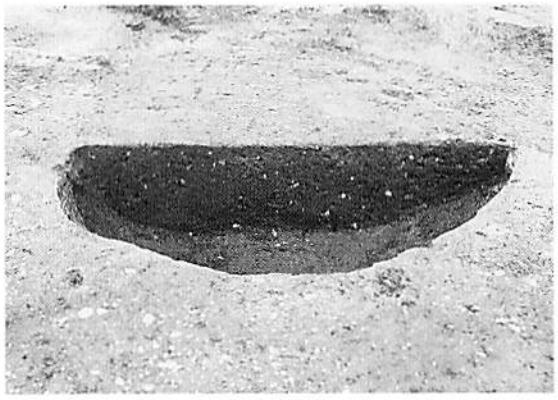
Ｐ９土坑１号平面（西から）



Ｐ９土坑１号断面（西から）

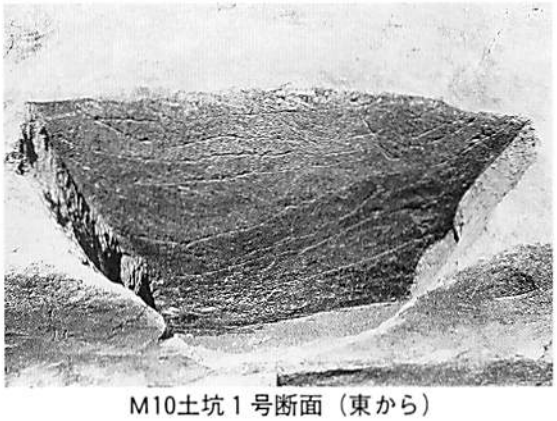


O13土坑１号平面（北東から）



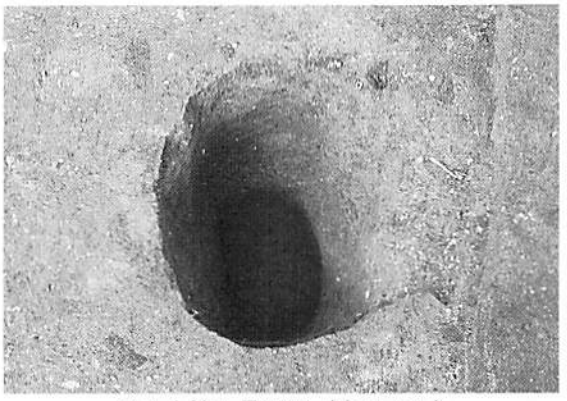
O13土坑１号断面（北東から）

M10土坑１号平面（東から）

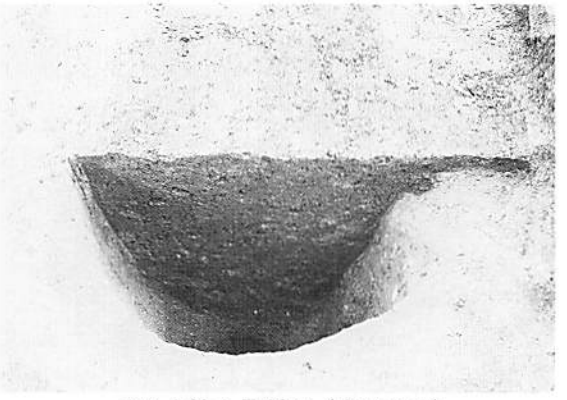


M10土坑１号断面（東から）

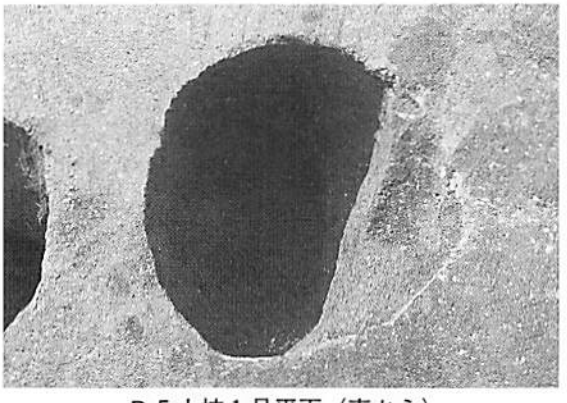
写真図版７　ｖ６井戸１号、Ｐ９土坑１号、O13土坑１号、M10土坑１号



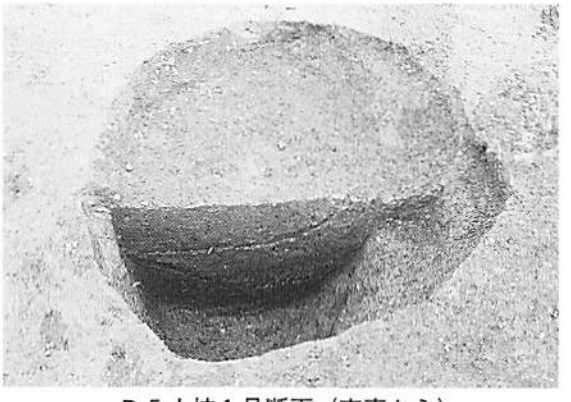
Ｇ９土坑１号平面（南西から）



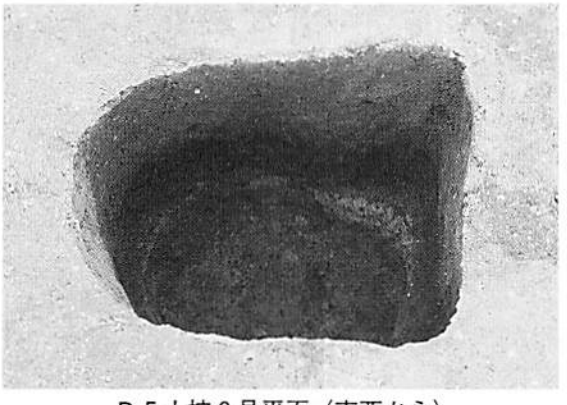
Ｇ９土坑１号断面（南西から）



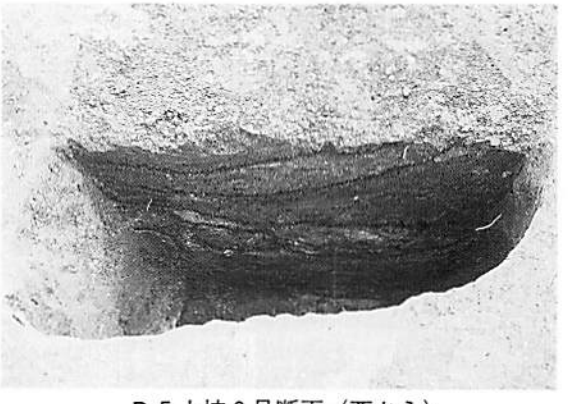
Ｄ５土坑１号平面（東から）



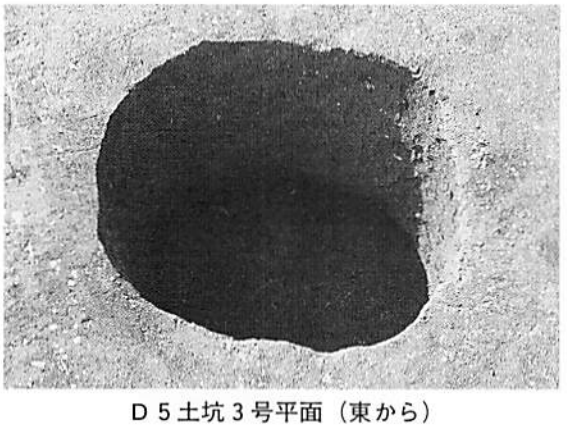
Ｄ５土坑１号断面（南東から）



Ｄ５土坑２号平面（南西から）



Ｄ５土坑２号断面（西から）

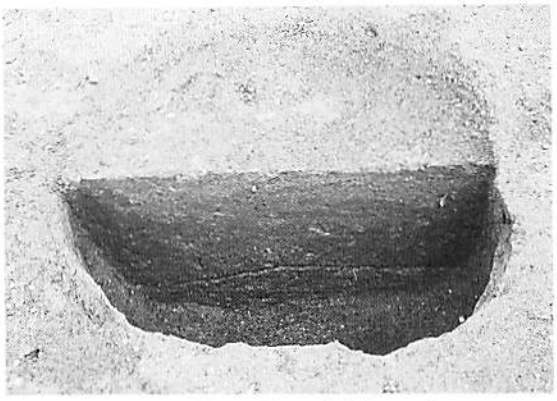


Ｄ５土坑３号平面（東から）

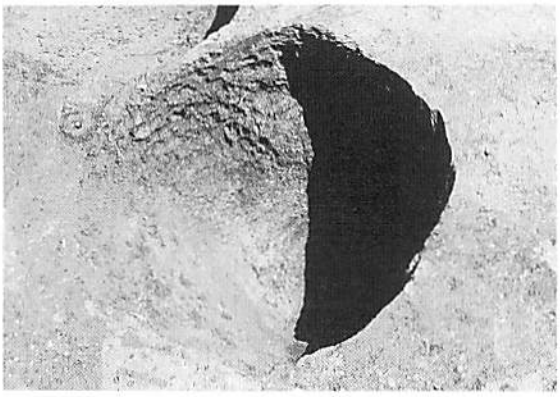
Ｄ５土坑３号断面（南東から）

写真図版８　Ｇ９土坑１号、Ｄ５土坑１号～３号

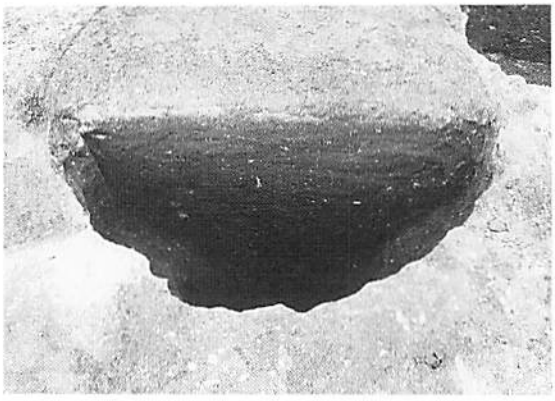
Ｄ５土坑４号平面（南西から）



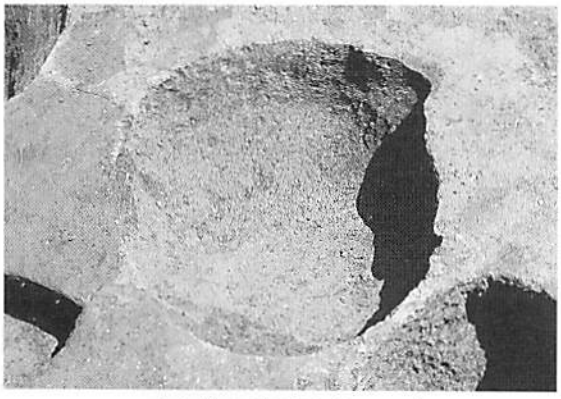
Ｄ５土坑４号断面（南東から）



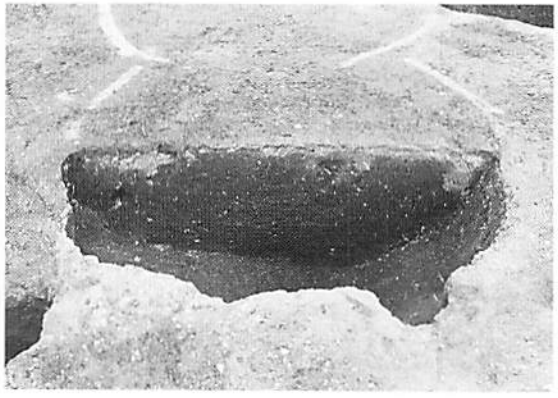
Ｄ６土坑１号平面（西から）



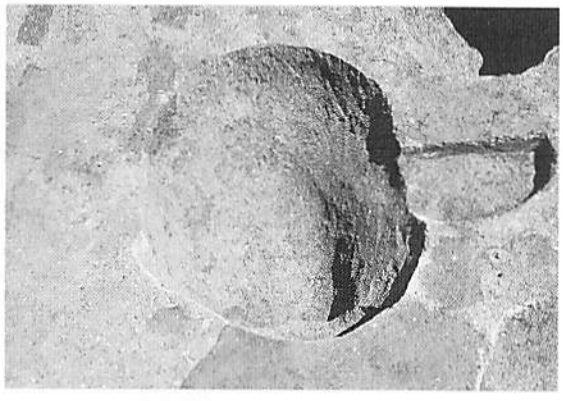
Ｄ６土坑１号断面（南西から）



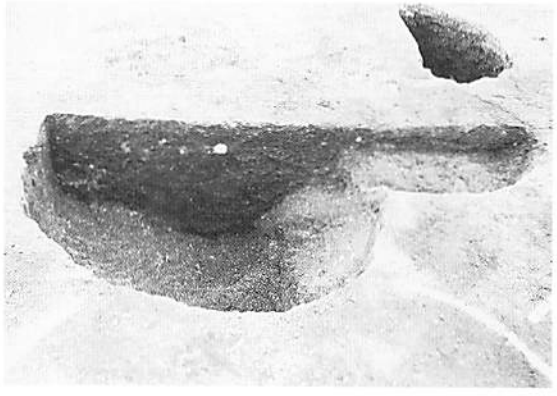
Ｄ６土坑２号平面（西から）



Ｄ６土坑２号断面（南西から）

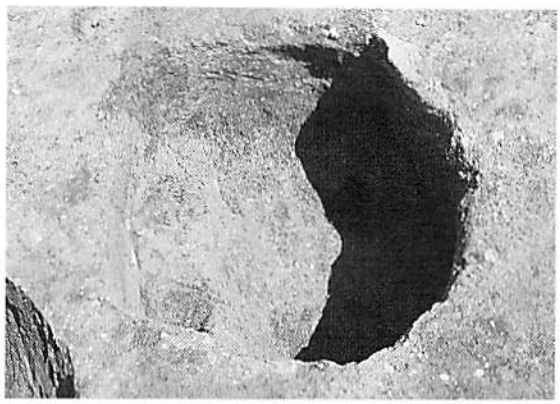


Ｄ６土坑３号平面（西から）

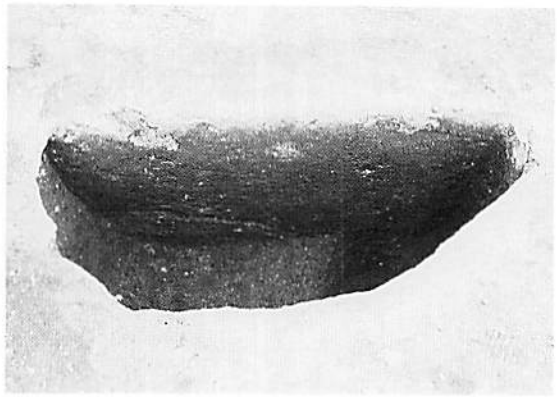


Ｄ６土坑３号断面（西から）

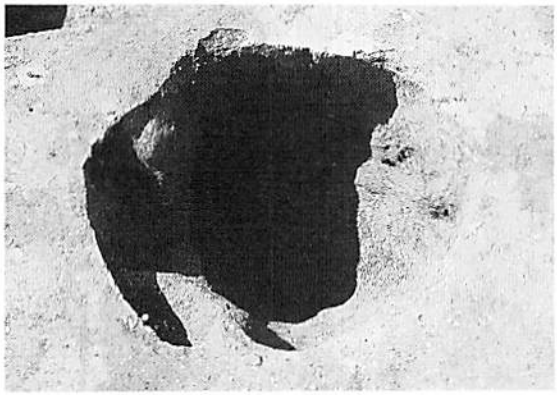
写真図版９　Ｄ５土坑４号、Ｄ６土坑１号～３号



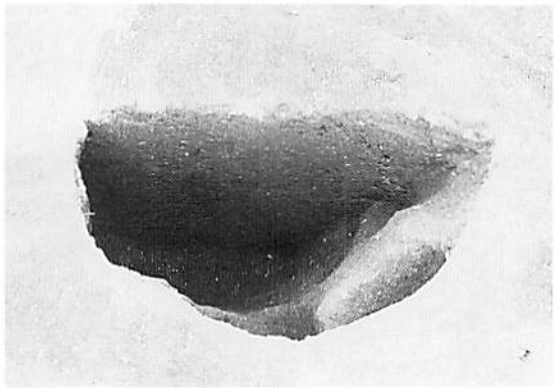
Ｄ６土坑４号平面（西から）



Ｄ６土坑４号断面（南西から）

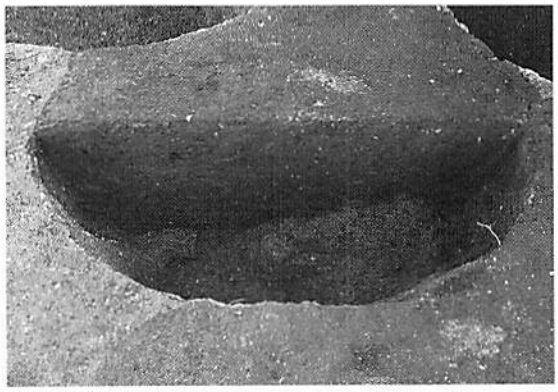


Ｄ６土坑５号平面（東から）

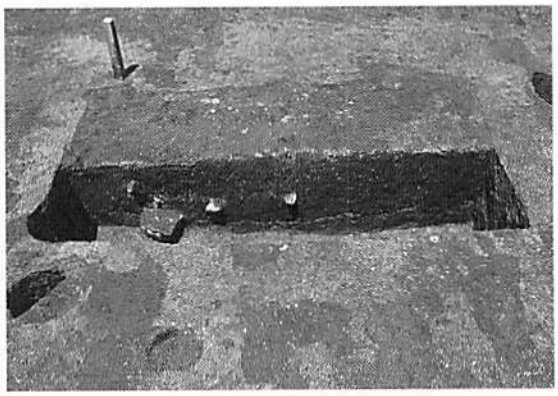


Ｄ６土坑５号断面（南西から）

Ｄ６土坑６号平面（北西から）

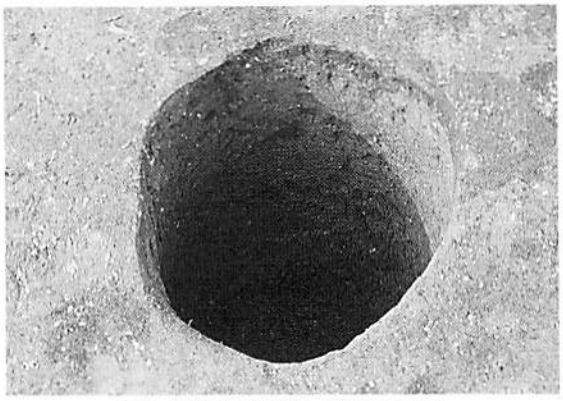


Ｄ６土坑６号断面（北から）

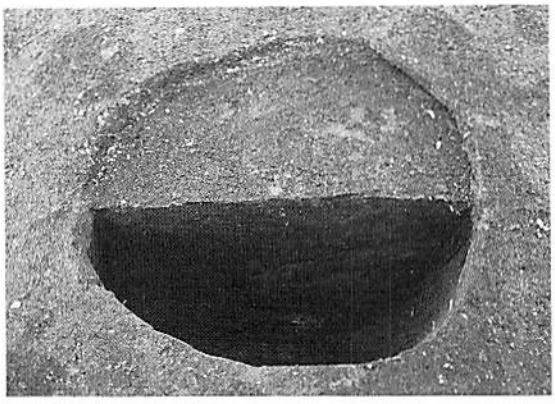


Ｄ７土坑１号断面（南から）

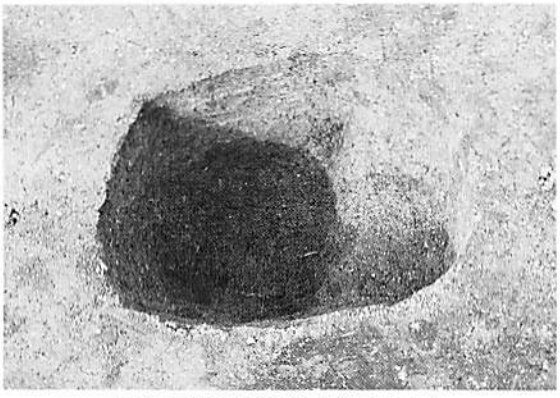
写真図版10　Ｄ６土坑４号～６号、Ｄ７土坑１号



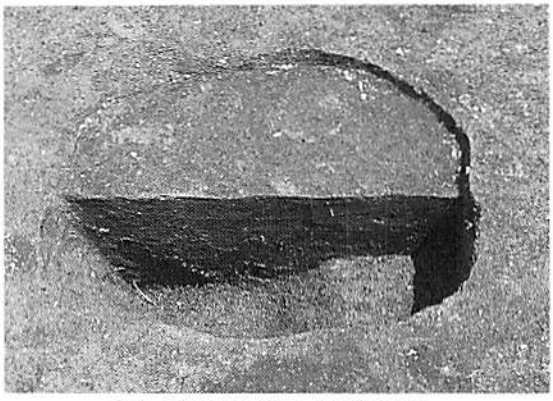
Ｃ６土坑１号平面（南西から）



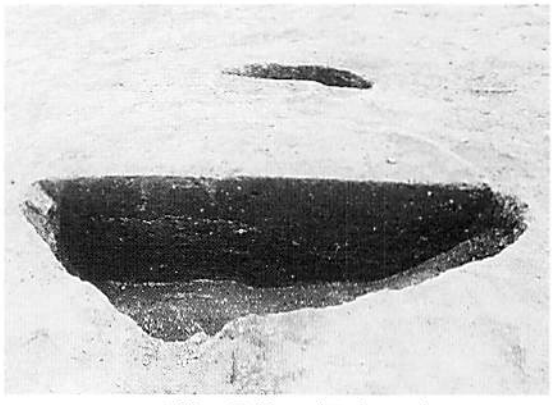
Ｃ６土坑１号断面（東から）



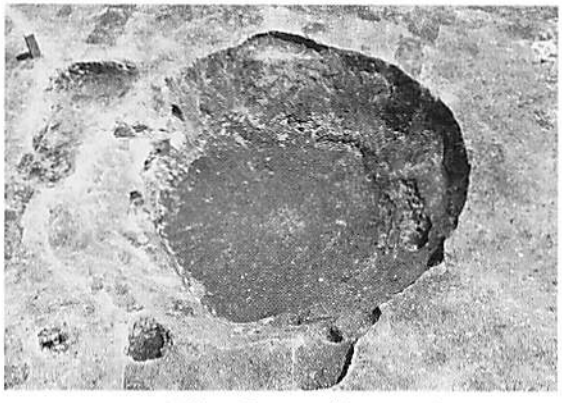
Ｃ６土坑２号平面（南西から）



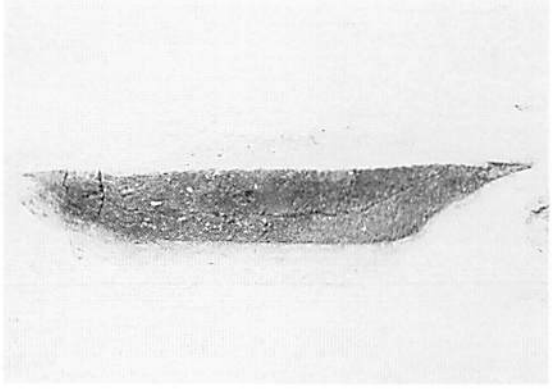
Ｃ６土坑２号断面（南西から）



Ｃ７土坑１号断面（北東から）

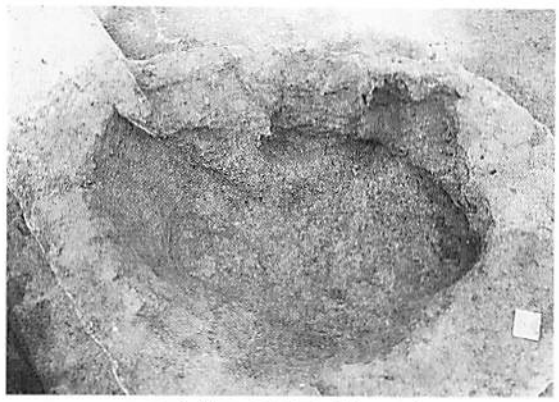


ｙ７土坑１号平面（南西から）

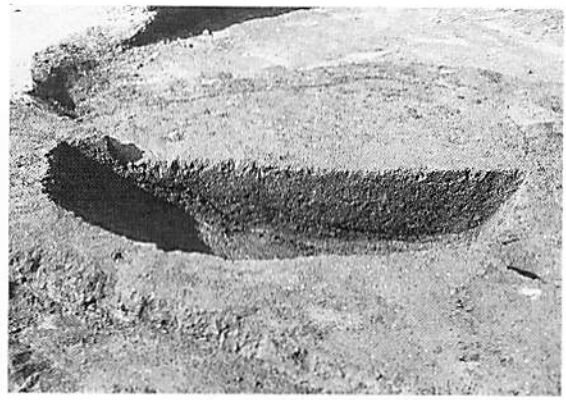


ｙ７土坑１号断面（北から）

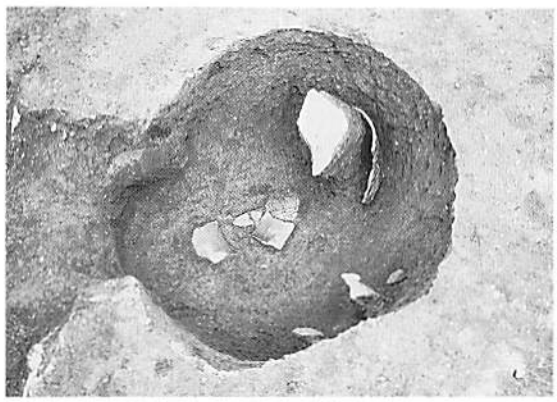
写真図版11　Ｃ６土坑１号・２号、Ｃ７土坑１号、ｙ７土坑１号



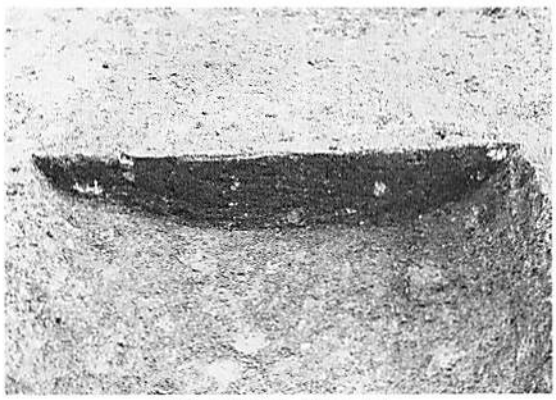
ｔ７土坑１号平面（南から）



ｔ７土坑１号断面（南から）



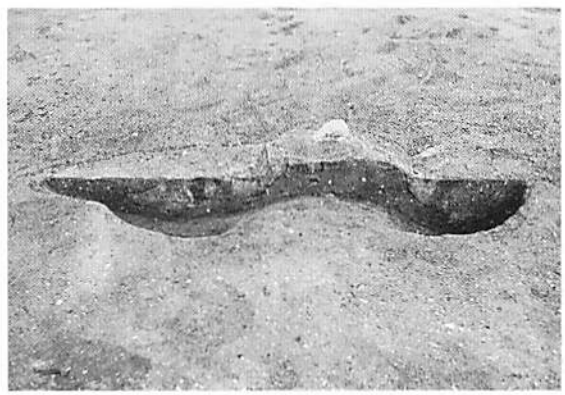
Ｆ６墓壙１号土器出土状況（西から）



溝１号断面（西から）

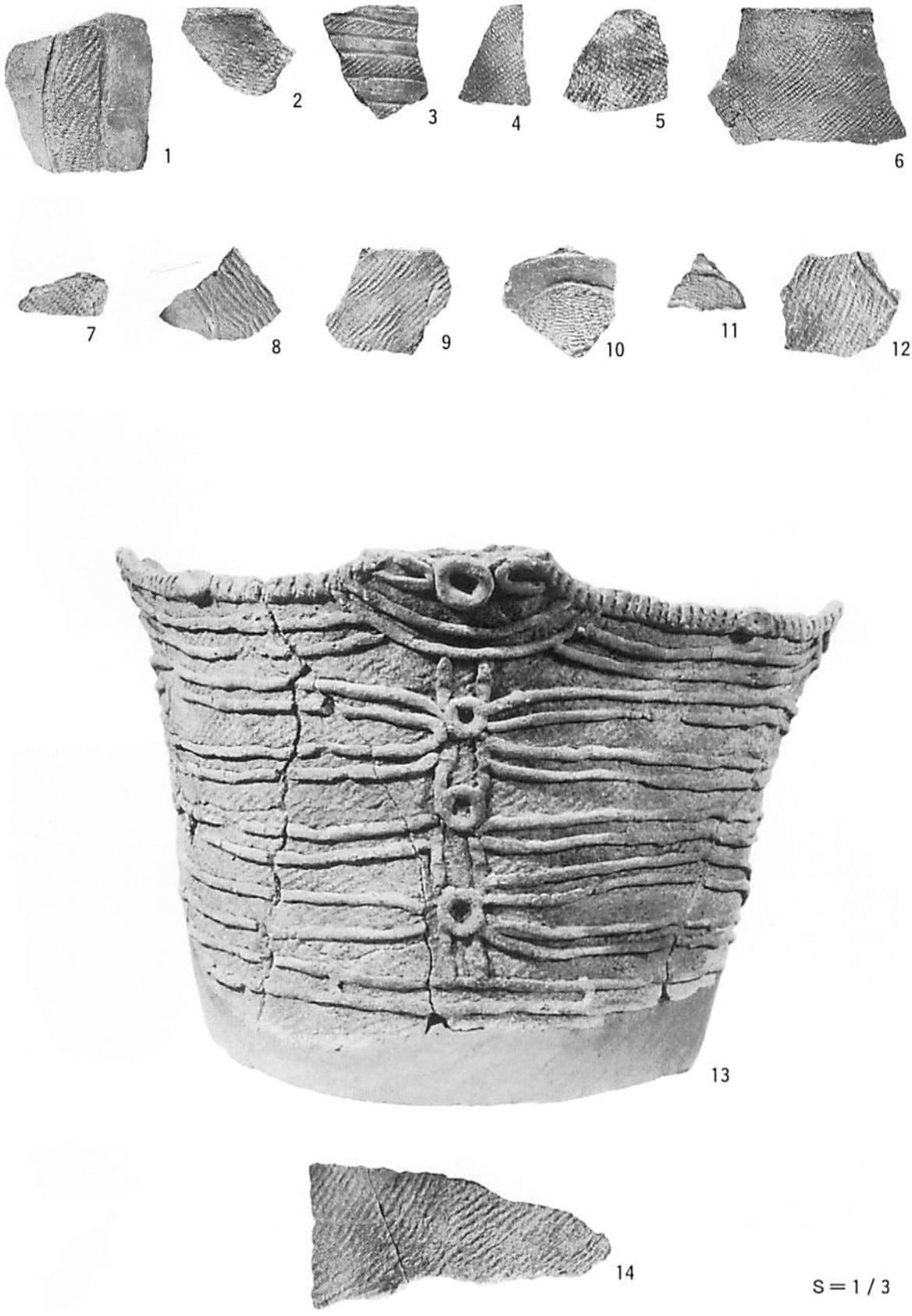
溝１号平面（東から）

Ｅ12焼土１号平面（北東から）

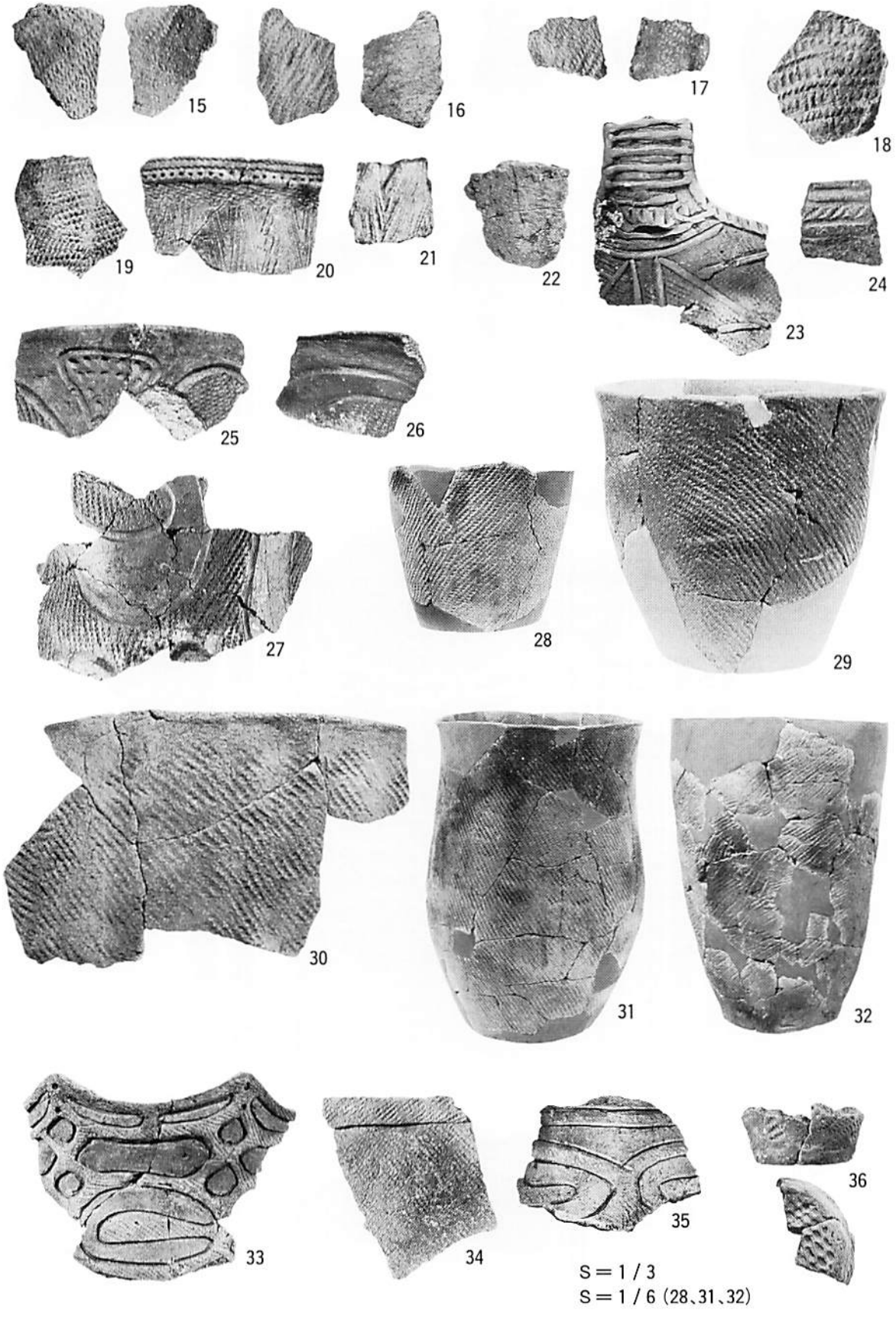


Ｅ12焼土１号断面（北東から）

写真図版12　ｔ７土坑１号、Ｆ６墓壙１号、溝１号、Ｅ12焼土１号



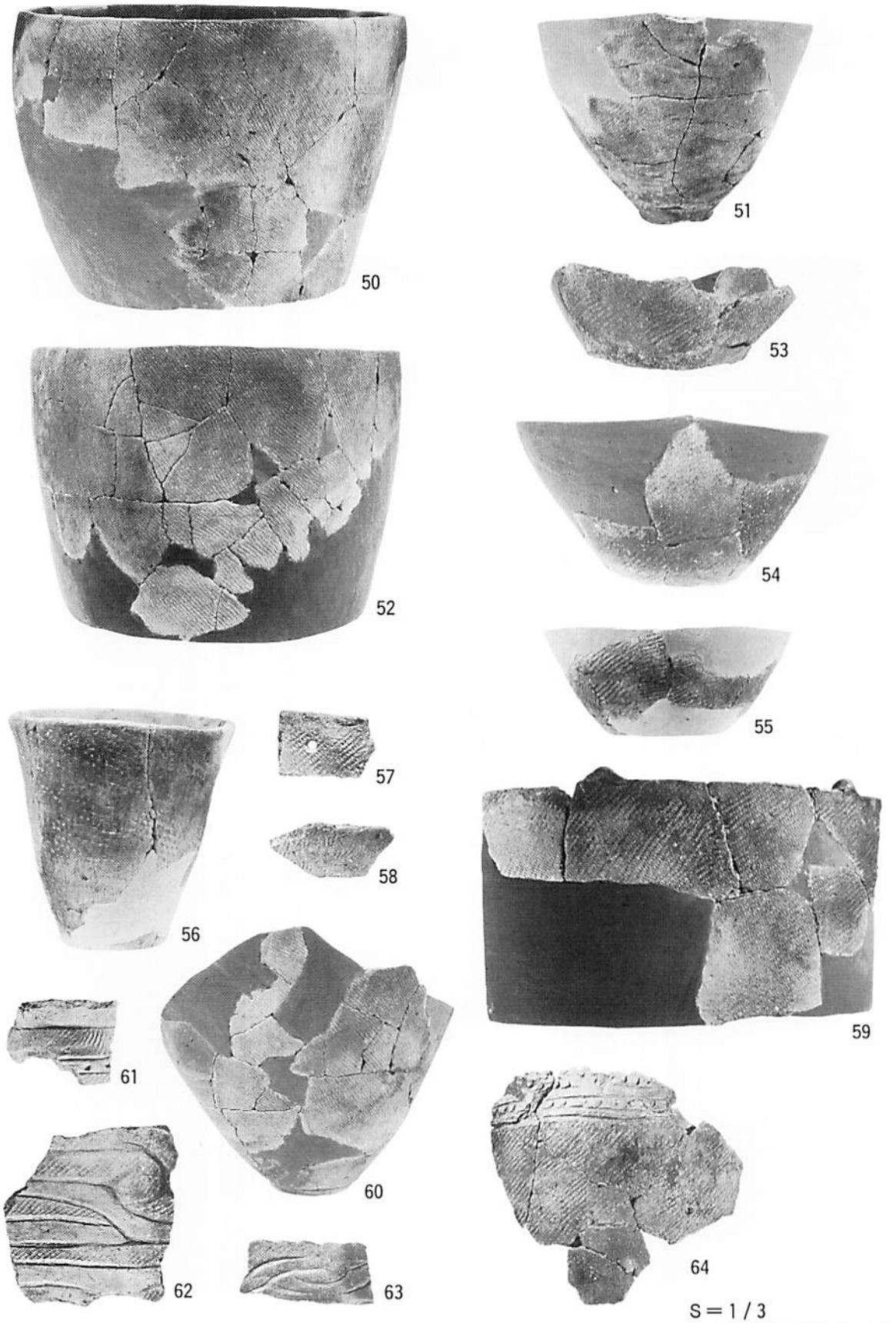
写真図版13　遺構内出土土器



写真図版14　遺構外出土土器（1）

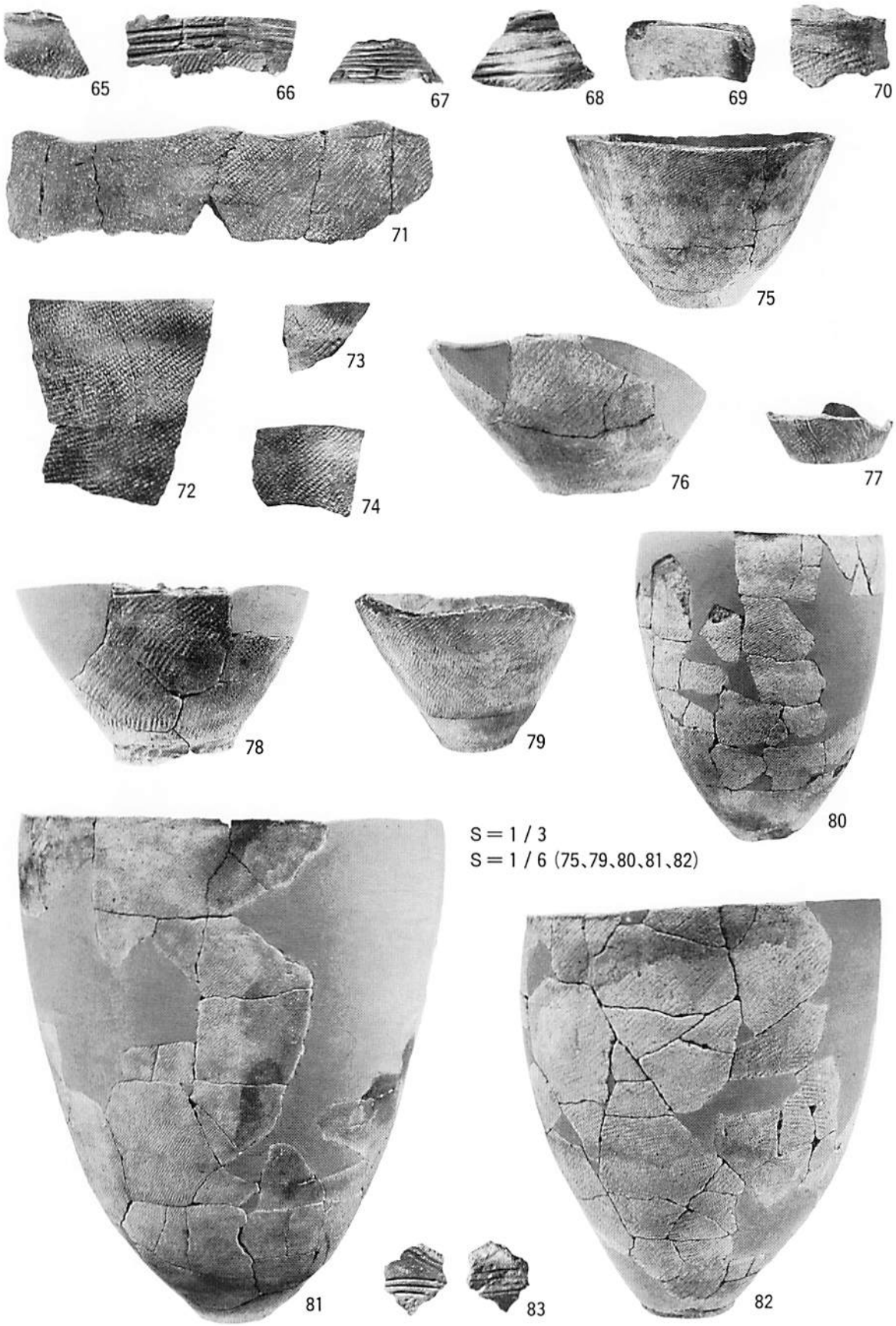
S＝1／3
S＝1／6（42、48、49）

写真図版15　遺構外出土土器（2）

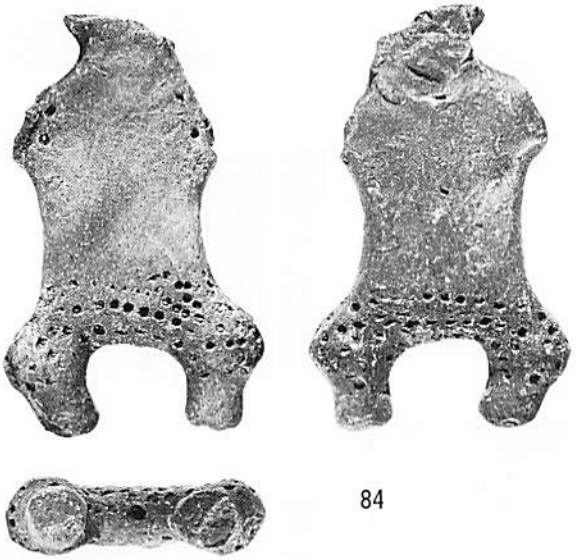


S＝1／3
S＝1／6（50、51、52、60）

写真図版16　遺構外出土土器（3）



写真図版17　遺構外出土土器（4）



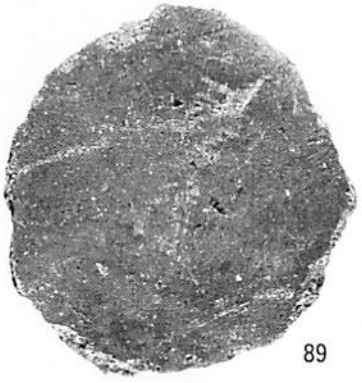
84

85

86

87

88



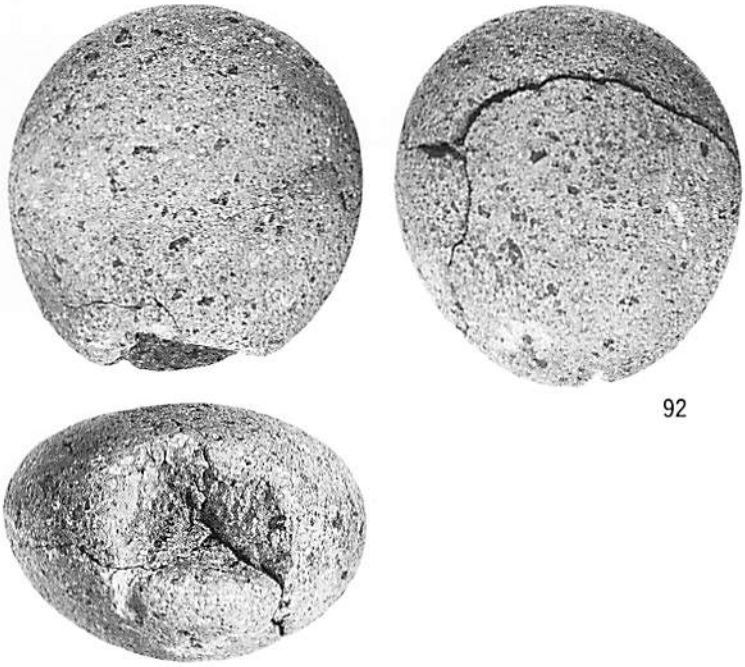
89

S＝1／1

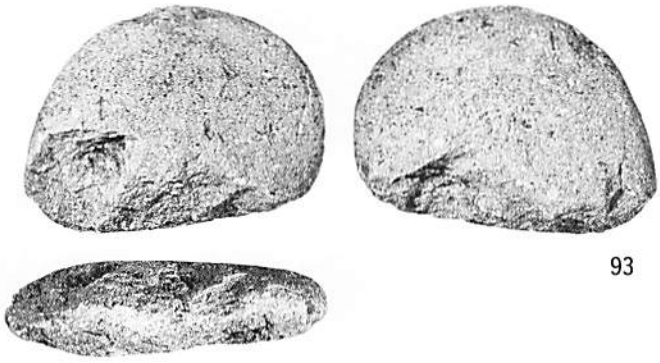
写真図版18　土製品

90

91



92

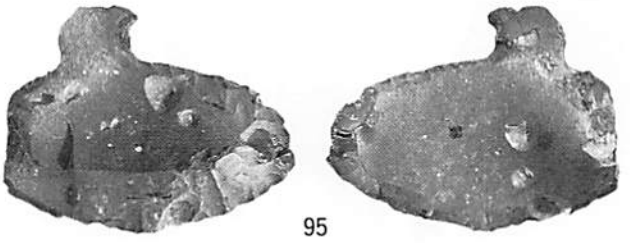


93

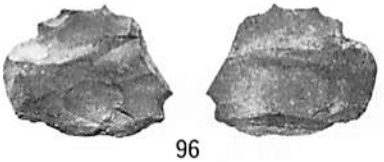
S＝2／3

写真図版19　遺構内出土石器

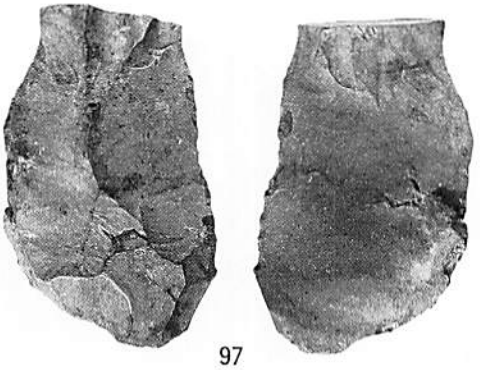
94



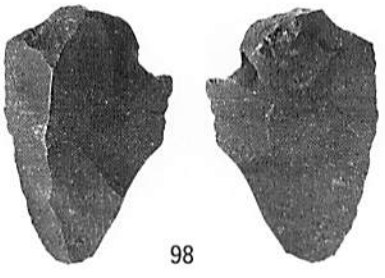
95



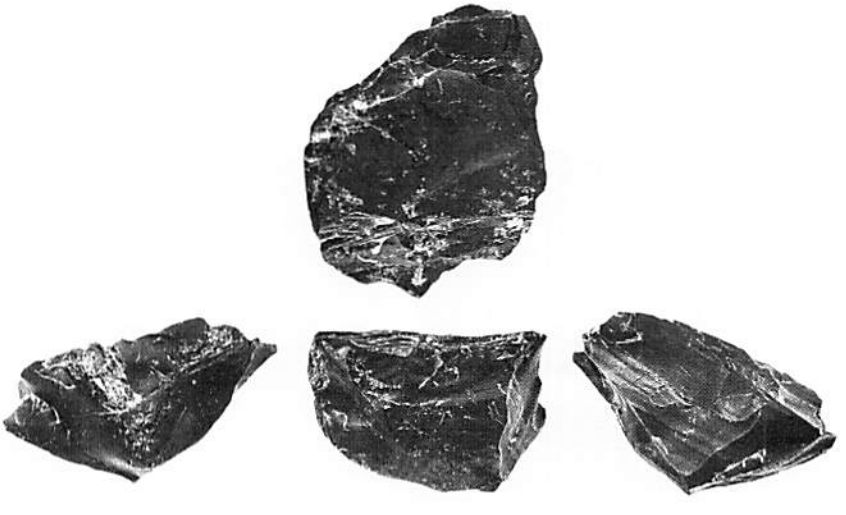
96



97



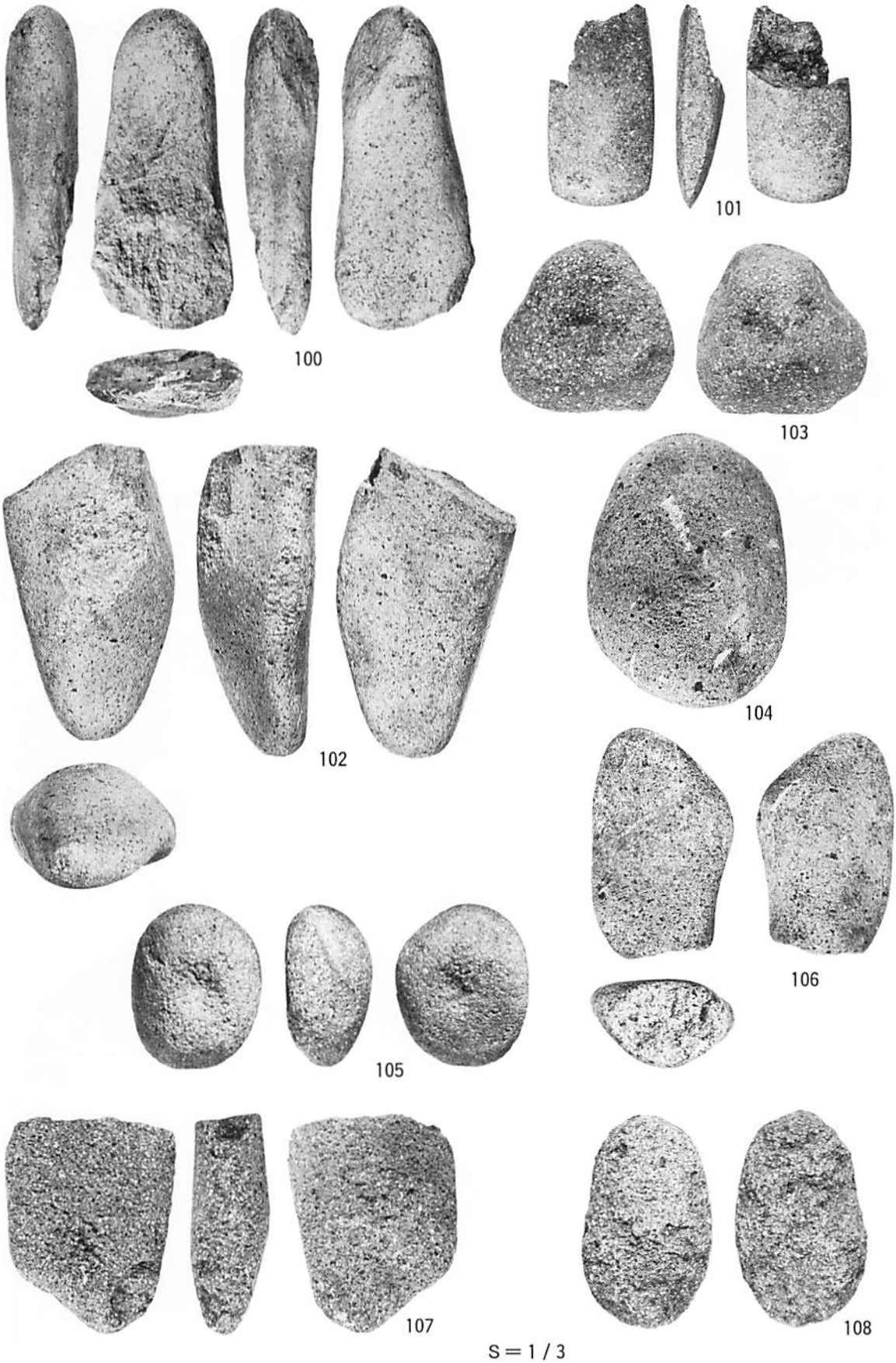
98



99

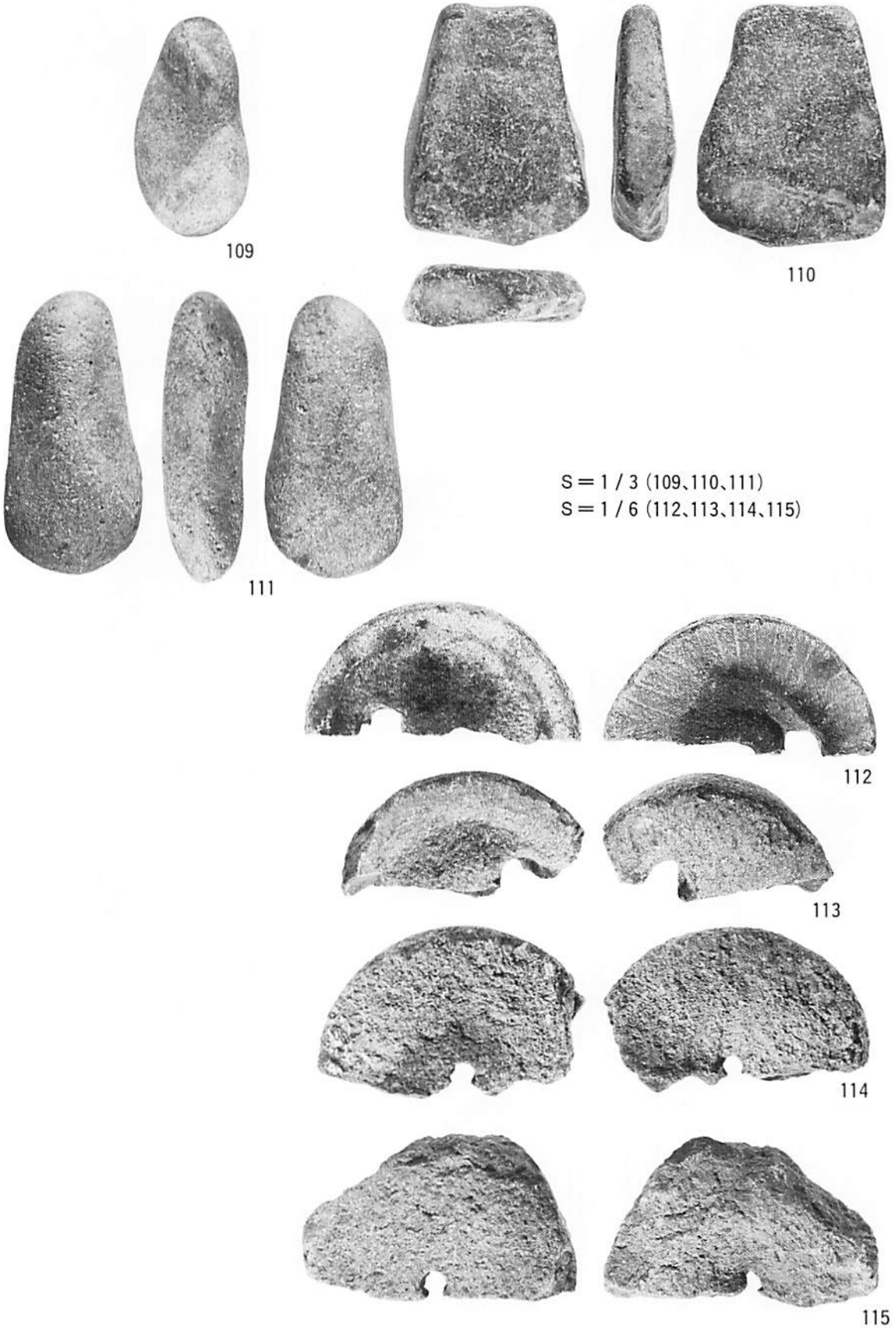
S＝2／3

写真図版20　遺構外出土石器（1）

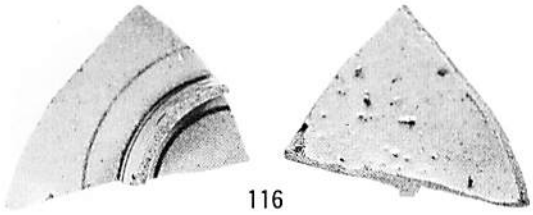


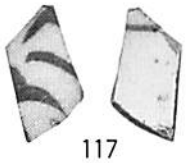
S＝1／3

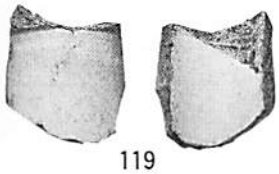
写真図版21　遺構外出土石器（2）

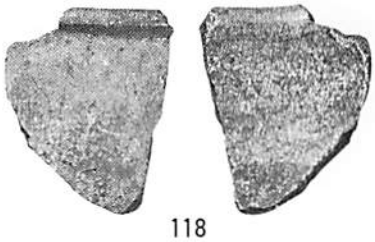


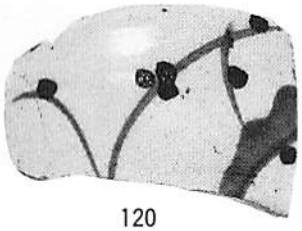
写真図版22　遺構外出土石器（3）・石製品

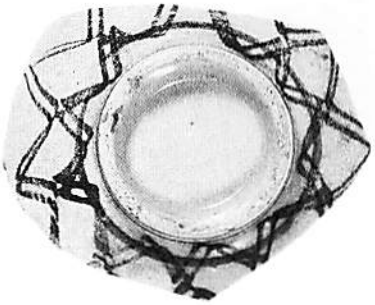

116


117

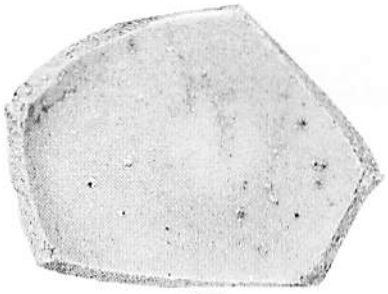

119


118

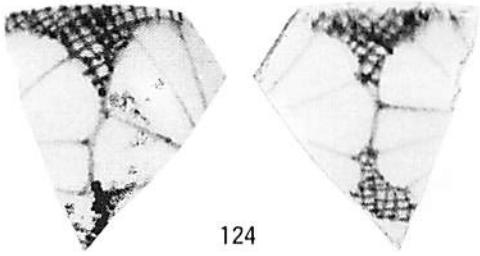

120



121


122

123


124

S＝2／3

写真図版23　陶磁器類

125

129

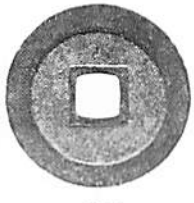
130

131

132

133

135



138

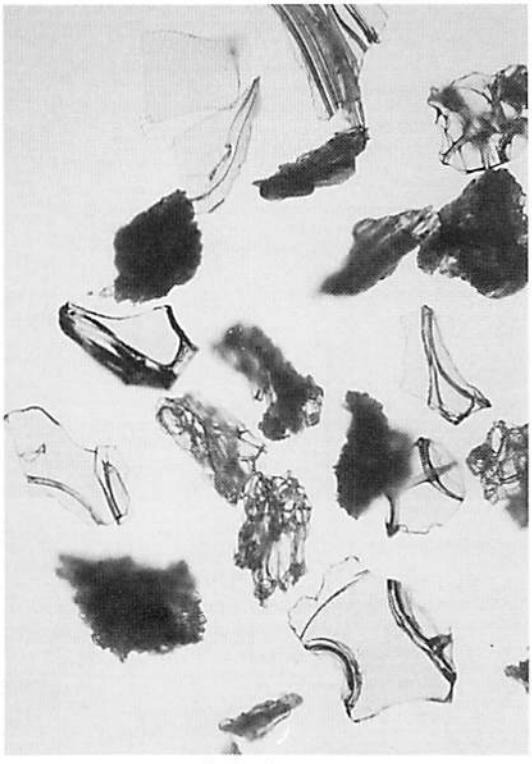
139

140

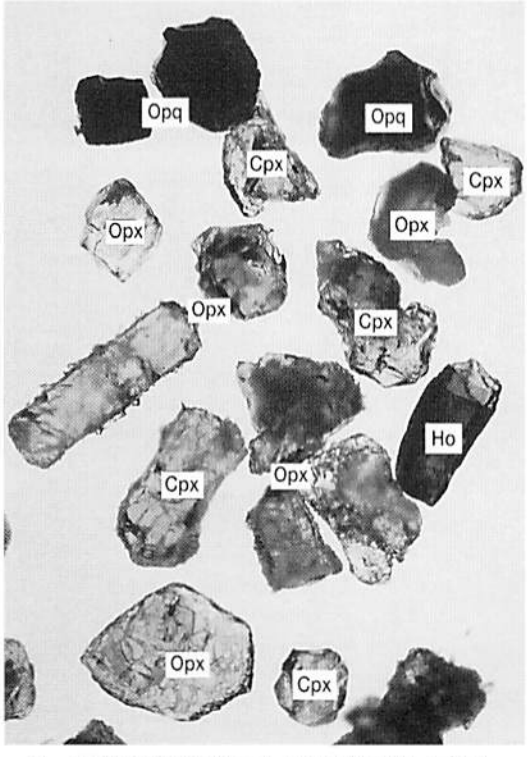
142

写真図版24　銭貨

1．To-aの軽石
（N10井戸１号火山灰サンプル）



2．To-aの火山ガラス
（N10井戸１号火山灰サンプル）

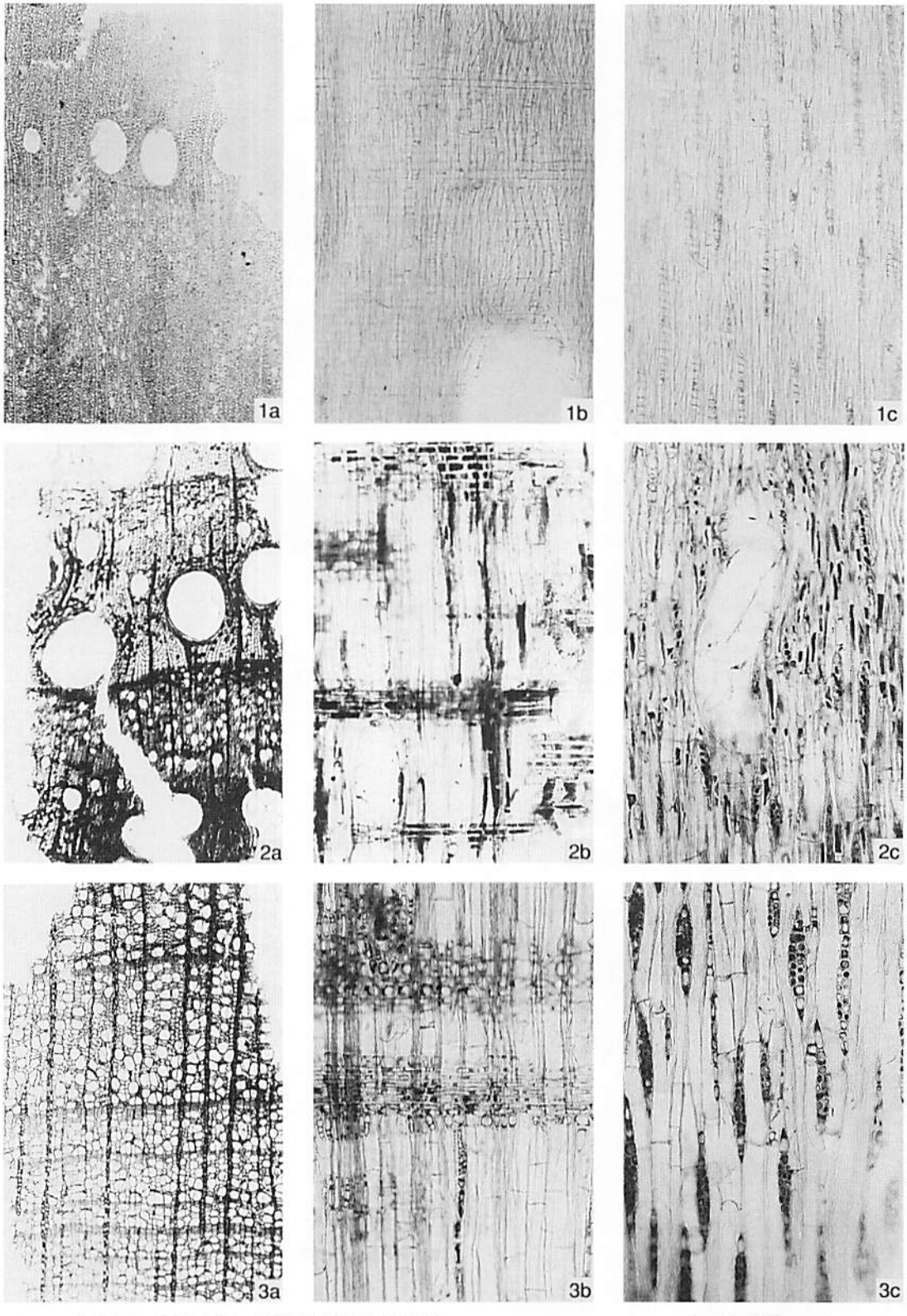


3．重鉱物（N10井戸１号火山灰サンプル）

Opx：斜方輝石
Cpx：単斜輝石
Ho　：角閃石
Opq：不透明鉱物

2mm
(1)
0.5mm
(2,3)

写真図版25　N10井戸１号出土のテフラ・重鉱物



1．コナラ属コナラ亜属コナラ節（外周木片11）
2．クリ（外周木片19）
3．カツラ（井筒）
　a．木口，b．柾目，c．板目

200 μm：a
200 μm：b、c

写真図版26　N10井戸1号出土井筒の樹種

報告書抄録

ふりがな	すわまえいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	諏訪前遺跡発掘調査報告書
副書名	東北新幹線建設事業及び新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第394集
編集者名	前田　稔・鈴木　聡
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185
発刊年月日	2001年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すわまえいせき 諏訪前遺跡	いわてけん 岩手県 にのへし 二戸市 いしきりどころ 石切所 あざはれやま 字晴山 15-1ほか	03213	JE09-1073	40度 15分 9秒	141度 17分 8秒	20000412 ～ 20000804	4,472㎡	東北新幹線建設事業および新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪前遺跡	集落跡	中世 近世	竪穴建物跡　1 掘立柱建物跡 2 井戸跡　2 土坑　20 墓壙　5 溝跡　1 焼土遺構　1	縄文土器 土製品 石器 石製品 陶磁器 銭貨	時代は特定できなかったが、古代まで遡る可能性のある井戸跡から井筒が出土した

平成13年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職　　員】

所長	伊藤民也	副所長	高橋正儀

〔管理課〕

課長	韮沢正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山崎善光	〃	佐々木光重
〃	山岸直美	〃	加藤美代子
主査	立花多加志	〃	湯沢邦子

〔調査第一課〕

課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門員	小山内透
文化財調査員	中田迪
〃	飯森秀文
〃	赤石登
〃	吉田充
〃	亀大二郎
〃	小原眞一
〃	佐々木信一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	小松則也
〃	岩渕計
〃	鳥居達人
〃	金子昭彦
〃	羽柴直人
〃	千葉正彦
〃	長村克稔
〃	星幸文
〃	佐藤あき子
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	村木敬
〃	北村忠昭
〃	高瀬克範
〃	丸山浩治
〃	島原弘征
〃	中村絵美
期限付調査員	小林弘卓
〃	江藤敦
〃	菊池賢
〃	井上信介
〃	川又晋
〃	吉田真由美
〃	坂部恵造
〃	木村ひかり

〔調査第二課〕

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	阿部眞澄
〃	飯坂一重
〃	阿部徹
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	佐藤淳一
〃	星雅之
〃	菅原靖男
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	溜浩二郎
〃	中村直美
〃	西澤正晴
〃	八木勝枝
〃	（阿部勝則）
期限付調査員	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	駒木野智寛

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第394集

諏訪前遺跡発掘調査報告書

東北新幹線建設事業および新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成13年10月25日
発行　平成13年10月31日

発行　財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
TEL　(019) 638-9001・9002
FAX　(019) 638-8563
印刷　川嶋印刷株式会社
〒029-4194　岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
TEL　(0191) 46-4161
FAX　(0191) 46-4165

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001